わるた

二十

哥ニ詞を名ニをわ

[V. 35]

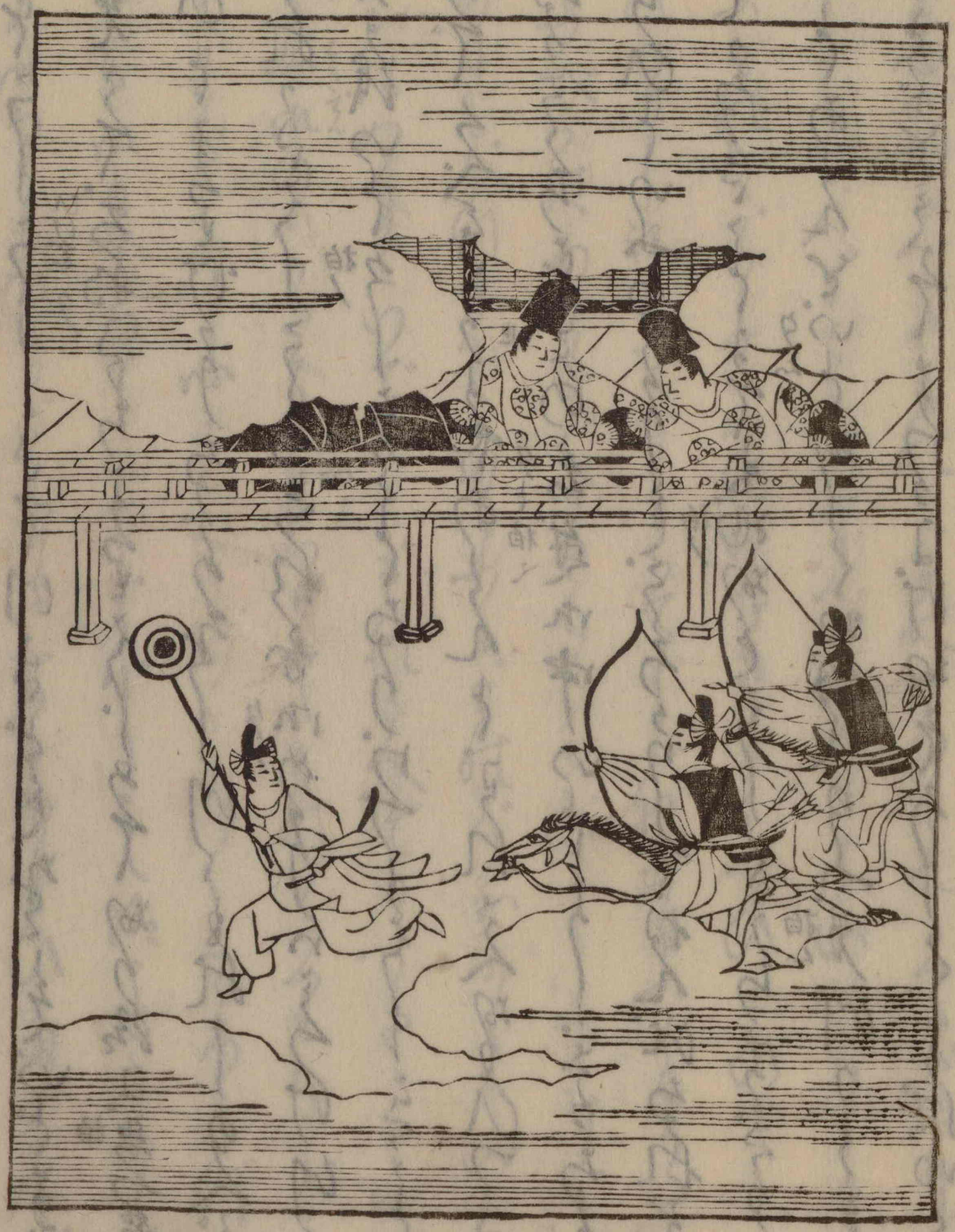
PL788
.4
.G4
1654
vol.35
copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551302

源氏年十一才又年六七才ノ事也　上巻　末とけてそう柏ん

ことつりといはんどうれたくもいへるれいでや
なぞかくことなりことなるさあへしひぐらりを
小侍従が居ますと云こ
なぐさめまてはいつぐすぐさん。うゝ家ひとびて
なしで。ひとことともの。のひ男ゆゑ世をなんやと
おもふつけても。お月ゆゑまてはおしくめでこしと
おひさしゆゑ。源僧のれゝあ。お夜ゆゑむころやそひは
三月ノ地
こんぴごゆりの日は。人ぐあまた。源へ来りのへり。柏ん。お夜
抱うくすぐろりしれど。そのあたりの景の気なを
こそやなぐさむとおひて。源へ来り給。地ぐれのりゆゑ。二月
とありしをすぎて。三月ちゑ。若つぐり。はき月なれば。口おし
と人ぐおもふ。この源僧よ。うゝまとねあるべしとこそ

つくて。例のけどひゆふ。だ太ちね（ひげぎ タぎう）さうれ（ひ）ありしひう
て来りのへがすけこちなどいどこゝりして。こゆことの
給しかと。うち（歩弓）ゆこのまてぐれこうどぎどもありかれば。
召いでゝおきを給。毎ぞんぐもつきぐしきうぎうん。
これまへしりへの心。こ雨とりまうるけさて。くれゆく
まくまかふまとぢむうかすものかしまともあはこて
しく。こぐるゝ夕かぎまゝ。ちれのかげいとぐこうこと
やしてうしで。人ぐいてくゑひすぎまて。えんなう
かけもれどもこなるゝ。人ぐのれこうろこえぬ
べきをやなぎのまをまくこびあて川べきとねる
どものかけがりていとうむぎんなりや



地
せこしこしきてけさどもをそそいどまを
先とて。ちねぶちよるをそじめてあり給に。柏 楽つ舞
ひとまをけりなぐめをしけくもれしのへぞ。
かれるそしこころもれるれめりいこうけけく。
ムおす紙いと夕しきことなり。ワづもしきこと
いでくべきこうまやあんと。これさんあもひつさ
ぬうこちせ。地 この去遊れ中いとよし。さうなう
らひといふなりもこころかりてねんぜなれば。
そうなきことまでも。柏 地おもそしくうちまぎらく
ことあんをいと夕ムおしくおぼしのふ。柏ム 男げうを
ちとぐをこそまつくまばゆく。

うら心はあるべきもれか。なれめなるんまてごろり。
なしうしぶ。人はてんつるべきかるまひはをじと
さふもれを。ましてあはけなきことさひまびてを。
かれありし様こそぶるえてしがれ。あまふことうる
らふべくはあらはどかたちしさびしきなぐ
さめまもなけかんとあまふまもれぐるあしいか
でかはぬすをいでんとそれさんぞうきこと
けり。女れ（ろくでん）のれかたりまいりて。（拍ノ）もれがたるをなど
ぞまぐらりし心ろ。いとおくかくこころちび
りしきれもてなしまて。まかまえ給こともなし。
うられなりしひにぐる。けどをくなしひ多なを。

ゆくりかまあやしくいありしつぎぞうしとは。
さすがにうちおぼゆれど。おぼろけにしめたる日が
心うし。あさくもしひなされず。去定より（柏ノ）来りのて。
ろなうかよひ（女三は似うよひ方をこ）ぬへる所あらんしと。絶とじめて
ミなるに。ゆひやうなどいあらぬれうちなれど。
さばかりの山有様もたゞいとことまて。おてにな海め
しくおりします。（冷）うちの山孫この。おまたひきつれ
たりけるもしらうどもれ。所ぐにあがれて。此（去定）家にも
まいれるが。いとおりしげまてありくをうるに。まづ
（女三と）せひいでしられば。（柏河）六条の院のひめ（女三）家の山うたり
もべる孫ことそ。いとこしぬやうなる人はして。おりし

こゝへしかちつまちんにはんしとけのしうらまへで。
扨ハげにしらしくあき世給ハれ心ふもしくと
しきのまか。りし猫のかてのつきまめん家さ歯して
あんちんべうし。おあずやうちあれなれどこゝうな
うしく人あれさうハ。あやしくかりしきあれは
あん納うちかど。ゆうしくおげさるぞうりこゝてあり
給ヽ。ふくうしめねこゝそ。なりつかのれうくやうつる
へて。宮しさを給されば。まへしとうまへらげまいと
てめうしげちうわてこあらさうと。人べけりしずす紙。
出つ帯もしふづのんとおぼしうもしれさしうを
こゝにきて。日ごろへてまつりめへうげしてあるし

より。朱雀院のとりつきそ。おぼし川ゆきをぬひし
ゆゑ。此山ずとうをくれ男そ。又この家（兼文）にもしる
しうまり。心よを男しうり。此とあるをしへ男
給とて。此（柏詞）孫こだあまりこ川どひ給ふるを。いげ
このうし人（ねこを云こ）いと。郡ひてうけぬへり。いとらう
しく覚えて。かきあつて。つねうり。家（兼文詞）もげにおしき
さ後しうりけり。心あんまぶあつきがうきけ。こなか
まぬ人をしうにやあらん。こしあるゆこだ。ことる
をとらずりしとのぬへば。これ（柏詞）もさうつきまへごろも
おさゝくもべしぬもれあれど。その中にも心し
うきはとのづらしくまもあ給ふんしあど男して。

まさるどもさふらふめるを。これもしたがし給ふり
あづかんと申給。うろのうちにあるがちりおこ
がましく。かゝハおぼゆ。つねにこれをたづねさるまで。
よるもあさりちくふき給。あけてば。孫このかし
づきとして。なでやしなひ給。ひとげと紙りし
心もいとよくなれて。ともすればこゑのすそにまつ
れ。よりふしむけるを。まめやかにうけしと
ぬいといくながめて。おしちかくよりふし給
へるにまさて孫しくといとらうたげになけばかき
なでしうるてもすむれとほゝゑまる

柏

こひまぶる人のこゝとてなしをばなれに何

とてなくねなるしん。これも昔の賢(ちぎり)まやと。かなを
こうのゆへがいよくらうこげりしなくを。ふと
ころは入てなぐめぬゆへり。ごぐちなどは。おや(後世詞)
しく。まもるなる孫このとゝめくなる。かやうなる
まれ。こいれ給りぬ此心まとこゞめなり。家(其家)よりめす(ねこを)
まもまいしをず。(柏ノ)とりこめてこれをうくしひこゝふ
左(比)だ殿の水(む)方は。大(以)殿の兵遊よりも。太(タ)だ殿の兵
をばなん。むし(むふ)のまくまくとしぐ。世事しぬへり。
心だんのかどくしく。けぢくおもすう兵(む)なくて。
ゆいめんし給時ぐも。こまやかまへぐてこゝろ氣也
なく。もてなしこまへれば。大(タム)殿も。(以石姫)ちげいさるどの

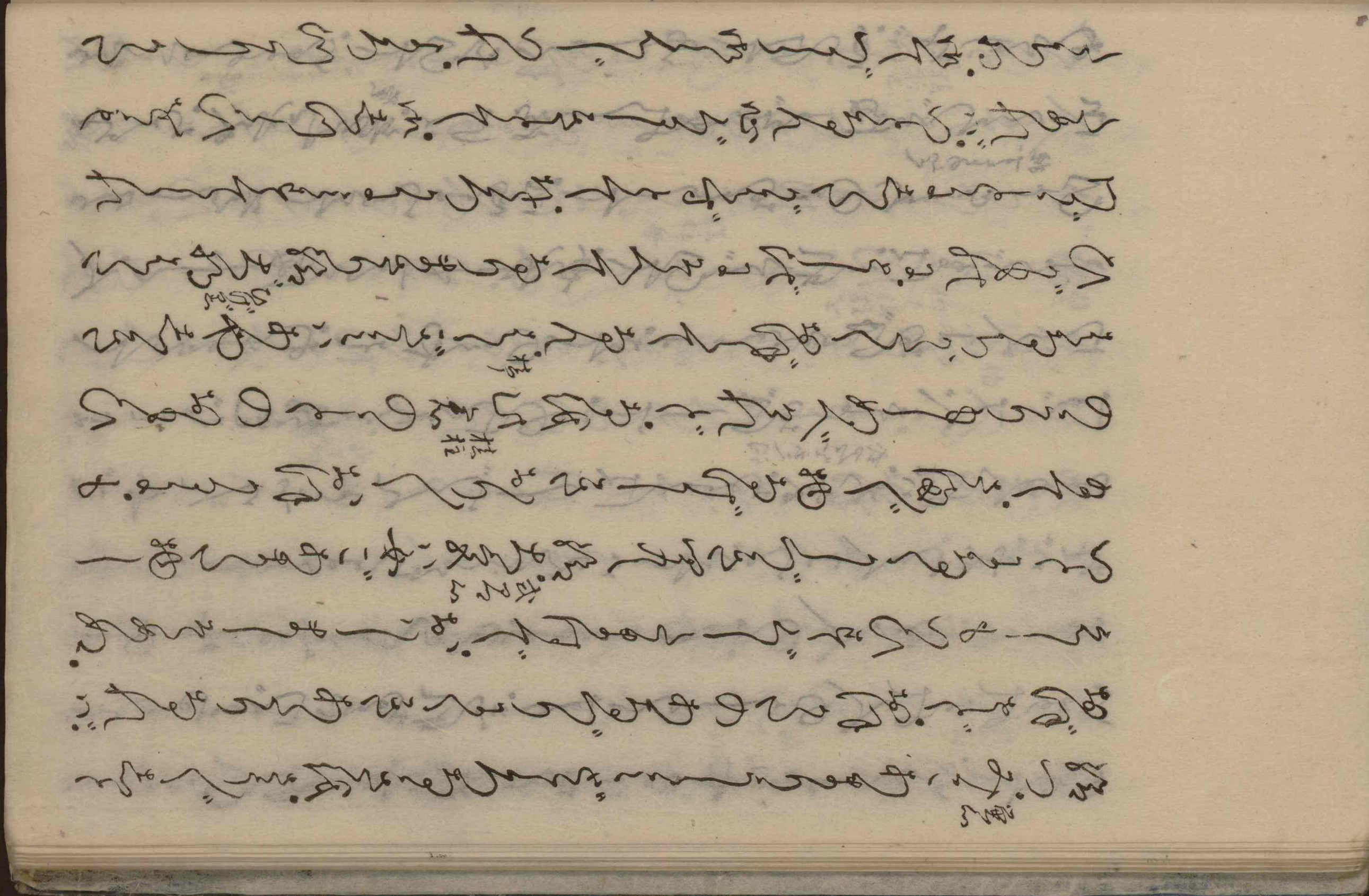
うとくまくともびかいげあかれ心ざ侮まゐおまかり
あるは。さ侮こともあかれむつびかまて。あまびうもし給
へり。おもとこ君。いまはまして。みもどめれわか君なさ。
あてきあれきて。おもびあくまてうしづき宮君給。
このれもしまい。おもとこ君ぞちの限あれど。さうぐく
しとぞ。みれまさきしこの姫君えでまてうしづろ
まほきつくしのへど。おほぢ宮おもどさくまゆかし
給いず。ば君もゆるま。人々くあるみさ侮まてこんと
おぼしの給。みこのれおぼしいやむびどあすがら
まもこの家の中心よもいとこつかくてこのことく
そうし給へどとが。えそむきさ給いず。こうろがらしき

物にさひ罪しのへり。おほかたもいまめかしくおもし
すう氣（式アロ）にて。此院（源）おほ殿にさしつぎなりてえ。人も
まいりつうまつり。世人もをもくおもひ罪しけり。
大ぬ（ひげ黒）もさる世のおもしとなりぬべきさまにかたなれば。
姫君のれおぼしなどてかはかなくはあらん。さて
出る人ごとにふれておほかれど。おぼし（式アロノ）もさぞ
めず。柏（柏）来つ縛をさも気色ばまづとおぼすべかれど。
猫（ねこ）にはさひ（柏ノ桂柱を）おとしなりにや。かけてもさひよらぬぞ
くちおしかりける。（桂柱ノ母）よくこ君のあやまちをひがめる
人にて。よれつきのありさ後にもあらず。もてけち給
へるを。口（桂柱ム）おしこさもれにおぼして。まくまく（む）のれ

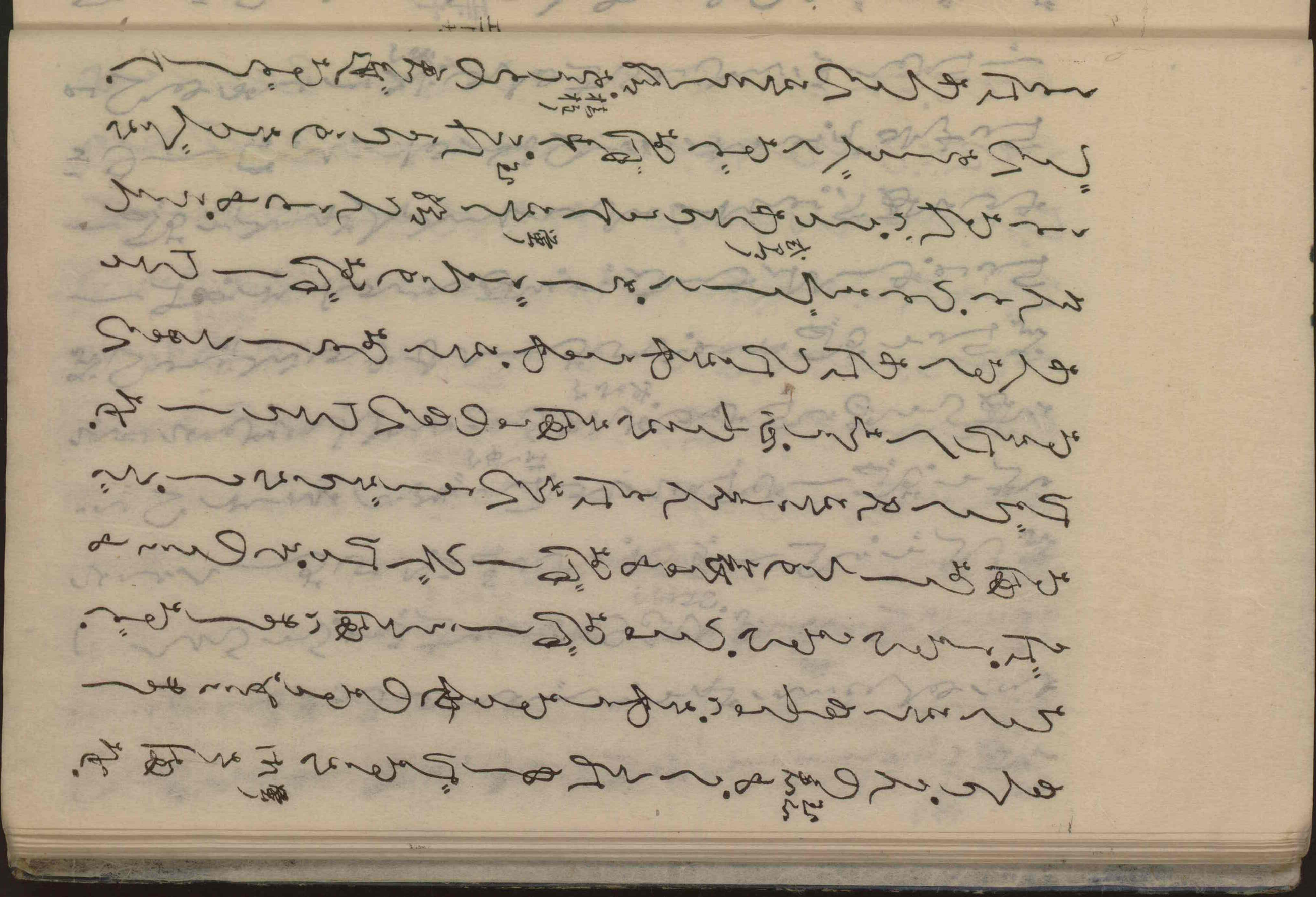
あたりをば心つけてゆしくさひて、いまめきたる
れこころざ海まぞもれし給ける。黄昏、宮、ちなを
ひとところのこおもして、此心につきて覚しかる
ことぐもは、これたぐひて、世中もすき海じく、人
けんにおぼさるに、さてのこやも、おまえて
すぐすべきとおぼして、このけらに乳色だこよ
まのへれば、大宮、ちなはりしづんとこりん女ご
をば、宮ぐんにつぎてハ見えたちまこそハこを
ましめ、ゑゑ人のすくよりに、ちをくさきをのこ
いまれよれ人のうしろすり、されなきつぎなりと
のみて、いたくもなやましなり給いぎ、うけひきや

拙ずことのなく

式尼を云之詞



じけるくれこころはいれぬへり。寂(蛍ム)もうをぬひは
けるゝ方をよとれはこひ罪ぬてさぐむりしのは
ありさ海に。ゝるそまつりさん人なるんとおぼし
けるは。おしくはおしねど。さ海かたりてぞ。まれし
給けるとおぼせはくらおしくやありなんかよひ給
さ海いと抱うげるり。ち寂(式君ム)いとこころづさるさはぎ
れと。おぼしなげさたり。ぼ(桂ノ母ム)も。さしそひがゝ
給つれど。うけし心いでくる時ハくらおしくうさ
よとせひまて給。ちぬ(ひげぎム)の君も。されぬよいといくく色
めきぬへるこゝ(蛍)をとゝもじめよりけれ心はゆうし
さ海はざりしことなれバまや。まれしとおもひ



くるれはしきをしらずかにかくうらずさそ
まつりしなどするに心ぐるしくもてもなれたる
れ心はなきに桂柱ノ祖母なり小方といふさがれもれぞつゆま
ゆるしなくゑんじ罪し給みこそ式戸石詞ちはのどうまふさ
心なくてこゝ給りんをぐまこそたるやうなしぬなぐ
さめるはせふべくれとむけりなふ紙宮ムもなり
きくのひてはいと罪なしきぬことうなむしいと
あはれとせひし人をきてもなをもうなき心の
すさひはこえぐりしかど、うらさびしき柏思ん
じはとよなりしもれをころづきなく、いとぐ
音をとひ罪しのひけしふるさとうちなるめ

がちにのこなりします。さいひ(地)けしを。ふるこうせば
かりになりぬれど。かくるかくしにめなれて。ぐぐさる
くるの此中にてもぐし給。(此月二四ケ年のうすをこめたり)てゝ年月も
うきなりて。うちのこ(冷)うどれ位(かね)につきなりて。十八
年(源四十六戈にあたる之)になるをなひぬ。つぎの君となるをなふべき
人こなりしまさず。もれしも人なきに。よれ中もう
なくなばゆる氏。心やすくなるふ人ごにもこひめん
し。ひとりしぎ海にころとやまてのどうなすぐ
さ海ほしくなんと。是れなばしの給をつるを。日
ごろいとをもくなるやまをなふことありて。にいうに
なりぬさをなひぬ。よれ人あらずさうるものゆらば。

くのれ給ことゝおしこなげくど、其家もおと
なびさせ給ひまこれだ、うちつぎて世中のまつり
ごとなどことまうちうけぢめもなりかり、おほき
おとぐらじのへうまりて、こもりねまひぬ世中の
つれなきまよりうしこきみ冷どの志も位をさり
まひぬるまとしかきのうしかりをうけ世
なまかおしうんと思しのまひて、左大将右大臣
まなりおひてぞ世中のまつりごと川うまつり
給けり、女御の志はうしかれ世をもまちつけ給ひで、
うきまひまれば、うぎりあり御位をえまへれど、
ものこうしろのうちしてうひなりかり、六条の

女(以右唱)れのれもしのいちの家、坊(ぢう)りねこまひぬ。さな
べきことゝうねておもひしうどさしあらうては
れめでたくめおどろうくけぎ女なり。右(タ)大将の君
大納言まゐりなひて、例(タ左大将ノ行給ヘ)の右まうつりなぬ。いよく
あらまほしきれなりしひなり。六条(源ん)院ハおりねなひ
ぬる頃(れ)衆(ぜい)院のれつぎおりしまさぬを、おりぎれ心志
うちまゐ頃おなじすぢなれど、さひなやましきれ
ことなくてもぐしなへるがりまづゝいうくれて。
すゑの世までいえつふまじうりけるれすくを
口おしく。さうぐしくおぼきど、人なりのこまひ
あしきぬことなれば、いぶきくなん。妻家(以右女房ノ事ヘ)の女れも

ゑたちおまるゝがほひめて、いとゞれ出てなしび
なし。源氏のうちつぐき結(きつぐ)まねめしべきことを、世
人あらずおもへるまつけてを、次泉院の結(秋好ん)も、ゆへ
なくておながちまうくしとさくまへるれ(源)こゝろを
おぼするいよく六(源)泉院のれことに、とし月より
そへてうぢりなくさひきてしくまへり。院(冷)のうぐ
おぼしめしまやうまゝもあきも而せうしでいたり結
などしつゝうくしもげるめでたくあらまほしき
れ事結なり姫(女三)宮のれとは、(今上)うぐれ心とゞめてさひ
宮の結おぼうるのうまもあまひくもてうしづれ
なの後、六のうへ(紫)のれいきほひまは、えまさり

ゝ雨ゝぞうしは山ゝまゝるは中（添ゝ笠ノ）いとうりしく
むつび罪かりしまひて、いさゝかあるゝことなく
へぞそもしし給いぬ抱かしいまは（笠詞）かうおほぞうの
すまゐるしで、のどやかるとゝるひともとなんとぶ
このよいいかゞりとゝゝてつゝちすゝよゝひ
まもなりまゝりさりぬべきさ雨まそしゆゝして
よと、まめやかる罪を給ありくあるとおりまじく（添詞）
つゝきれことなり、こゞろ、ゝゝはいあること
なれどさまりてさうぐしくおぼしあひおるせま
うちゝんれ五程のうしろめたさまよりこそなるべ
山れつゐるそのことくげるん後にとゝもりくこと

二十二

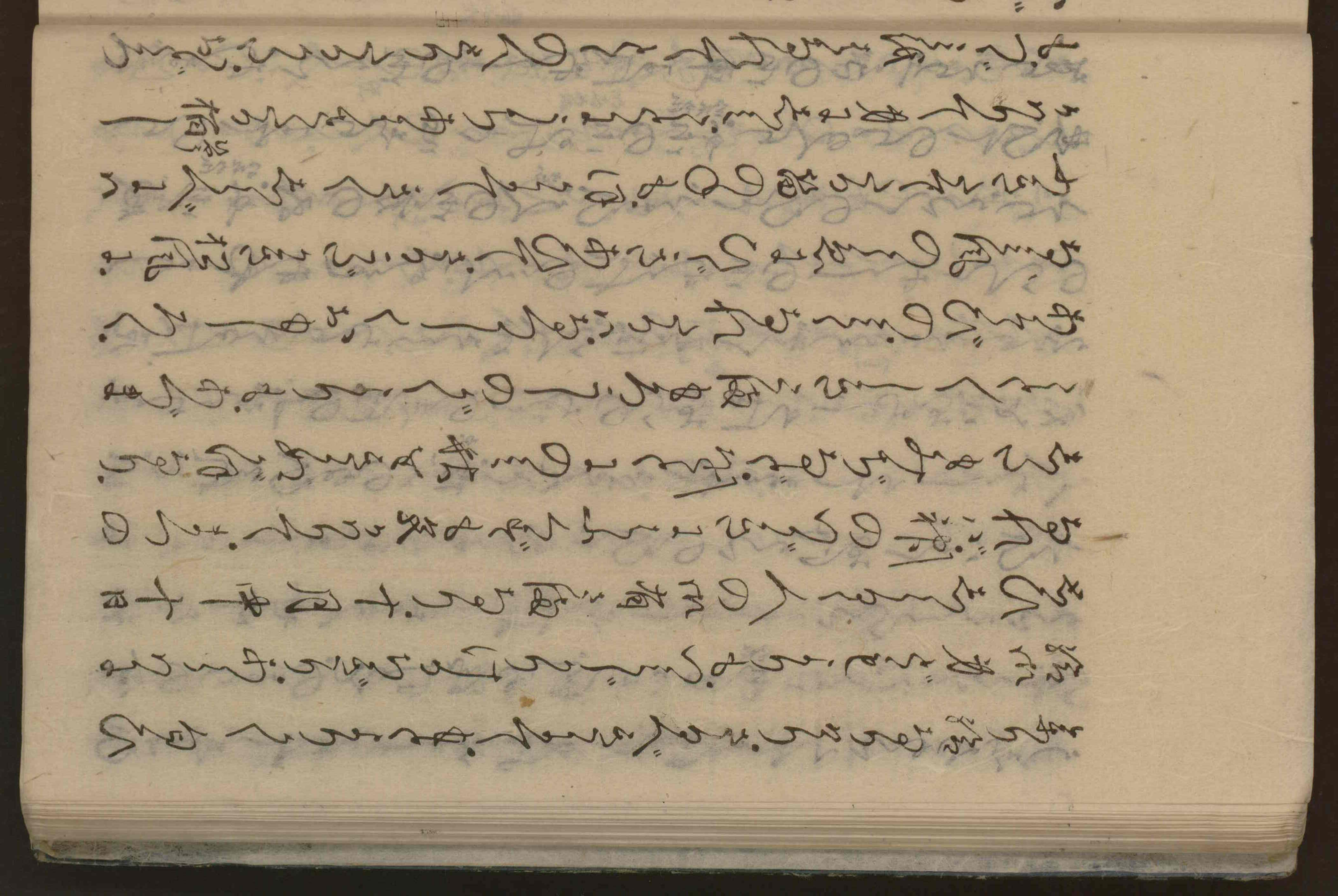
かぼしなれなどのゝさまくけ思まゝ本れのあ。うぶ
こまことまことのれかやまゝそなしさゝてあひて。
れゝるハうくれ。みれれうしるゝまてひゞしきまゝ
しめへるしまで。中くゆくさんさ礼もしげる
めでさうけり。おまおもやゝもすれバ。ゝ色ねよわ
ひびのなまぶどもすればおちつ。めきさんへのごひ
こぶらそ。今なゞさうれしげなうゝあしま然て抱
し給すくうしの礼親。うけぐもくしく海さん
とて。是家の如礼のれいのりてまりで給えとて。
みれもこ。あけて此しんずれバ。さ海ぐのいつあし
さくしくぶも如ほうり。さうしごとの委秋のかくしま。

うなしぎなげき世のいのりとくらへ乳(ぶん)どもげる
うれいさほひなしでいとくしくまつかべきこと
ともしひとさてざりそりこゝもしまうきこう
ともひきのざえぐしくしくしくしく仏神も
きくいれぬつべきこの柴あきしうなりいつぞさう
やまづしのひぶり心ようこゝもをしひより
けんとおもれまおほけなくもあらんず。さうべき
まてこゝしうそあるまをやけしけり。昔志
よれとこなひべまやきそんなまゝ意しめぐしまる。
いとゞうぐしくもあげされざりそり。けさびハ
この心とがあらりし給ぬず。こゝ僧(源)のれもれましまで

まていでさら給。うしづくひのまれさはがしかるを
しほどそこらのれ鞍(ぐん)どもそれもたしけくし
ゐへれどもおまを世中はかくあたしましてゝ
かいろくのさんをゝゐふにけてを神のれ
さすけハけまれがゝくて。基の生へもぐしまえて
さをゐひて。まうでさせ給。ひぐき世のつゝあらず。
いとゞくことぞそぞすてくよれまづくひあるまで
くとそぶりをゐへど。かぎりありかれどめづらかな
よそほしくあん。じゃぎ遣りも。大臣ゐる所をなさな
まてハそれつうまつり給。まひ人ハ志ふのまけぞの。
うちきまけばよ。うけぐちひとしさかぎりをえしせ

絵、此えらひまいらぬをばたちまうれへなげきたら
すきもれどもありなり。蓋いぞうもいたし水、かもの
まんじの祭(まつり)などるめしくんぐの、こちくのことは
しぐれたらかぎり、とくのへさをぬへりぐたらは
たらみたりなん。近衛づかされ名たうき恨をめし
たりけり。れかぐらのくるまは、いとおほくいうう
まつれり。内(全)。去年、院(冷)の殿上へ、かたぐはつれて、心
よをつうまつり、かずもしらず、女くはつらしたら
上ぜんの此馬くら、馬ぞひずい男(ぞん)、ど称りましハ、
つぎくのとゆりなどまてとくのへかぎりとたか
かん物、まるなきさ庵や、女此(以右女法)殿基のうへ(堂)ハひとりは

まりこりつぎのれ車まは。おしのれうく。おまぎ
思びてのりのへり。女れ（嘗君）のれめれと心しりまてのり
こり。うるぐのひとぐまひ。こ（恋）へのれ方の女。女れ（嘗君）殿
のいつ。おしのれおぐれのこつ。めもあやり
かぎりこうさうぞく。まく様。いへがさしなり。さるは尼
君をば。おなじくはおいのなこの志はのぶぐりま。
人めしくてまうでさきんと。院（源）へのまひかれど。此
こびはかくおほうるのひぐまうよ。こちまじらんも
うるもらいるし。もしさふやうなるん世中を。約
いでこしぐと。れ（嘗）まはしげめ給けると。のこりの命
うしろめるくて。かりぐもれゆしがりて。しるひ



もづこ紙もなれてとのへとりこうかるこおとろ

おどろしかるぬもなる面めしくすごう面白く。取
かるはましてきてしかり。山あねますれかるけの
かしは。松のこどりにこしまがひ。かぎしのもなれ
いろくは。秋の草ありことなるけぢめつれで。
なまごとにもめのこまがひいろふ。もとめ（末子）こもつる
すゑに。けやかなるに。道アハかるぬぎてありぬふ。
白ひもなくくろきうへのさぬに。すまうがさねの
えびぞめれそでを。まはかにひさほしろがしこるに。
紅かうさあらめれ女もとのうちしぼれこるに。紫色
ぢりぬれこる。松ぢらをばしすれて。紅紫のちりに
しひつきこるこるひ。おほかうすぐこどもり。いと

ちゞくれたるかんざしを。かゝやくまでしてたゞ
ひと色(くろ)まとひていりぬるはいとおもしろくあはれ
ぞきけり。おこなひ(道心)くらしのことばしいづれ。中
ごろしづこゝろひし世の中経も。めでたきのやう(?)
おぼさるゝま。そのよれことゞうちこぼれかゝりかふ
べき人もおほければ。ちかきの(れ)おもぞぞひしらぬ(?)
笑給けり。いりあひて二の夜ありしのびて。
(源)これまで心をしりて経よしの神世経
へる松まことふ。(比)れこうぎこゝりかきかへり。
尼君うちしほれたり。(尼君心)かゝる紙こそまつけても。
みうちそいまゝとひれ給しほど。(名君)具風の

そのかみをし有さまなともおもひ出つゝもいとゞ
けるかりける身のすくせを思ふ紙さへむなし給
ひと人も入道こひしく、なぐさまれがたし。紙
かはやゆかしとつらしさゆ
尼君すゞの紙へけうひあかちなぶらはれし
かみあまたのをやとうらんぞ、そこはかなくなん
とふびうちさひけれまくあらりそまし
明石君しそまづつまされるのすこうしの袖の
あまりとところにつけても地ひさりごちりよひと
夜あそびあそびのよそみれ有ちうまずすこて。
うしのかもておもろくえしけるま。あまれいと

こちらうせきて。松だらも夕まぐひて。よろげのこと
そぐろさむく。雨日さも衣さもこちそひこり。基の
雲うへつゐのうきねのうちなぐらどきくにつけて
こそ。げうあり朝夕のあそびに。こゝかりめなれなひ
なれ。れ(者人)かどよりとれもれに。おきくし給もぞ。
ましてかきこやこのほかのありきハまぐるらひ給
もゐぞ。めげしくおかしくおぼさう
雲すきのえの松によふくせく霜ハ神のかけ
たるゆふかづらかも。こゝ無らしのあそんのひらの山
さへといひけり。雲のあしたを見しやれば。まつり
の心うけ給ましまやと。つよくこれもしくなん。

女川の君

神ぐへのてまとりもちろさうさぐまゆふかけ
そゆるかうきよれしも。中務の君
（ちうづき　深のぎひ人々）
（中務）そゆり子がゆふうちまがひをく霜ハげまいち
ぢうき神のしるしかつぎ（地）くかぎしぎしぎはかり
けりをおまをんまはきくとかん。かゝ子ありかしの
歌ハ。まいのぶぎめき給おとてこちも。中こいぞぶて
して。松の子とせよりハちれて。いまめしきとし
ちければ。うさくてちん。ほのぐとあけゆくま。
霜ハいよくかくて。もとすゑもこどくしき
まで。ゑひすぎまゝろかぐらおもてどもれをのが

北
ころげのことあるぞ面白きまくるぞ。ちゝ紙一ゝゝなさ
まはしきこれなふくもあらでおけぬれば。返信(へんちゝ)はきお
ふも口おしく。けうさ人ごしふまつだらまちぐとこそ
つゞけられ車だの。風はおちびくしたすぐれ志
ひまぐも。とさんのかげり。茶のよしきをひき
くんへこうとこゝもうよ。うへのきぬの多くけぢめ
ときて。おしきうけだんさりつゞきて。もれまいり
けるとぞ。しも人などいめよつきて。めでこしとい
おもへる。尼茶のおまへまも。とんかうのおしきる。
あ紙まびのおもておりそ。さうじもれを無りとて。
めざ風しき女のすくをかると。どのがだくれ。し

ときの公紫まもおりしのあまぶくとぞさいを
よひけりの名のえ（朱ん）がどいれなくるひをいとじく
しかひてうち（今上）のれことをもきくいれ二面なず
長社のび華まるんびりしといでこれかふとも
まドつけり姫（女三）家のれことをのこぞおをえ見し
まるまでこの（源）僧をばれなりくのれうしろうる
せひきてなてうちくのれ心よせあるべくそ
うをきせ給二（女三ノ）帝まるりかひて（三ふ）れ封ちどまさう
いよくまるやりまれいきほひそふ為いのうへ（雲ん）
りく年月まそへてがらぐまきり給れ（女三ノ）見くる
四月ばかりひとくころのれもてなしまくまは

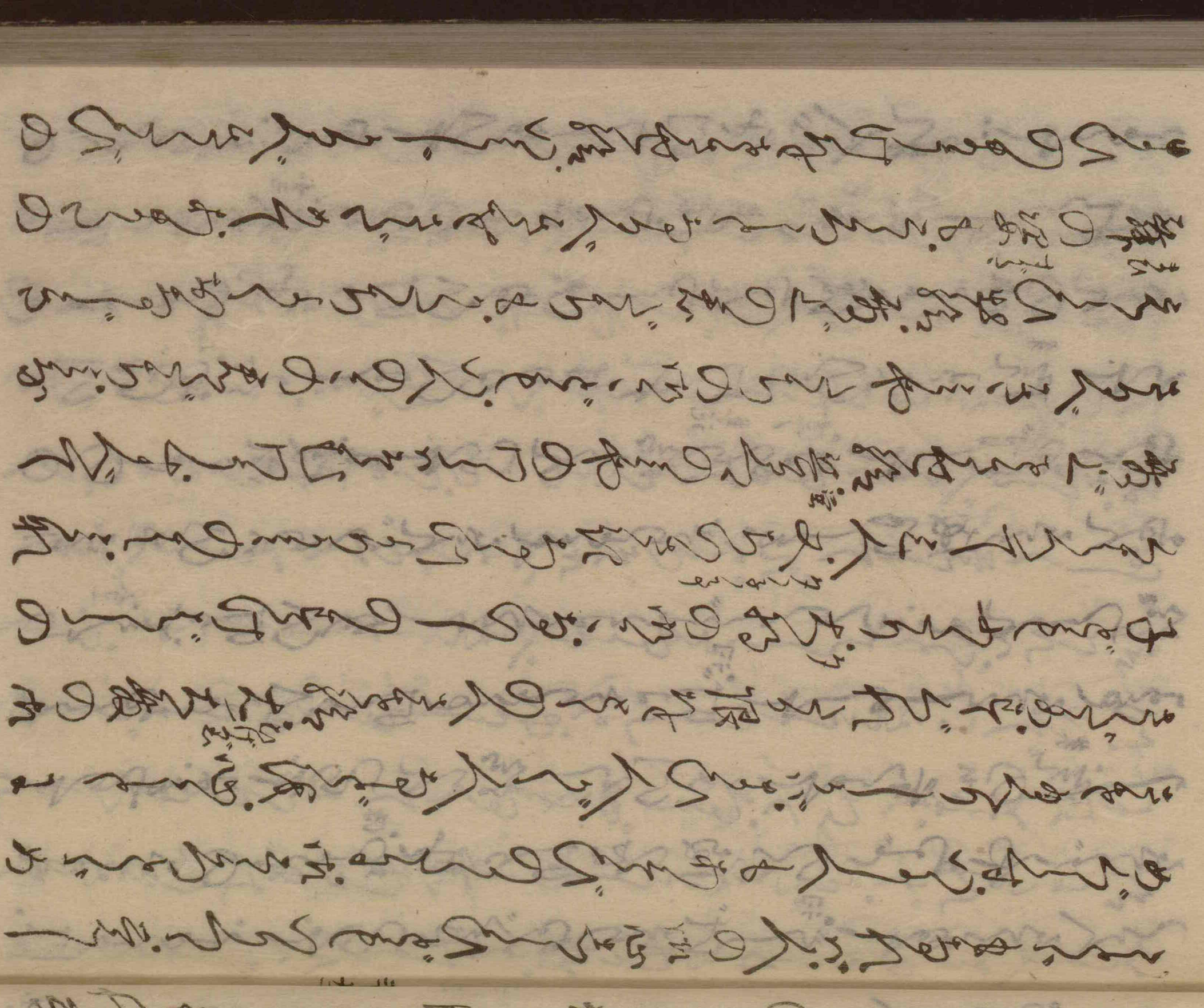
どと〳〵のどおまりをし川まりなばその此心だらへも
つねはおとゝさん。さんに紙みせてぬきさへさ。
心とそゞろにはしれと。ゆるしなくおばしつかれど。
さしこそやうまやおばさんとつまれてきかじ
しくまえ思ひ話す。うちのこうじさん〔金〕ば〔女三八〕心にせ
こともにそしのへば。〔源ム〕どうするにそれまんもいと
おしこそ〔女三八〕つり話しとやうくひとしてやうま
あつゆく〔法ム〕さらべさことおとうらとへおもひちかぐ。
されだにとのこやすくずおばされかれど。おや紙
つれなくおもるにさ度まですずし話。我家の此きし
つゞの。おー一の家と〔法〕こるにまもりきそうしづき申り

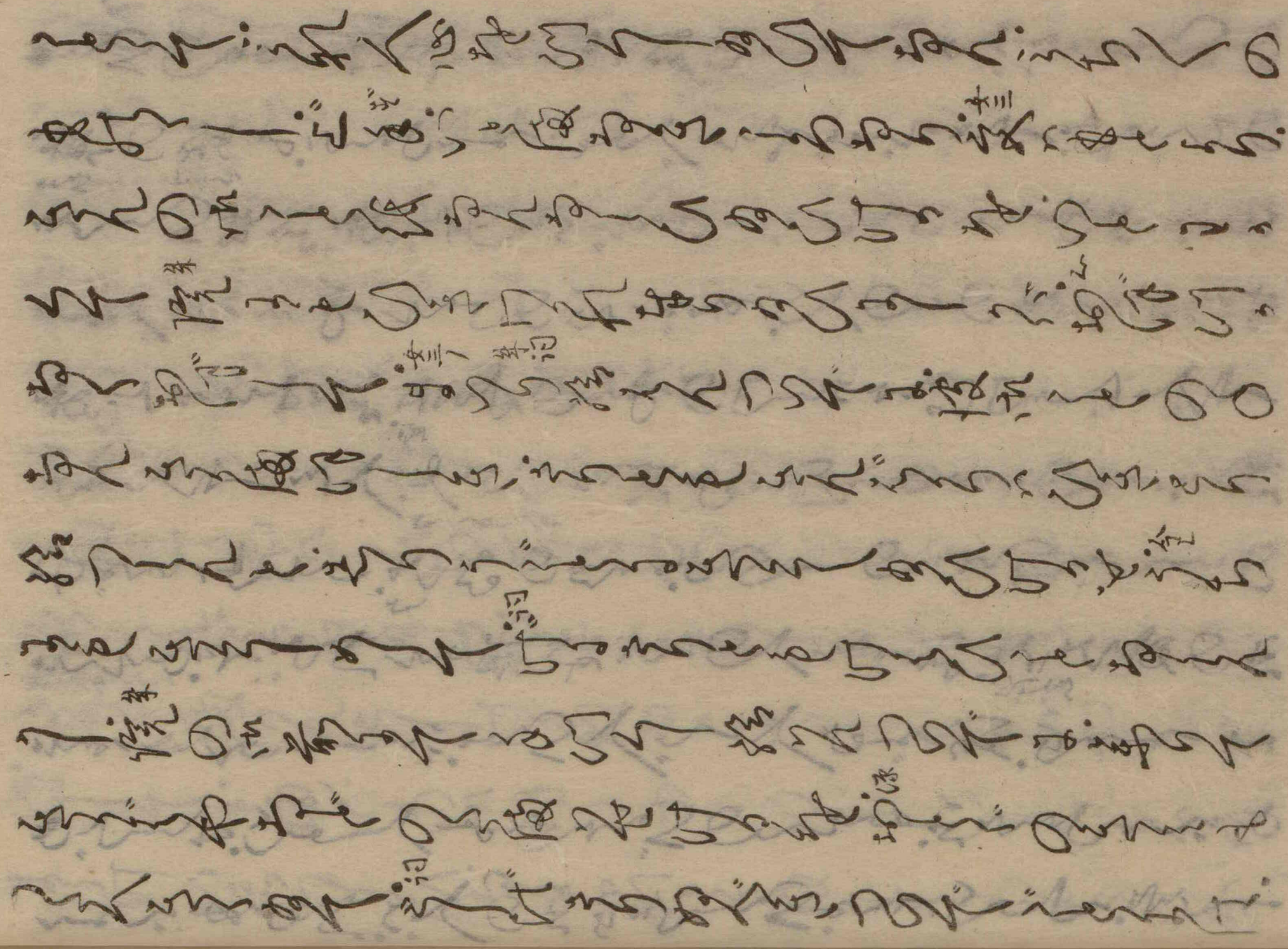
給。そのれあつりひはあんづれぐちあり。れよがれの時
どもあぐさめ給けり。いづれもけりぞうけらしく
かなしともひきそしめんり。夜のれうこいかくさり
ぎりあり。れむまぐあけりひをうしやうて。ぢ物の
きこのかいしのすけぐらしの恵を。おちるむんて
ぞうしづき給いとおしげまて。心ぐへも程よりハ
ざれおよすけされば。おとぐのきこもらうぐり給。
すくあきれつぎとそしきりど。すきるひろぐりて。
こあるかあるいとおけくありそひこまふ氏。今を
こぐ先をうけらしこあつりひかひてぞづれぐも
あぐさめ給けり。右大殿（ひげぞ）のまりつうまけりまゝ

二郎云 後二中郎云

ことゝいまへよりもまさりてしたしくいまはれ
方もおとなびたてゝ皮(浮ノ)昔のけくしきすぢ心
ちなれ給まや。さらべきおりもいたり給つゝ基の
(黒)うへうも(ユノ)此對面ありておらまほしくきこそ
うちしのひかり。ひめ(女三)家のこゝぞおなじさ海にいく
おほときておりします。女(明石女君)此の君ハいまはおほやけ
ざ海に(源)ちなち罪なひて。この(ん)家(女三)をばいとこゝろ
ぐるしくおさなうしん此(むすめ)婚のやうに。しひてぐゝこ
えてまつり給。朱雀院のいまハ(朱ん)むげに世ちくなり
ぬり心ちして。もれ心ぼそきをさしてこのよれこと
人りこゝじとしひすれどこゝのあんなんいまひと

さびあしまほしきほ。もしうしのくりもそれ。
ことくしきさ海なしで。つくりなべく字の給
かれば。源ん おとゞもげよさらべきことなりらう此事也
なりしむまてゞよすゝ事なりなべきをまして
うゝまうち字しかひけるが心ぐるしきことゝ。事り
ゆべきことなげしまうく川いでなくすまじき
さ海まてやはゞひつくりなべきなるつぎをして
かれんどきやまつべきとそしめぐらせこのたび
朱あけ文は
たりさ海りんとしつれなどしてうしてやとお
げしてさ海ぐのれほうぶくのことゝいまゐ志れ
まうけのさてしひなまくれとき海ことまうられ家

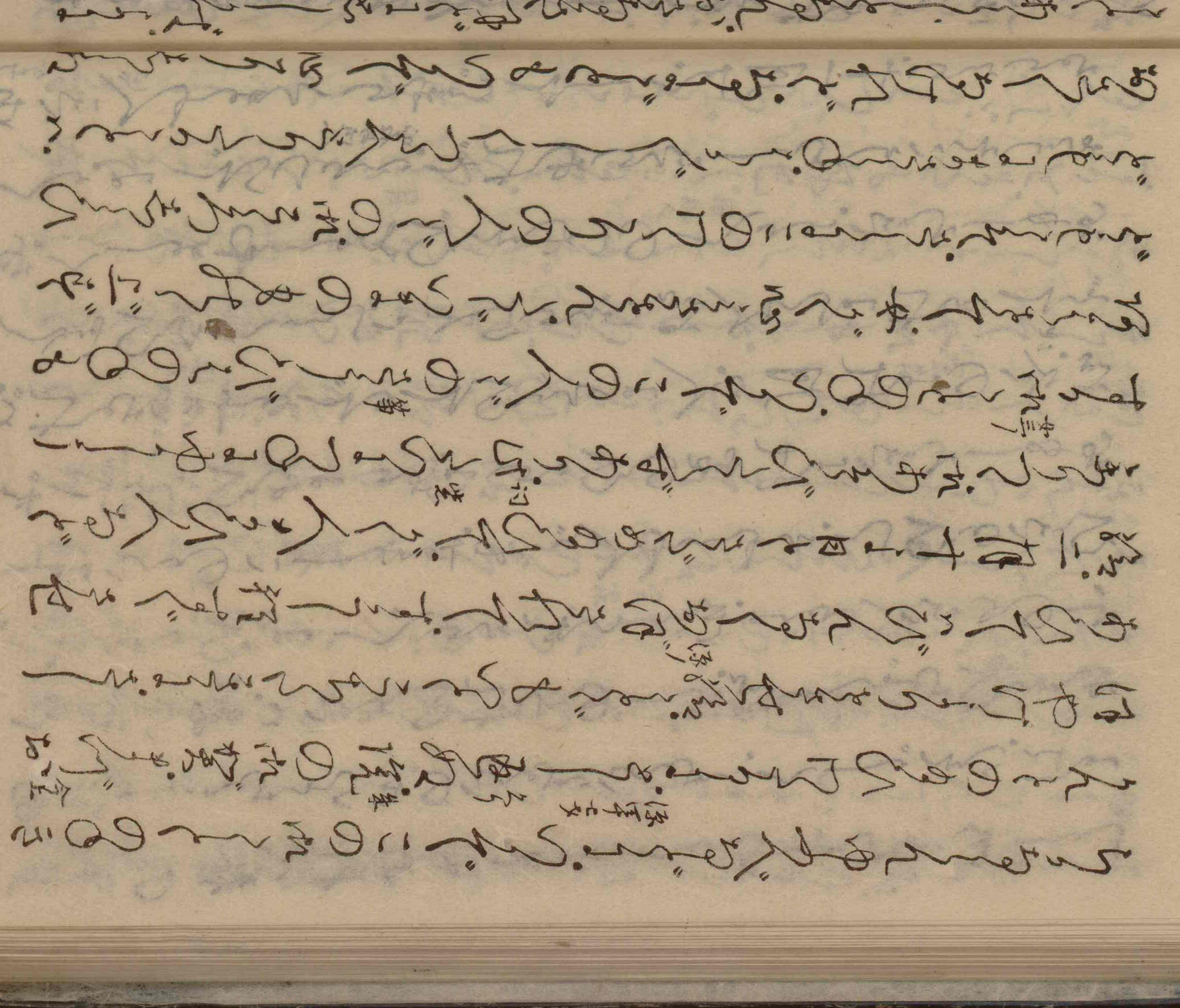




としへ罪ゆゑともあるを。まけまひハげにまさり
給ふれど。まぐさしめし所あり。それかさて
ま日をよぼぬをなるに心もなくてまいりなへらん
けいでにきうしめきんとゆゑしなくゆしがしせ
給りんハいともしらるべきことにもといと
却しく覚して。びごろぞれ心とぶめてとしへ罪
給。おしべことなりてかろうろおもしろさたごく
だの。宮さにつけてりまるべきひぐさそしのさむさ
ぬりさ紙とくのへいでしやんごとなりるべきそのの
うざりをさりこそしをしへ罪し給ふ。心もとなく
おしするやうなれどやうしくころえ給まくにいと

よくちり給ひりいとひとしげくお彼ひとこびも
ゆしあんずりいとまもこころあはこくしかれだ
よりくちんしげりまことのころもしめなるべき
とてこいまもそのころいれいと面写しなひておけ
くれをしへきこえ給ひ女れの君のまも墓の上まも
きんいちりしてまつり給いさりかれいこのおり
おさくこくちれぬてどもひき給へんをゆしと
見して女れもしぎとありがこれいと面をこぐ
しぎしとこそしなてまうでなへりこゝふる所おし
すりをまさも気色ぞこなていつきだりまぞ女
なへれいかこつぎちまことつけておりします

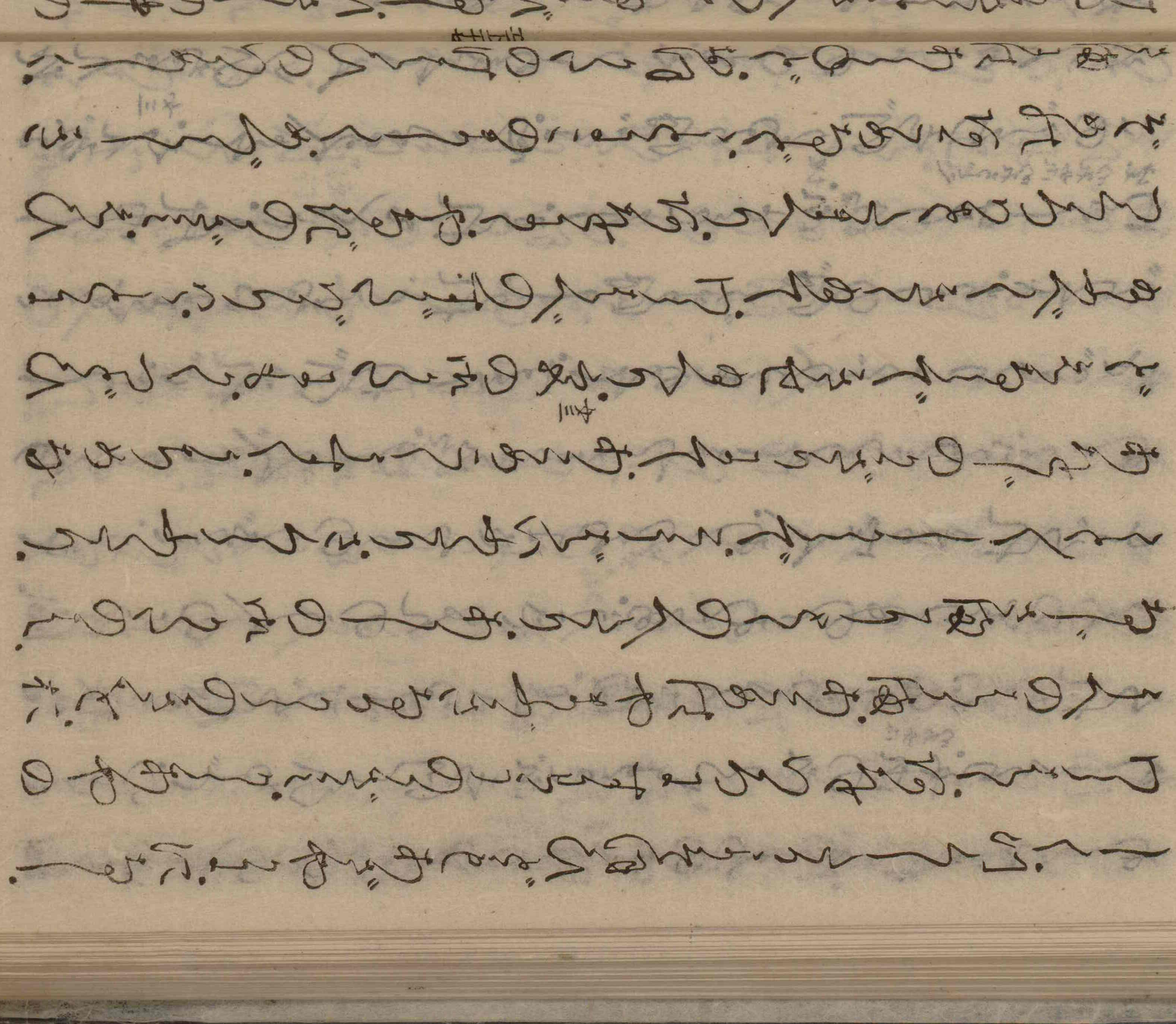
ありかり十一月すぐしていまりたまふべきれ（今上ノ）
をうそこうちしきりあれど（若あれん）かろついでに。かく
おもしろさよりくのれあそびをうしやましくな
どてまれまうる人給いざりけんとつくせひ罪し
給。冬（比）のよれ月いへにこぶひてめでまふれ心（源ノ）なれば。
おもしろさよれ雪のひかりにおりにあひたうてぜ
ひきのひつ。さふふんぐもすうしこのうたり
みのめきこうるに。れしとぜとりぐにひかりとて。
あそびなどし給。としのくれ川くれは。多（笠）いなど
まはいそがしくこちるこちるのれいとちるこにどの
づしれんじいうしことじもあれば。春のうら



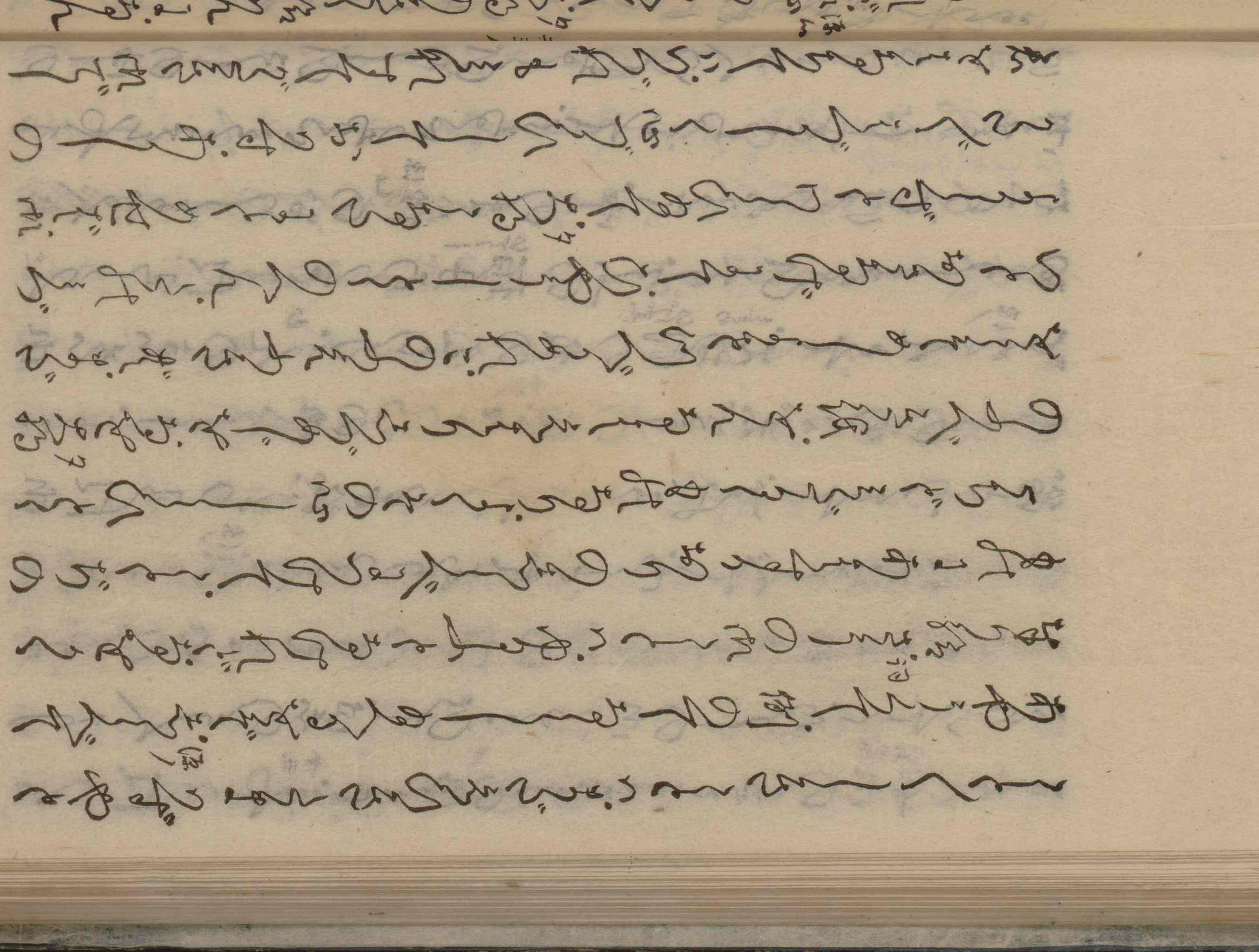
ことあらしとなんかさちきほどにむしばよ
あるものしたといふかぎり又こうきいへくむさ
なべき人のつゝへどもをのこさず心こし中に
いとかくもぐしさかなとおぼゆるはのひと
なんなりしそのこゝよりも又このごろのワさ
へごのざれよしめさすぐすまもたおさくなりに
こうべしさんもたまして さしにまゝ○ぶへなく
なりにこうとゝこのれゝとのゆだりごこ此こへ
こう人おさくおしじとのゆへ女三ん ばちに心なくうち
ゑゑてうれしくゝゆうし給程になりにけゝと
おぼせ サ一二ぢうりになりぬへどちをいとゝいうじく

さくらは。ちるをびはちる心ちして、ほゐくあえるは
まがらしくのこる詞。院（集 源詞）こる色こしなりくるまりて
こしへぬるをかび。まるり詞はあまとれんぞ
ぞらり。ふうりいくそくてこしなりくるまへとごゝるは
かれてそへさるる詞げ。（地）はうちやうきろこちく
てはまりていそけちくおりしますれ有様。うくれ
ちらしまりしと人びもこさまり正月廿日ぞうりはうちれば
そゝもおりしこほぞは。うぞぬるくかさてれまへの
むめもさうはちりゆく。おはうこの花の木どもく。
こぼれ気色ぞこゝ。みすこのうりはあり。（源詞）月さくぞれ
のちぞさちく〱もれさもしげしうんず。うこさあやをも

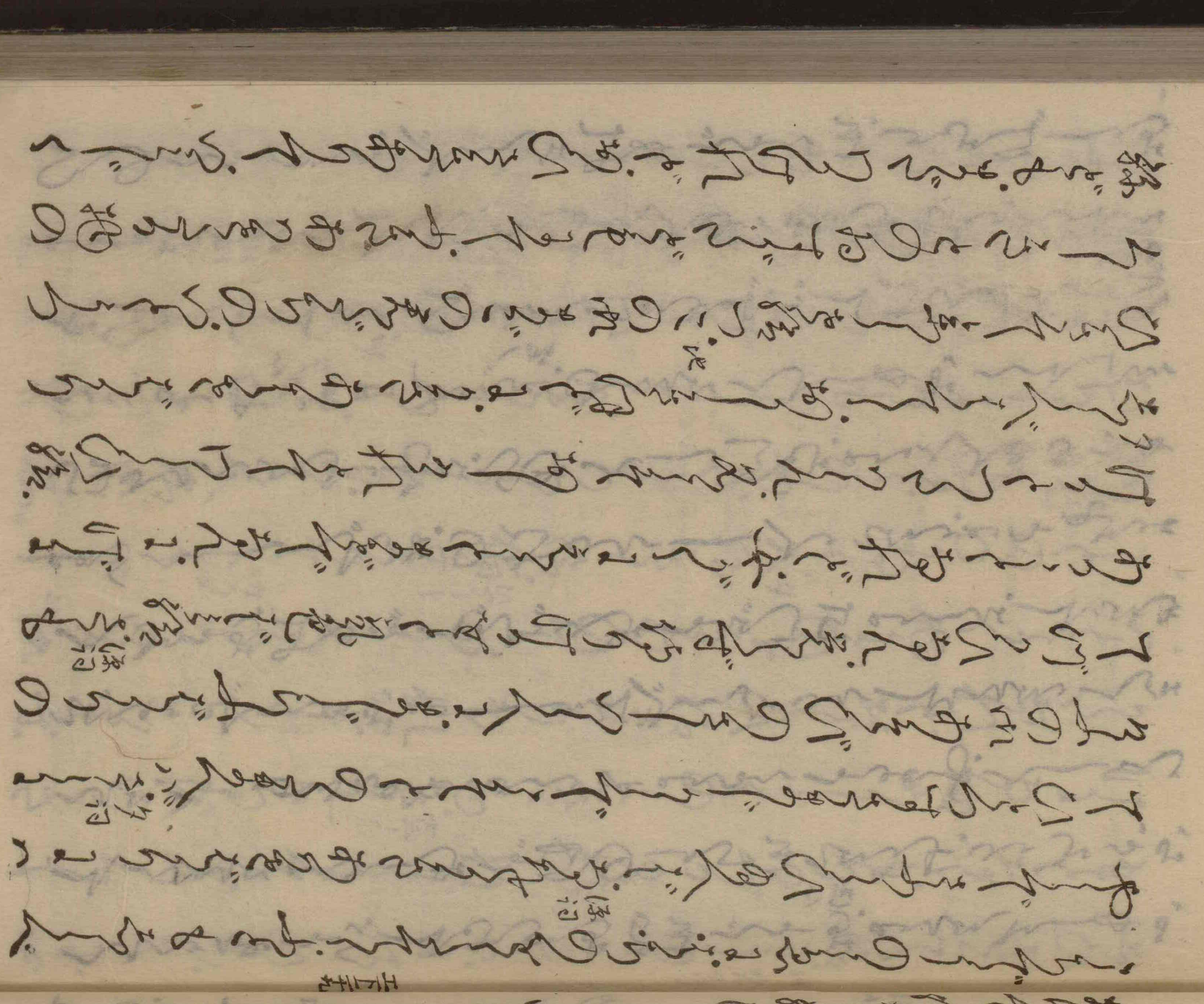
給りんれことのほもむがくめさて人いひちきんを。
このごろ志げりちるほどに心こゝまへとて志ん殿に
（実 叩れ女は 叩れちどこ）
ひとしまり給れ（地）ともりまれもくとまれゆし
がりてまうのぼゝまほしがれどこちることとさ
をべえりとゞめさをぬてすてしねびれどよし
あゝかざりえりてさふしたを給ひりべしりたち
まぐれたり四人おりいろまさくらのうぎこうまて
いろのをりものゝあゝあうさもんのうへのをり海。
くれちねのうちたりさ海。もてちしすぐれたり恨を
めしたり。女は（叩れ女は）のれくまもれ志けしひちどいとゞ
あしたまれなころのをしもりちきに。をのくいどに海



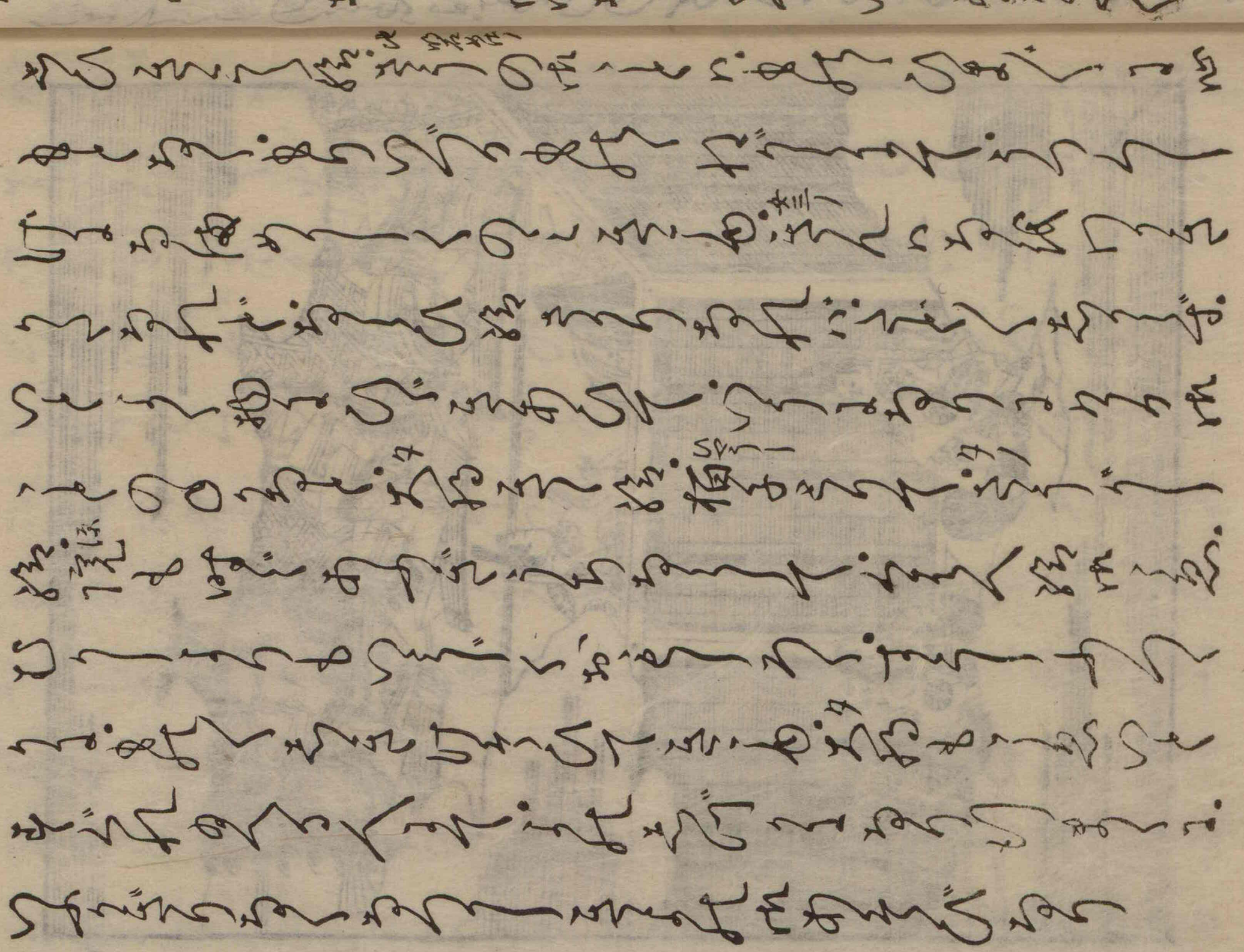
けるうきとさへいとなるべなしひさしの中の
れさうしじをもちなりて。こなるうなるこうさちやう
ぞうりをけぢめにて。中のまへ院(源)のおりしますべき
おましよそひたり。かふの栢子(ひやうし)ありをはしまうべ
をめさんとて。志(ぎ)おほ(ひげぎ)い髮のこらう。かん(む)の志志れ
もしのある志。さうの笛。左(タ)大将のれうしう。よこ
笛とふきて。すれこなさふうを給。うちにはれ
志とねだなしべて。れしと我ありつる。ひし(源ノ)給れ
ことだ。うりしきうんぢのふくろどもにいれるう
とりいでゝ。おしのれうたまびて。志のうへなり
まぞん。如(ゆゑ)れのきこまさうのれうしと。こや(女三)にはうく



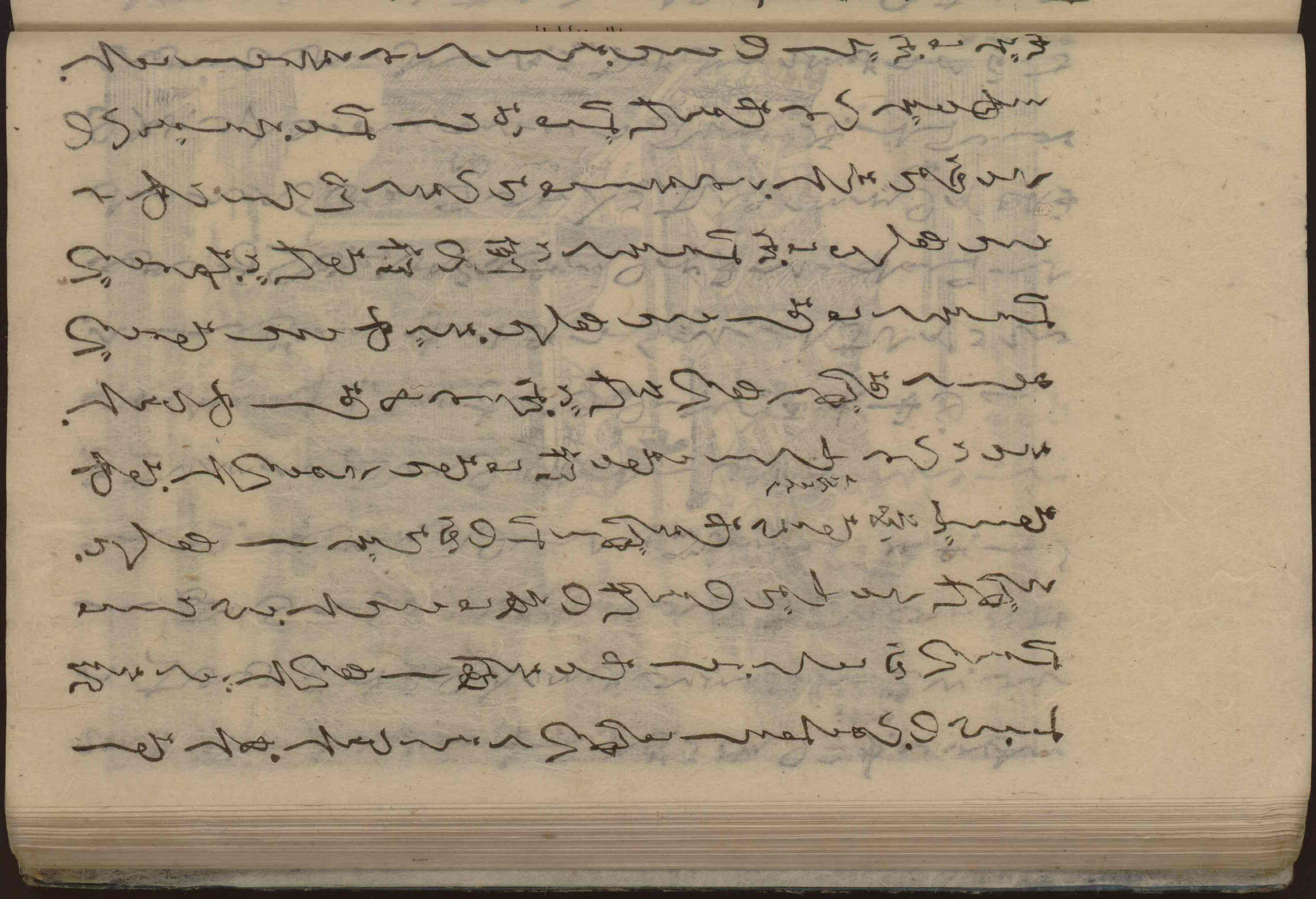
どもなれば、(深心)此心くちへて、(カノ)ぢねのきく給へんに、なん
なりべくとおぼせて、女(若君)此いつれに、(今上)うへのきこし
めすにも、抽にあたをつひきなしぬへれば
うしろやすき様、(洪ノ)見ぐんこそいくぢくなるぬしんべ
なれど、何とさぶまりたることなくて、中々をんな
の氣ぞりぬべくれ、其のことのほかれりきあたすう
抽なりなを、えぐろくしろもやとおぼいとおしく
おぼせて、(タム)ぢねいといくころげさうして、(禁中ノ)うまへの
ことくしてうちしきれ心にあくんよりも、
くふの心づかひいことよまさりて、おぼしたまへだ
おぼやうなりれなをし、うりにしたるにぞども、袖

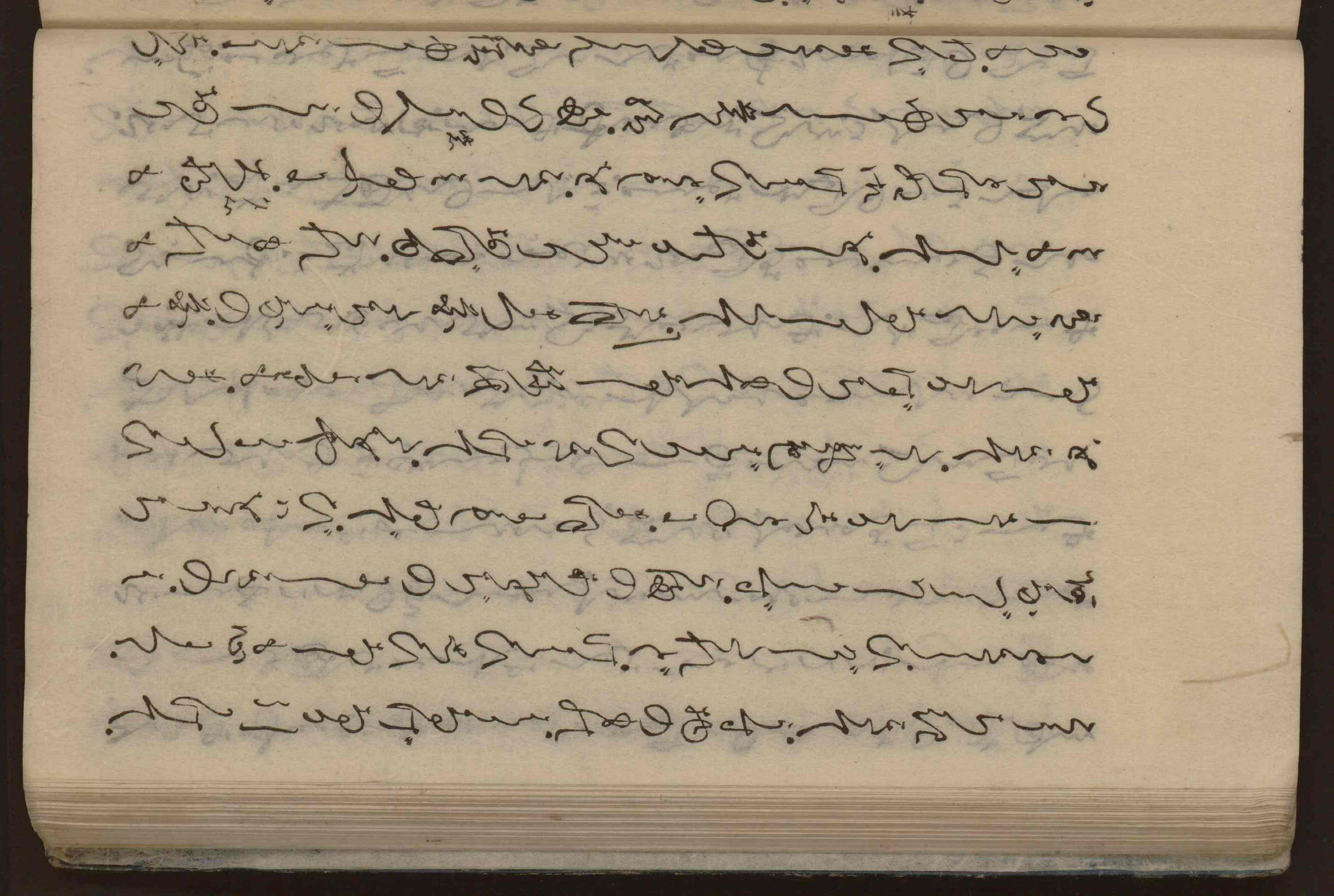


おしげなり。れことぐもれしたべどもとくのひ
そそくかきあるをぬへるほどいづれとなきなるに。
び（四名ノ）そくすぐれてどずめきかうさびたるてづひ。
こけそくおもしろくきこゑ。まだ（芸ノ）んにたね（タん）もこく
とぐめぬへるにおけしくあつぎやうつきくるれつ
まなとまかきへしたるれの。先づしくいま
めきてさしにけつぎとあるどぎどもれおどろく
しくかきそくうしたべてうしにおとしぎ。まぎ
つくしくやまとことにもかうるまなりと。そく
おどろかる。ふるきれらうのほどあしりにそくて。
かもしろきにおとぐれ心おちゐて。いとまかくく



（二月上旬地）月心もとなきころなれば、さうろうなるゝなる
りうけて、火うきほどにともさきをゆへり。（女三）女の
物をのぞきゆへれば、人（女三ノ子）よりけ（源ム）はちいさくうつ
くしげまで、こゝにぞのこゝあり心ちす。匂ひやうなる
ゐるゝをくれて、こゝにいとあてやかなるおしく。
二月の中十日ばかりのあをやぎ此、ワづかにしぶり
そゞめくしん心ちして、鶯のも風にもこゞれぬ
べし。おえかなこゝ絡、さくしのほそなげ。れぞしハ
たゝうりこぼれかゝりて、やなぎのいとのさ海し
うりこれこそいかざりなき人のれ有様なめれと
こゝもうま女（四右女法）の名ハおなじやうなりれな海めさ

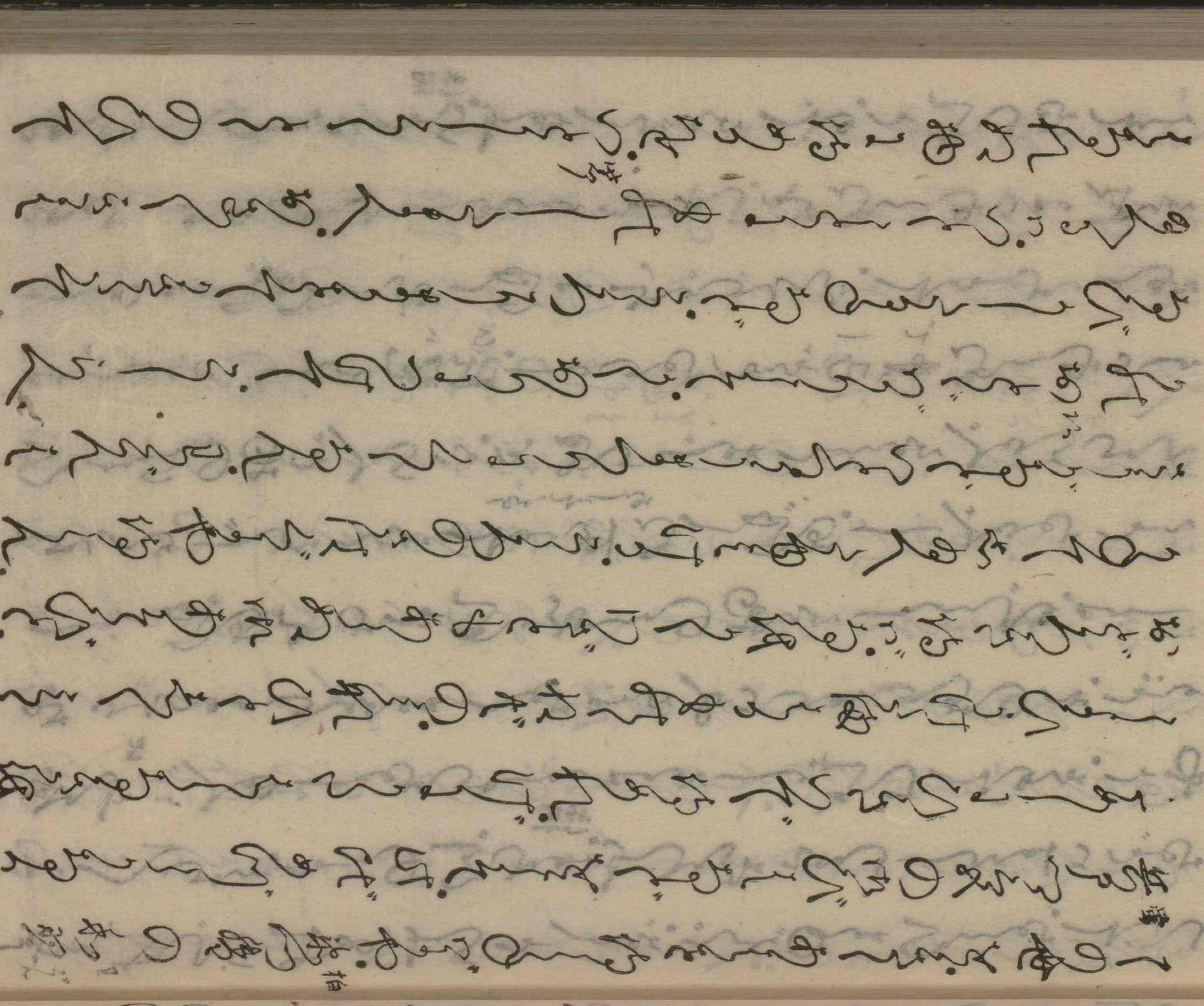


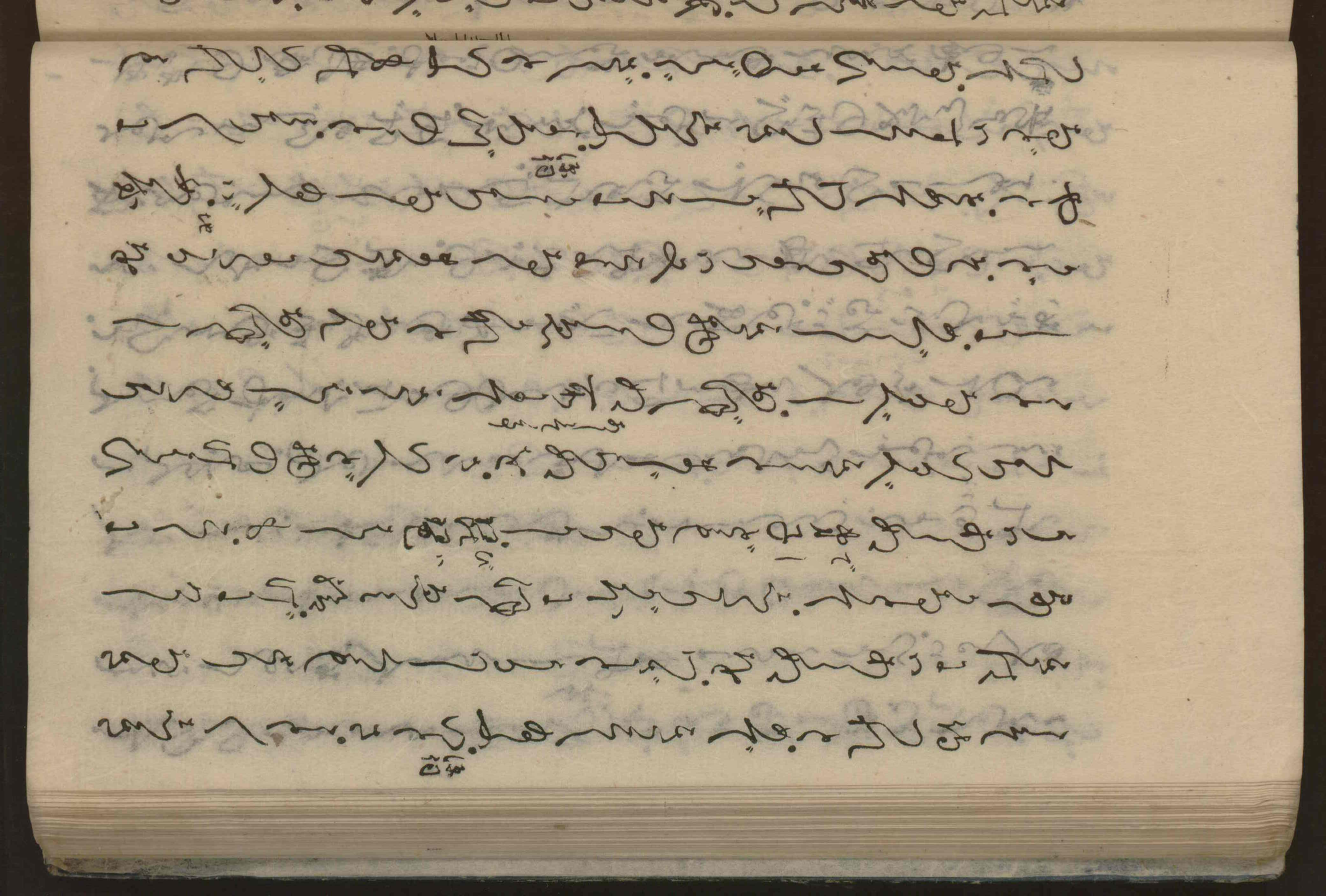


りもねひまさりのへんまほゆしこゝに。さづ
心もなし。女二 なをばいますこしのすくをとよばまし
ばゞ。ワガ袖にてもこまりてまし。心のいとぬるこそ
くやしさや。朱 流はこびくさやうにともむけて。
さりうごとにもの給りをけるとゝねてくさへど。
すこし心やすきるまこしのふれ女三ア けるひに。あな
づりこゝしもとはなけれどいとさも心にうごかざり
なり。この御前 紫ノ女 をばしなまごとも思ひとよぶべきる
なく。けどをくて。年ばすぎぬれば。いかでかくて
おほるに。心にもあるさ夜ともこしなんとぞかりの。
くちおしくなげしきなりかりあるがちにある
ようごくおほけるさ心なるどにさしにまれし給

しけりまゝあきあれをこゝろやうまいいりでゝふえの
孫なども。えんますものぼりもてずるん。女にもうるな
あられむとふるき人のいひをき侍けるげまさるん
侍りけり。なつしくもれしとのほることに。其志
夕言こそことに侍りけれとしぬへがいなこのさぐ
めよいまへより人のけさもこゝろこと紙。すゑ乃
世よくだれる人の。えあきゝめもつまじくこそ。抱の
しらべごゝ曲の抱どもしもげまいもちをがつぎの
もれましこるは。さもありしなどのなひていうま
こゞいまいうそくのおぼしこうき。その人れ人れご
前などまて。こびく心こさをぬふまとぐれこうも。

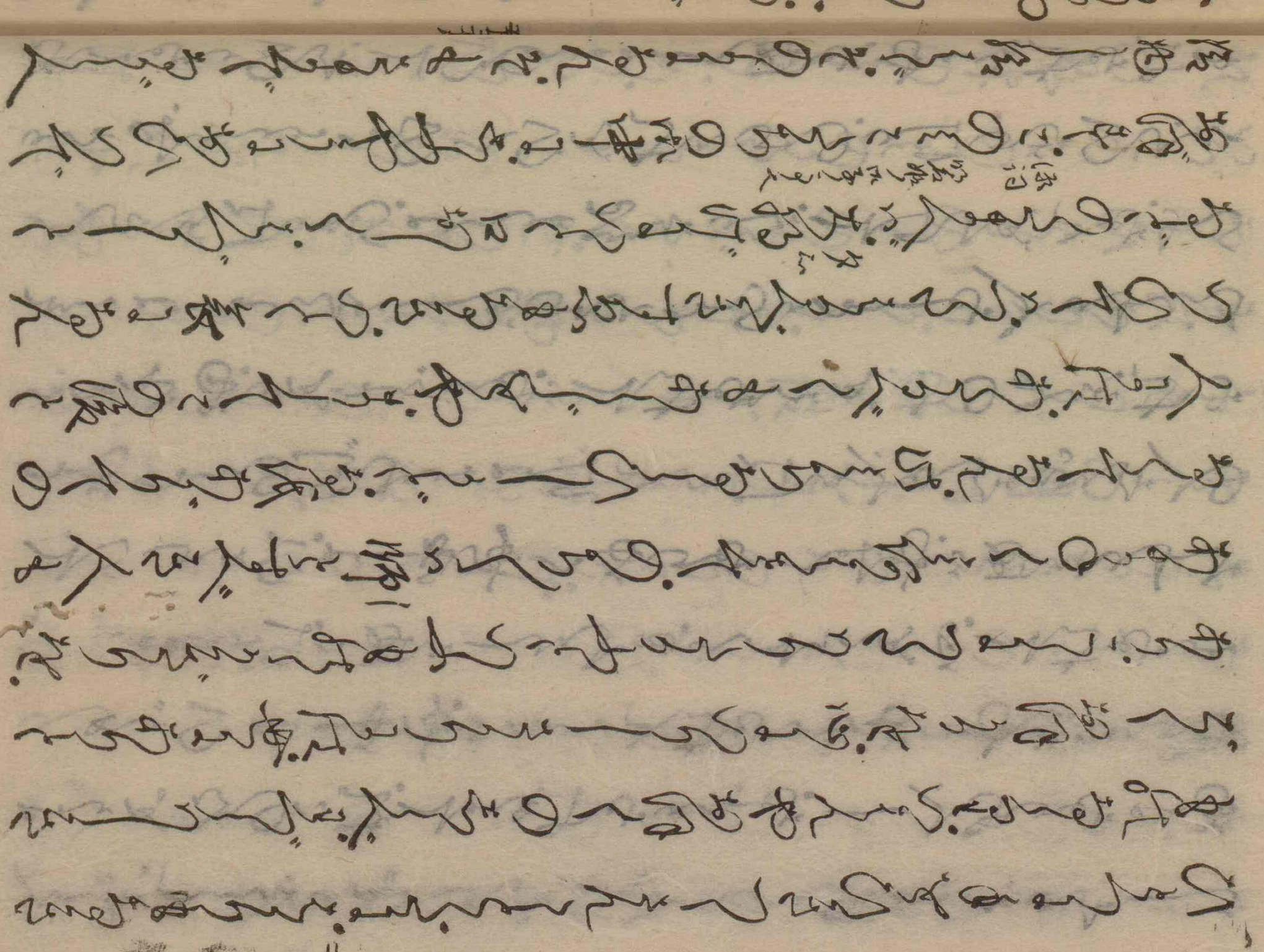
りぎしくなく成ゝあるを。そのゝのうへとおもへる
どぎどもいくぞくえまるびとゝぬまやあらん。この
りくほのゝなるやうちのれ中ま。ひきまぎらんま。
きまゝなるべくそなぼしる。としげくむもれて
すぐすま。こゝなども。すゝしひがくしくなりま
ゝるまやあらん。口おしうなん。おやしく人のぎえ
ゝりなくとりすることだ。地のもへありてまさる所
なる。そのれ前(ごせん)のれあそびなどま。ひとゝぎこまえらゝ
なし人ぐ。それゝれといふまぞとのゝへば。大ね(夕詞)それを
なんとりゆさんとせひ給りつれど。ほきらゝなるぬ
ゝろのまゝま。おとうすけてやゝとせゝゆる。のぼり





きはなく覚えつゝ。我ころはあぐべきかさりなく
なしひとらんといひとりるゝかれど。なまかはその
ゑぞりかき人の今のかはあさくなければ。かる
もしをなぐらかはまるのびえらん人ざかるかど
ま心をやすてもありぬべきをさんなんなをもづし
もしくるかれまくきもれまいありかり。このことは
まくとりにしくのまくまゝぞのさりしかむしの
人は天地(あめつち)をなびかし。鬼神(そまかみ)の心をやりしげよろづの
もれく孫のうちまゝるがひてかなしひかき地も
よろこびまうもりいやしくまげしさもれを
しかき世まあしくまりぐりしまあづり。世まゆり

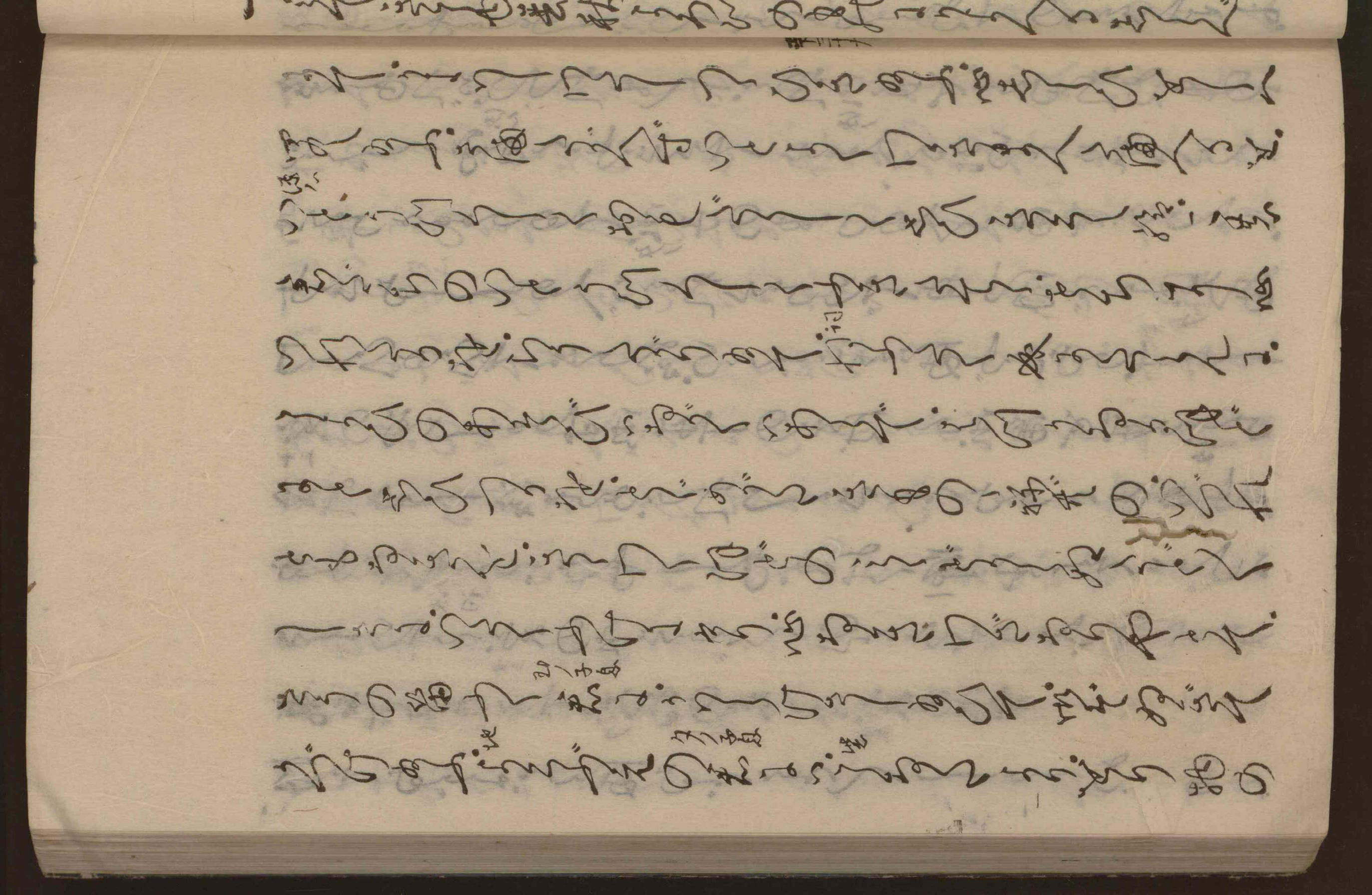
まれなれがやな面くまもびて、さひかるもね
こゞひありけり、のちこれをひくひとよりしずとう
いふなんをつけて、うつさ紀まくるいまはおさく
つゝふる人なしとかいとろちおしさくとこそ
あれ、さんのねをもなれていなまごとをう抱をとく
の人をなしたるべとはきんげよよろげのことおと
ろふるさ面いやすくなりゆく世中にひさりいで
もなれて心をとてくまろうしこ面とけよりまどひ
ありさおやこをもなれんことい世中にひがめる
ゆまなりぬべし、などうなれめまて、れこのねをうま
りしたるぞうりのもしをいしりをうざんしたんべ



給ぬし給ひしぞ。そのうまるんぞもさまでなぐしん

とまうやうあしがいくぞくなしぬてのうぞなも。
とぐめなるべき。二字今より氣色なりてえもふを
（今上ノ御子之法ニ式乃文と云之）
などのなへば。あしの（地）君はいとおもぐしく。泪
ぐして罕ねなへり。女（若ノ君之）れの君はさうのれことをば。
（雲）うへはゆづりきこえて。ようふし給ぬれば。何ぐまを
（源）おとぐのおまへはまいりて。げぢうきれあそびす
なりぬ。うづしきあそび給。まなやかなおもしろし。
おとぐおりへしうしひ給れしき。ことへんうさか
くあつぎやうつきめでたし。月やうくさしあぐ
まうは。菊の色（笑う）香もてもやされて。げにいと心にくき
ほどなりさうのことは。女（若ぬれ）れのれ川まをとはいと

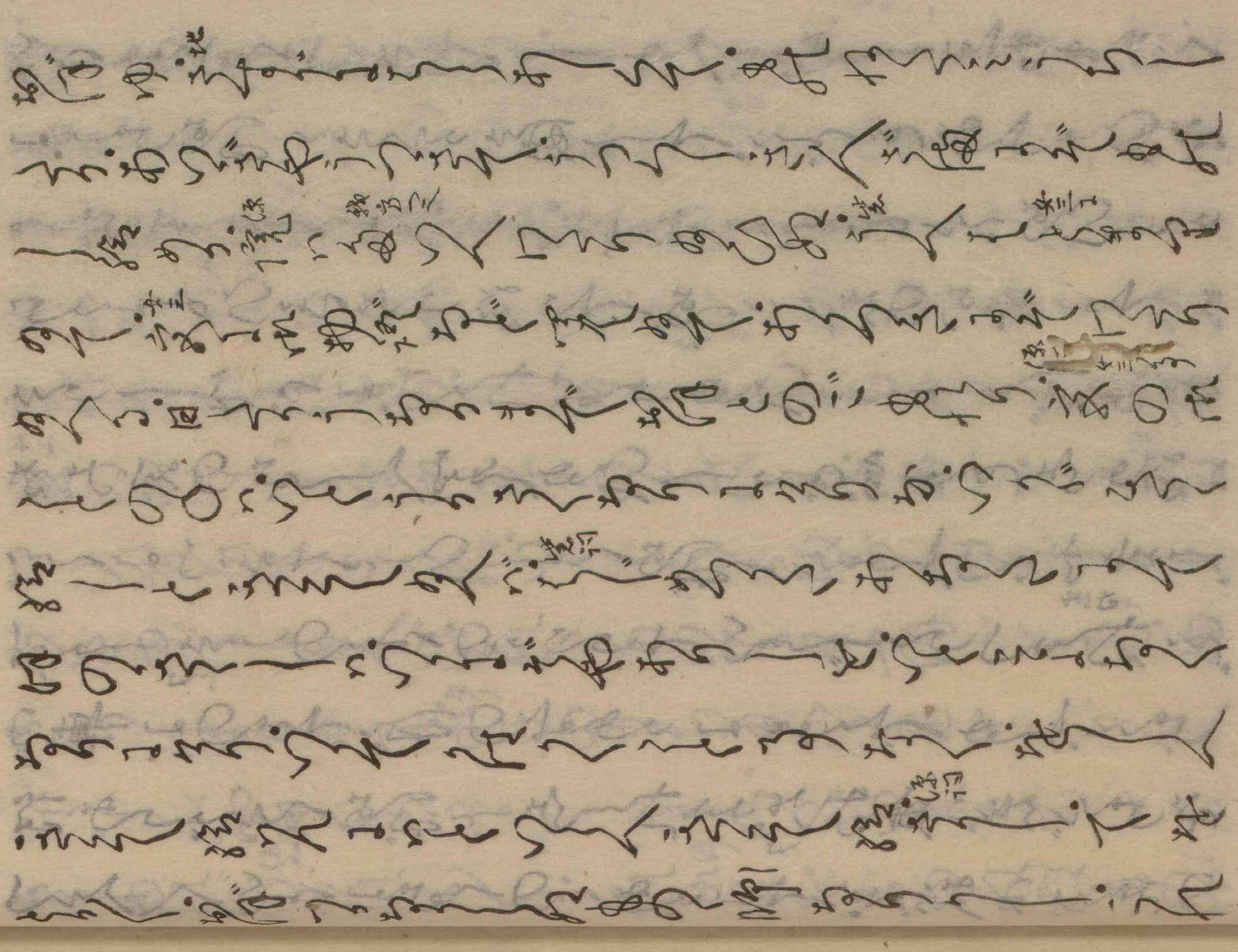
ちりしげにあつしく。(咨)ぞく君のれけもひくけく
まて。ゆのふくいそじくすそて罪しつるを。(君ノ子)このれ
てづひいまるさ海かりて。ゆるしかにおもしろく。
きくへんだあらず。すぐろりしきまであつぎやうつき。
まむのてなどすべてさしに。いとかどあるけとの
れなり。かくりしるに。これしべかたりて。すちの
うさあはせどもなつしくい海めさしるに。(女三ノ)さん
しごかれしべあるのてのなるに。心とじめて。
うるぎひきぬべき。女六のそらを。いとおもしろく
そましてひきぬふ。さしにかたはなしぎ。いとよく
すそてきも。美秋よろげのもれにかくへるしべ



そぐまりけるつひさのふ心をしひをしへ
ぼしのふ。さ面こぐへずいとよくけさまへ面へるを。
いとうけくしくおもしぐしくさひきそし給。こまな
きぐらのいとうけくしくふきそくをちすり心
いれるをらうしぐりのて（詞）ねふて女まるんに。
しらひのあそびいなぐいあしで。とけうるるほど
まとさひつりを。とぐめぐるさものゝ祢ぞのいづれ
ともなさをさてけくほどのこゝどしぬこゞく
しさまいくふけまをり心なきけぎなりやとて。
さうの笛ふく（五ノ子息）君まかりしけさしのひて。ぬぞぬぞて
かづけのふ（地）よろぶえの（タノ子息）君まいこ（笠）ちるるよりとり物の

ほそながまたら海などことくしかしぬさ海に
気色ごろりまて大将(タ)の君には宴(女三)の御方よりさうづさ
さしいでゝ宴(女三)の御さうぞくひとくだりかづけ事り
なふなおとゞ(源詞)あやしや。もはら師をこそまづは
もはめし給ひめ。うれりしさことなりとのなふ。
宴(女三)のおります御事のそばより御笛を事ろ。うち(源)
けひなひてとり給いこゝ海ぶえなり。すそし
ふさなしなへば。これたちいでなふほどに。大将(タ)
たちとまりなて。御子(タノ)のもちなへる笛をとりて。
いとゞ面白くふさそてたまへるがいとめでたく
きゝもれがいづれ(源心)もく。これ御(源ノ)手をもなれぬものゝ

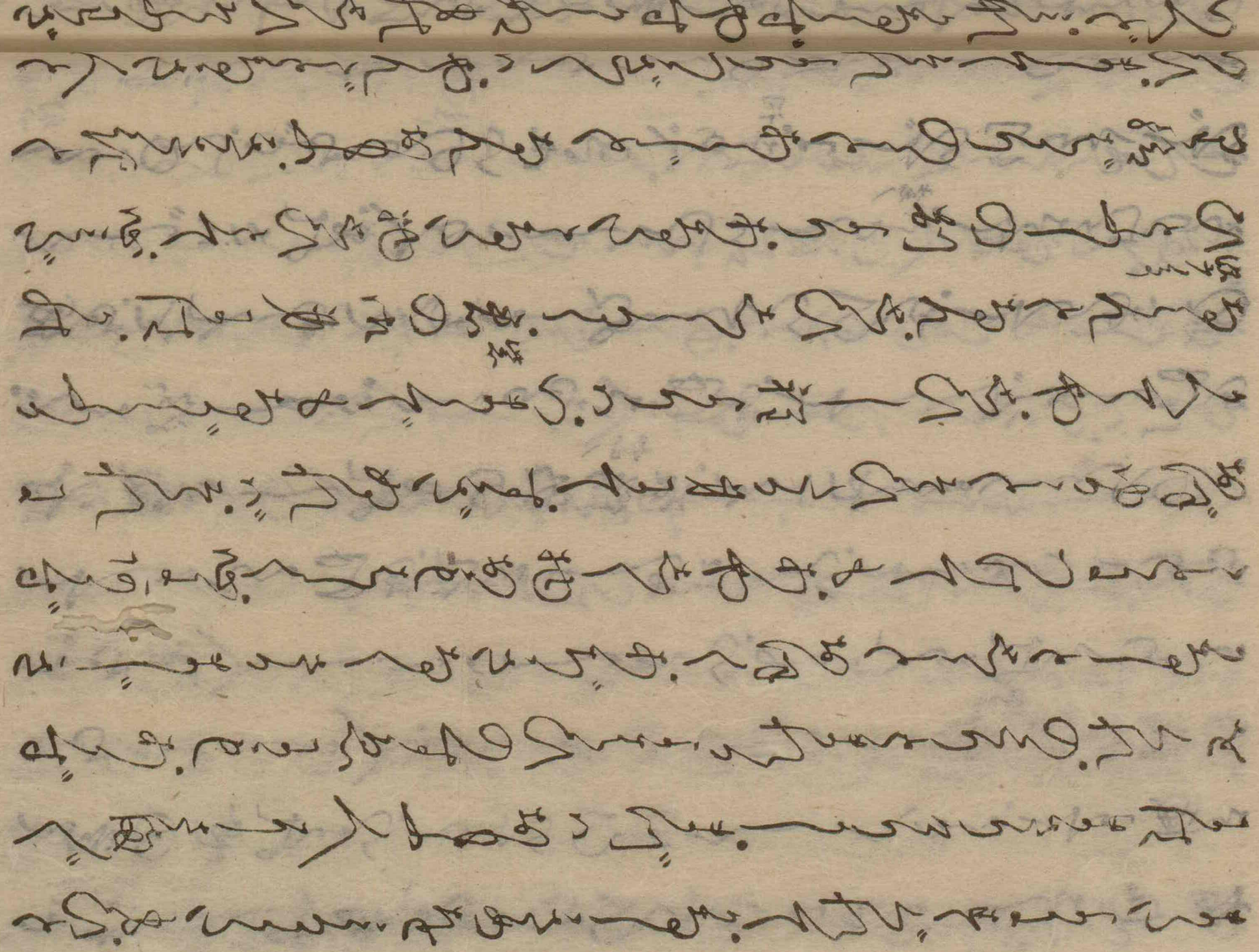
つゝへくいとまなくのゝあるまてぞ。我れざえの
程ありがたくおぼしきられ。大将殿は。君ごちを
此車にのせて。月のすめるにまかでぬふ。こうち
すがし。さうのことのかゝりていうじかりつゝれを。
こゝにつさてこひしくおぼしたまふ。げが和方も。
おもふ家のなしへ。宮をもひしかど。心にもしめ給ハ
ざりしほどに。ゆゑれなりぬひにしかば。ゆゑ
らるにもひさとり給ひで。おとこ君のお前にてハ。
もぢてさしにひさ給ひずおなにともこゝおひしか
に。うちおほとさくうさ夜してこどをあつかひを
いとまなくつゞくしめへぞ。おしこき事もなく



れまもうさくワづらりしそていとまいりけざ
なれがなしへなしねを院（孝）まもうち（今上）まもさんはさり
ともなりし字ゆしんとのこまふとさくがいと
めしくさりもさぞうりのこと紙ごまかくさりけさて
れうしろこまとおづけめへるしりしはとせひ
どこしてなんなど字ゝ始ついでまも昔よづ（雲ノ）ぬ
ほどをおつひさひしさ海その世まはいとまも
ありがたくて心のどうまとりけさをしへきこもう
ことなどもなくちうき世まもおまとなくつさぐ
まざれつてすぐしてきくあつかりぬれことの（雲ノヨゴンノ事）乃
いでざへしたりしもめんぼく有て大（タ）物のいくく

くさかきなざうきうりしくしさもぞかやうう。
うれしくこそありしかるとこそしのぶやうの
すぢもいまは又おとおくきて文ちの御門
うひあそびらもちてし給ふ御もいくしぬること
あつすべてあまどまつけてもまどうしくど
さびしささとまじずぎぐさ人の御宿三位
あれば、らとくぐしぬる人へはよひさしうぬ
ゑめしもおるうとゆきさまでやささしかふ。
地 三位ぐある人の宿縁ともあり御給まはうり
あつあくしひうくへはましとくぐひあくぐと
のこさひこさうしめへりぞうとしは吹七まで嵐のたに

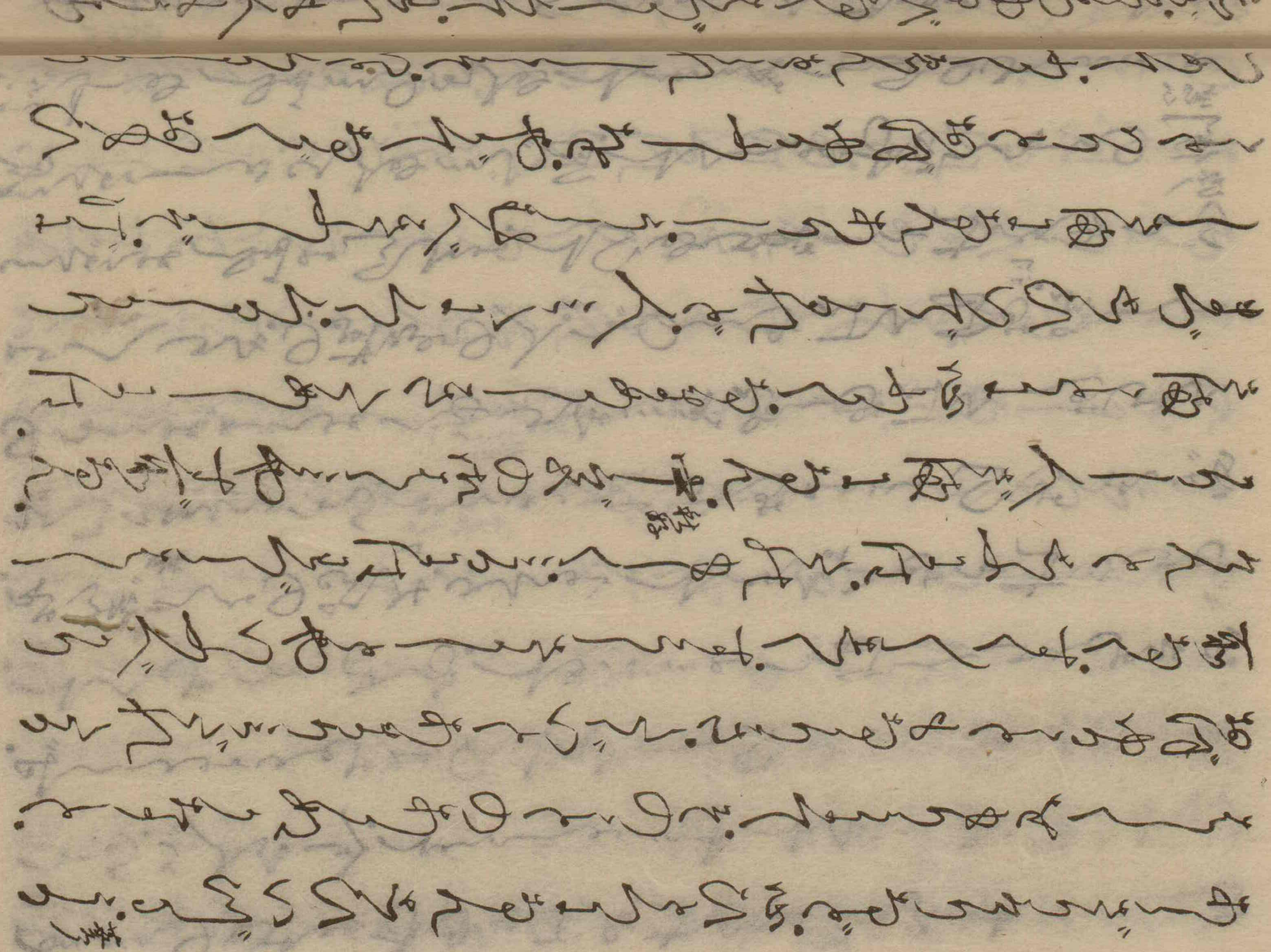
まりのひし年月のことあすとも哀なりし
いづくかいづくまさるべきれいのりなでつまうう
とりわきてごとくしいつしこのへまれさわがしく
のこありて、ぜひいくしぬことまちおんせあ紙
おはしめぐしてお目さちつことぞ涙ちぐ
どのうつしをさせてん、お消息のまれしう夜すがず
るりはさうこそ、いとはずしまれおは月ろうて
うちくまれおんまも、いとりしこうりし人をちど
め給いづ、こうしいおさちくまうり、人ありことちう
さ夜まで、ごとくしくおひいで、いまれ世のさて
有信ごさしるとまくぐひちくちえ有けつ、されど



いひましてそれよりつぎくにやんごとなきさんと
いへどこれなるぞやすかしぬもれもひそふほざ
なりこゝさまじらひにつけても心こゝれ人にあら
そふもひのこゝぬもやすげなさをおやのまどの
うちなごしすぐしぬへるやうなる心やすさことに
なしそのこゝに人にもそぐれたりけりすくをとは
おぼしもるやもひのほかにこの女三のくつたり抱
しぬへることそにな面ぐるしかるべきれどそれに
つけてにいとゞをいふかこゝろざしのほどなを
こゞしのうへなれバおぼしもしずやあんものく
心もかくもり結めれバさりともとなんおもふと
ぞしぬへバ宮村のこまりふやうに抱ちなさ身にいすぎ

まうらうそのおぼしいおしめど。心まどへぬ物なげ
うしさのこうちそへや。さは。こゞしの行まなり
けりとぞ。のこりおほげなりけらひらづしげなり。
まあやうまは。いとゆくされすくなきこちすうを。
こともうくきこしめぐかまですぐすは。いと
うきろめくこそ。されぐもこさいめかくと。いうぞ（お歌ノ事）
れゆるしあらがひこゝて給。これしもおかまぶさ（源詞）
ともまなん。さてけちなれ給なんよりまのこりそれ。
なまのひかおしんぐ。くゞりくなまとなくて。すゞろ
さし月なれど。おけられのへぞそなきうわしさ
のこゝそ。ますゞとなく覚ゆれ。な給さふさ画こと

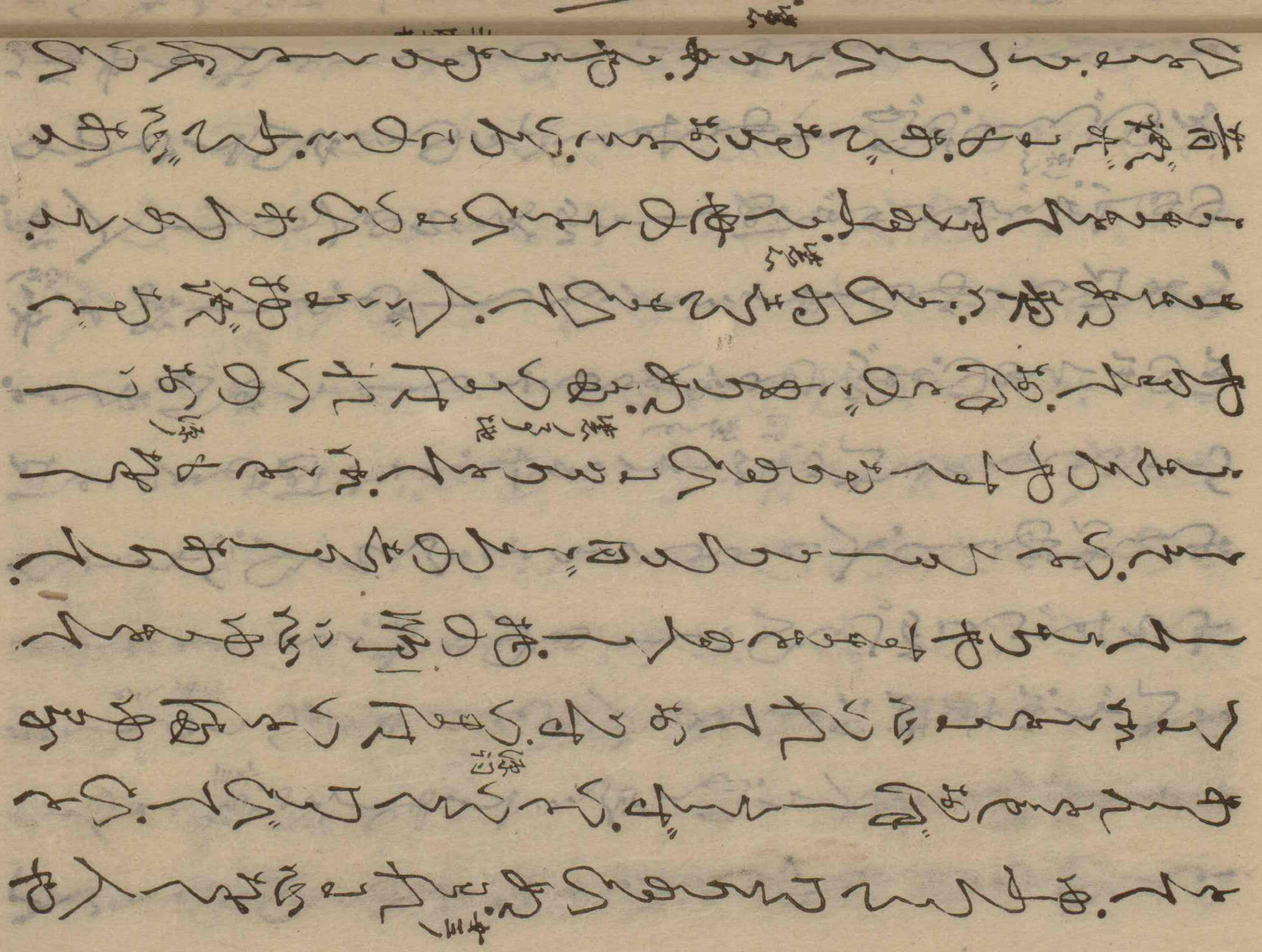
なかなかの程ぞさてぬへとのこ男のかだ。
例（悲ん）のこと心やましくて消ぐることぬへうろしき紙。
（涙ノ）いとあはれとこそ思ひて、よろづに男まざる
もし語（詞）、おほくはおしのだくへの手積の、ざうじくは
くちおしくはおもぬど、こそありゆくまゝにまことの
心ざしをおもひしるにおちねられそいとふきさわざ
ありけれとなん。さそてまくら、大将の（夕）もく（葉）覚を。
おさまりし程にはこゝろそめて、やんごとなくて。
さしぬすぢはいせひしをつゝまおもふよりもず。
へだてある心ちもそやましうして、今せんいかにいと
おしくやさしくおあれ、又ワがおやまちのことを



つめて。おりくおんぎれしとそ。ぴとうるしかう
志がうろゆるびなくさづしくて。これも人もうち
こゆこ。朝夕のむつびをかはさんりも。いとゆし
ましき家のありしかば。打とけてはこゝおとさるく
ことやなど。おまりつくろひしほどに。やがて人ぞ
たりし中ぞうしいとあるまじきんなこちて。
このあはくさくなりぬるなげきをいうじくさひ
志めなへしがいとおしく。げに人がしをさひ志も。
ワがつこあかうちさて。やこましなぐさめに。中宮を
うくさるべきれちぎりとはいひながしとりこてく。
世のそ志り。人のうしこをもさふず。心よをなるなか
の世ながらもこれをされぬんいまもひりしも。

なをざりなる心のすきひよいとおしくやしき
ことも御ゆくなんとこそしうたの人のれうへずうし
づくのゆひいてゝ間のれうたのれう（昭右上ノ事）ちろこはなる
ぢうりの程なるゝずとおなづりそめて心やすき物に
さひしをなる紙心のそこゝしずさはなくゆゑ
あるへなるんうりべは人にあびきおいしうるこし
なぐしうちとけぬ気色さるまこもりてそこゝしうと
なくそづしき事をそあれとの給へば（紫詞）と人は
こゝはばしぬをこれはまかなしほどをのづから
気色こうなりくもあるよいとうちとけるゝ
心をづしき事を信じるをきをいとしくなるさうし

あさ氏いうまこゝぬかんとつゝましかれど。女(吟君世法)は
とのづゝ。おぼしゆるすんとのこせひてなんと
のゐふ。さぞ(源ん)りめざ夜しと心をさのへりし人を。
いまはうくゆるしてこそうちしなどし給も。女(吟君ノ)
れのれこゝめの。ま心ありあまりぞうしとおぼせる。
いとゆりがたかれば。忍(詞)こそいさすがよく夜なさまは
あらぬ抱し。人よりゝとまさるがひ。いとよく
ゐさすぢる心づゝひいしのひかれ。さしらまこうら
これど。れ有様によるゝ人はありかり。いとかしき(地根ノ事)
こそもれしぬへと。御思こそ罪し給。宴(女三)よいと
うくひきさりのへりしことの。よろこびきこえん



とて。ゆゑつゝ口たりのひぬ。女三ノまれに心をくへや
あんともおぼしたらず。いといたくわびて。ひと
へにれことに心いれておもす。源氏いまはいと海ゆゑ
してうちやすまをのへし。地の御心ゆりをて
とそ。いとくるしかりつる日ごろのしるしありて。
うしろやすくなりのひにはりとて。れこともをし
やまて。おぼとのごもりぬ。紫ノ子地 女いまはれいのおりし 源ノ
まきぬ夜ハよひのしるしまひて。へゝに地獄などに
よりまをて四ノ女ふ。紫ん うく世のことひにいひあつかう。
昔獄だにも。あぶなかりとこいろこのこゝ。ふる心あり
ひとにうしづしひたりぬ。うやうなりしとれいひ

ほどうくなんとも罪なく。女(宮石女は)はのれるゝより。(涯)はせう
そこあるに。うくなるやまうしくてなんと罪なへるに。
(涯ん)おどろきて。そなるゝより罪なへるまはつぶれ
て。いそぎはしりなへるまいとくるしげまておはす
(討)いかなれこゝちぞとて。さぐりまりなへいいと
あつくおはすれば。きのふ罪なひしはつくし
このすぢなど。おほしあはをなて。いとおそろしく
おほさるはかもなどこなるまはいしきこれど。は
らんじもいれず。日一日そひおはして。よろづにこ
まりなげき給。ちなきはんぐ拖をぐるいと拖うく
しなひて。おきあがり給ことこして日ばんぬいか

しぬひて。おきあがり給ことして見ばへねばか
なしんとおぼしきゝさて。はいのりどもかぎ志しぶ。
もじめきせぬふぞうめしてはかぢなどもきせ給。そこ。
ところともなく。いうじくろしくしるまひて。
ひ日ハ時ぐとうつぎぐひ給さ夜ふへがらく
ろうしけるりさ夜ぐの内つ志ゝうざりなけれど。
志ましもこゝぞ。をもしとこれどをのづからをこ
ゝろけぢめあしがこれもしき紙いうじくこゝろ
ぼそくなるしとこゝ事りぬふまゝとくおぼされるが。
此(手)笑のひぐきも志びまりぬ。これ院(糸)よりもかくまづ
ぢひ給ふしきうしめしてはとふひいとねん
ごろまゝびくきこて給。おなじ(笑ノ)き夜まて。二月も

すざぬいふかざりなくおぼしなげきて心ゑ一所を
うへ一夜ゑんとて二条院にはしまりまひ川院の
うちゆすりこちてぶひなげく人おほかり淡泉院も
きこしめしなげくこの人うせ給ひぬ院もかなしず
せをそむくはかいとげまひてんと大将君なども
心をつくしてこまりあけかひまふれずほうなどは
おほかるのをばさりもれまて三宮はさて川かふ
まつらを給いさくかもれおぼしはまはさ詞こ
ゆかしと紙ざるを心うくとのこうしこゑてまへど
うざりありてゆかれたて給いんよりもめれまへは
祇心とやつしすて給いんれ宿徳をこそはさしは

かゝ時こゝふまじくのこゝおしくうちしかるべかれだ
者よりこゞうしぞかゝるほいふうきをとまりてさ
うざうしくおぼされんこゝろぐるしさまひかれ
つすぐすをさうさ海ようちすてゝ海ちんとや
おぼをとのこゝおしこゝきてゝかゝまげまいとこれこ
がらげよよりつゝ(紫ノ)恨のさ海ようこゝしまふおりく
おぼうりをいつさ海(源ハ)よちんとおぼしまどひ川
宮(女三)のれ方よもおかしさ海よりたり給ちぜれこと
だもすさ海じくてこれひきこめられ院(六条)のうちの
人ぐいこれあるかざり二条院よ川どひ来りてこの
院(六条ノ)よ川光をけちゝるやうまてこゝ女どちおりして

人ひ(紫)どりのれけるひ女(ゆ)りとこゝ也。女(ゆ)れの君もけるり
ゆひ〳〵もろともまこゝなりあつりひ給ふぐ(紫詞)りも(ゆ)(懷姫之)
おりしまさぞ。もれ(紫ノ)くけるどいとおそろしきをさやく
まりゆねとくらしきれこゝちよもきてしゆふ。(今上ノ)見り
女(女一宮)のいとうけくしうておりしますこ(紫ノ)なりゆても。
いうじくなきゆひて。おとなび給いんをえこなしぞ
女なんことゆもれ給なんしとのうまへば。女(ゆ)れをさ(ゆ)(女れ心)
あへずなりしとおぼしたる。ゆ(詞)くしくなおぼし
そざりともなしうハもれし給りじ。心よりなん。
人ハともくもあるをさてひろきうけハもれまは
さいたいもそれまたくらひ。をばき心あり人もさうな

さいたいもそれはしらかひ。まばき心ある人はしさふ

べきよそ。ぐうき見となりても。ゆゑかりゆかべ。

かたいをかれ。きうなりひとはひさしくつゐなしぞ。

心ぬるくなぐしかなる人はながきこゝあしなんなほ

かりけるなど。伝神にもこのれころだものながらく。

つこうるさき夜をしあきしめさせぬふ。こゝずほうの

あぎりしちよねなどまてもちくさふふかぎりの。

やんごとなき僧などはいとかくなほしまどへるれ

けれひをさくにいといたじく心ぐるしかれば心を

をうしていのりきゝ也。すうしよろしこさき夜より

こしぬふとき。又六日打まぎつ。又をもりまづしひ

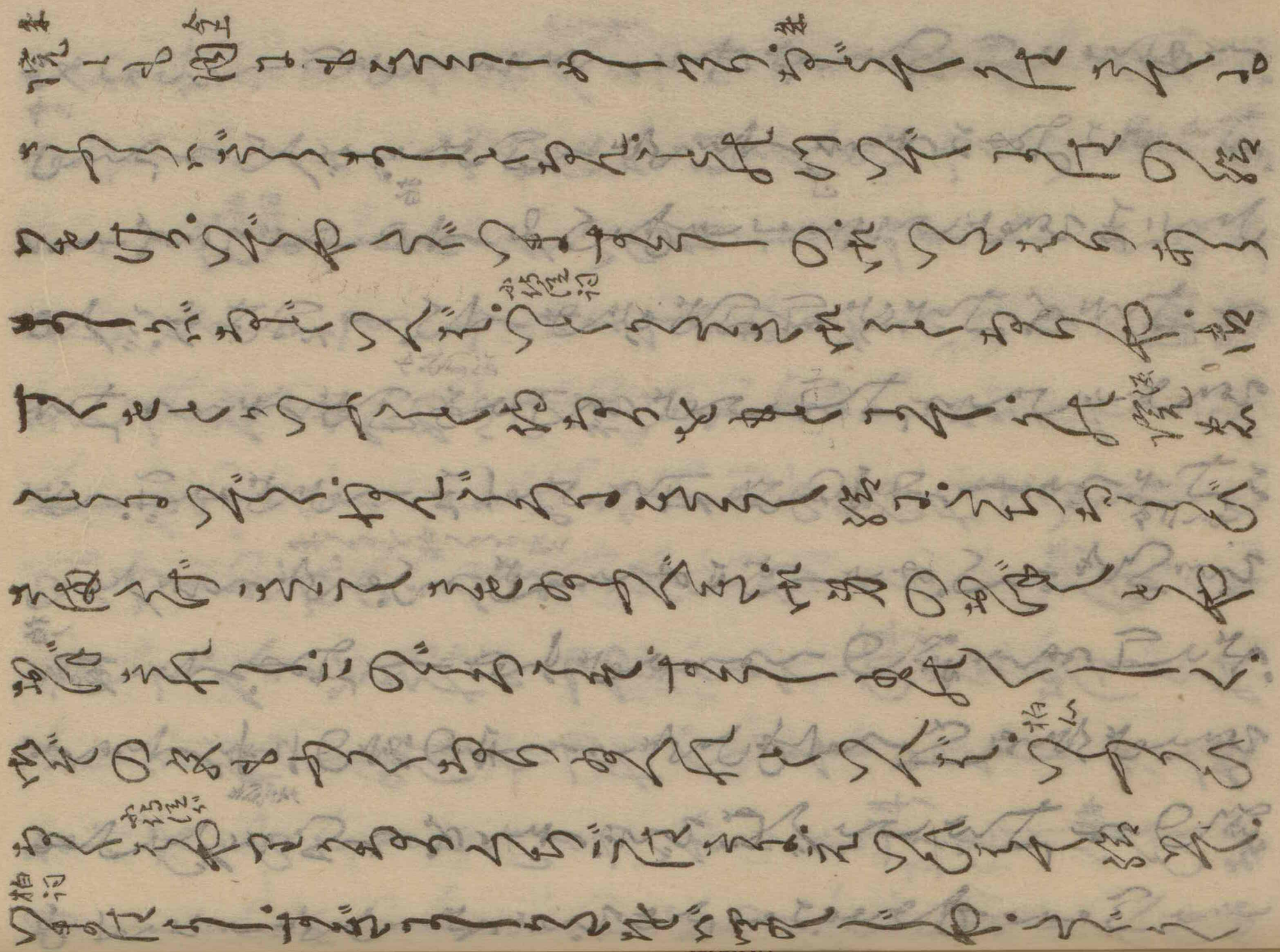
給こといつとなくて月日をへぬふはなをいうま

しられば心やすきうきまじきて心ひ罪ゆへり人

がしもなんてのへまゝ心ひなずしられバけきひこゝ
なくおもすれど。もとより志こゝましうこそ女三ノ事なる紙
ふりまれなぐさめぐさきをバすてまて。人めゝ
とがめしかましきぞうり。もてなし罪ゆへり。なる紙
かれ志このころワもとれぬ小侍従といふかたしひ
人ハ。宮女三のれぞうのめれとれむすめなる事。その
めれとれあのぞこのんの柏恵のれめれとなり分れぞ。
きやくよりけぢくきくなりて。まぐ女三宮おきなく
おりしまさて時よりいとしきよしなんおりします。
こゝどのうしづさなりぬつき海なぐ。罪柏ノをさなりて。
うかおもひもつさそめうなりなりぐくて院(源)も

さゐれおりします程人（女三ノ方ノ）めすくなくしめやうなるん
をとしたりて小侍従をむかへとりつくいとじう
うたふむ（柏詞）しよりくいのちもたふまじくしふ
ことをかうしたるしさよすがありて此ありさ夜を
たくつたへかゝへぬ心の程をもたくしめさをてこの
もしきよさしるそれしたりしのなければいとじく
なんつたき嘆（朱ノ字を柏ノ字ニ誤ル）のうへごまかくあまるにまかけく（添ノ）
しくて人をとされぬやうにて（女三ノ）ひとりおほとれ
ごもりよれくおほくつれぐにてそくしぬるや
なじひとのそうしけるついでにもすうし（朱ノ）くひ（悔）お
同しくれかしきにておちるじくいたく人の心

やすきうしろこをさぶめんにいまめやかにけうう
まつるべきひとをこそ。さぶむべかりかれとの給
ましまして。女二（藤墓）の宮の中くうしろやすく。引き忌ながき
さ海まて。もれしのふなかことくの給ましをけるを。
（柏ノ）うくへきくしまいとおしうも口おしうも。いかでもひこぶ
ゑく。げにおなじ此すぢとは。殿の宮にしぞ。（女二ノ事）それハ
それとこそおぼゆるつぎなりけれとうちうめき
ゐへば。小侍従も。（小侍従詞）いであなおほけなそれをそれと
さしをきなりゐて。又いかやうにかぎりなき此こゝろ
なるんといへば。（柏）うちほゝゑみて。（詞）さそいまれハ有かれ。
（女三）宮にかうじけなくきこそしさせをよびけるさ海も。



えぐらきもれひまゐ。けぢうきほどにて。この心乃
うちよせしことのもし。すこしきてしきをぬべくこそ
かりぬへ。いとおほけるき心に。すべてよしこゝまん
いとおそろしかれば。せひもなれて。ゆりとの給へば。
これ（小侍從詞）よりおほけるきこゝろにいかゞにあらん。いとむ
くけけきことをもおぼしよりけるかなまし
まりつゝんと。たちづく。いで（柏詞）あなきくにくおまり
こちこくもれをこそいひなしぬふべかれ。世を
いとさぶめるきもれを。女れ。后もあるやうありて。
もれしぬふ女ぐひなくやに。ましてその（女三ノ）れあり
き夜よ。おもへばいとこゝぐひなくかでこけれど。うち

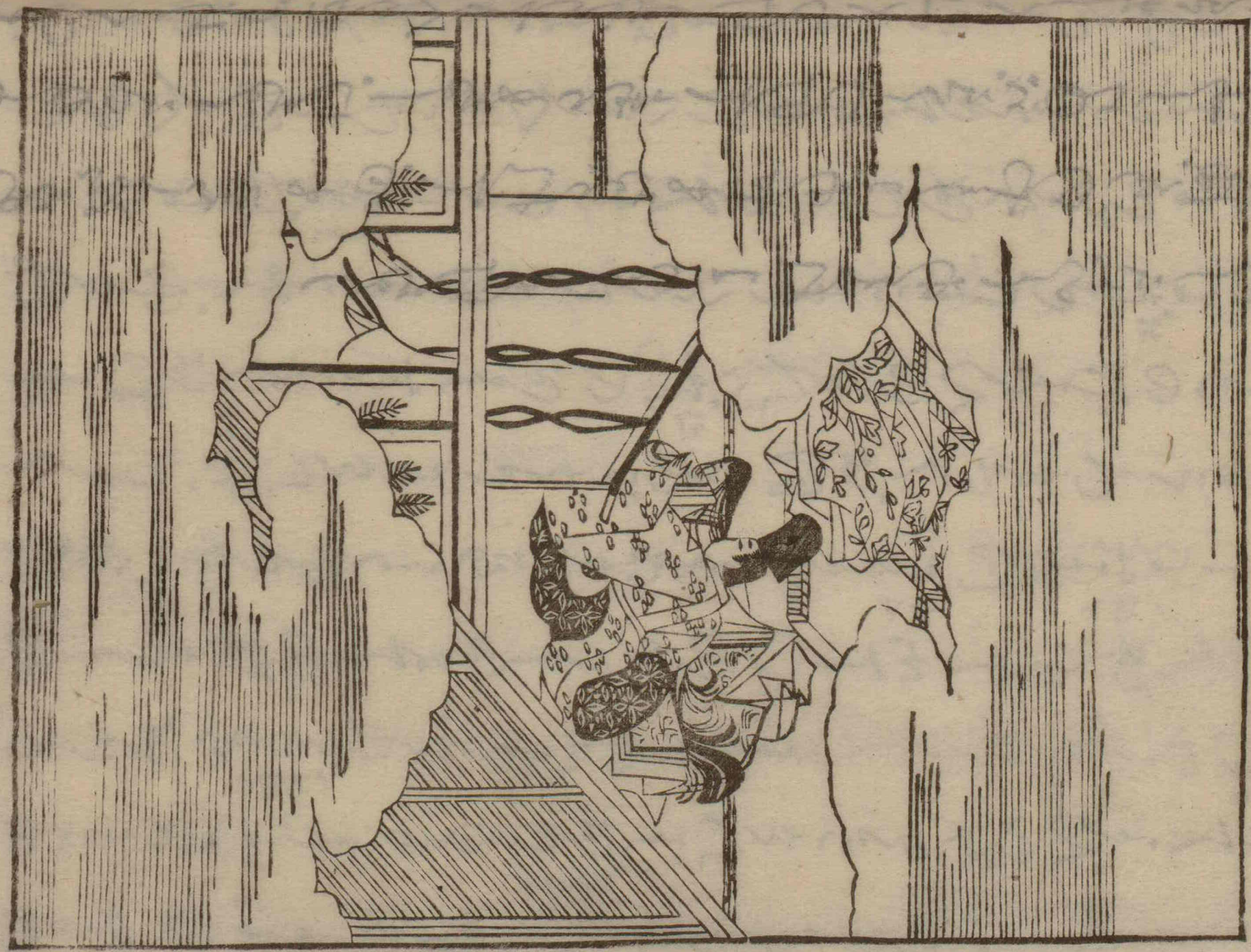
うちは心やましきるもおほかるん。(源)院のあるるの
此中に文ならびなきやうにおしりしきてなひ
しにさしもひとしうしぬきはのれうるぐり
たちまじ望めざ夜しげなることもなぬべくこそ。
いとよくきく侍りや。世中いとつ日なき物をひと
きはにさひさぶめてたしたなくつぶぎりなる
ことなの給そよとのなへば。(小侍従詞)人におとされなへる此(女三ノ)
を様とてめでたきうるにあしくめなべきよやは
侍らん。これはよれつ日の此有様ありも侍らざめり。
たぐれうきろきなくてたぐよくしくおりしまさん
よりはおやざ夜にとゆづりきてなひしうぞ。

りこまさしそせひかりしきてしさせ給へめまし。
あいなくれをとしめごとはあんとおもてくをいう
ごろをよろづ（柏）にいひこしらへて（詞）まことはさばかり
よるなきれ（源ノ）有様をこまりなれぬへるれ（女三ノ）心りかず（柏ノ）
まもあらず。あやしきなれすぐるをうちとけてれ
らんぞこれんとは。さしるおもひかけぬことなるを。
こゝひとことも此ごしまて笑しきてだりを。
なまだりのれ身のやつれはかはあらん。神仏にも
せるやしてはいこゝありつぎうはといこじきちう
ごとをしつの給へが（小侍従ん）しばしこそいとありまじき
ことはいひへしかれ。もれかくらぬまう人は。

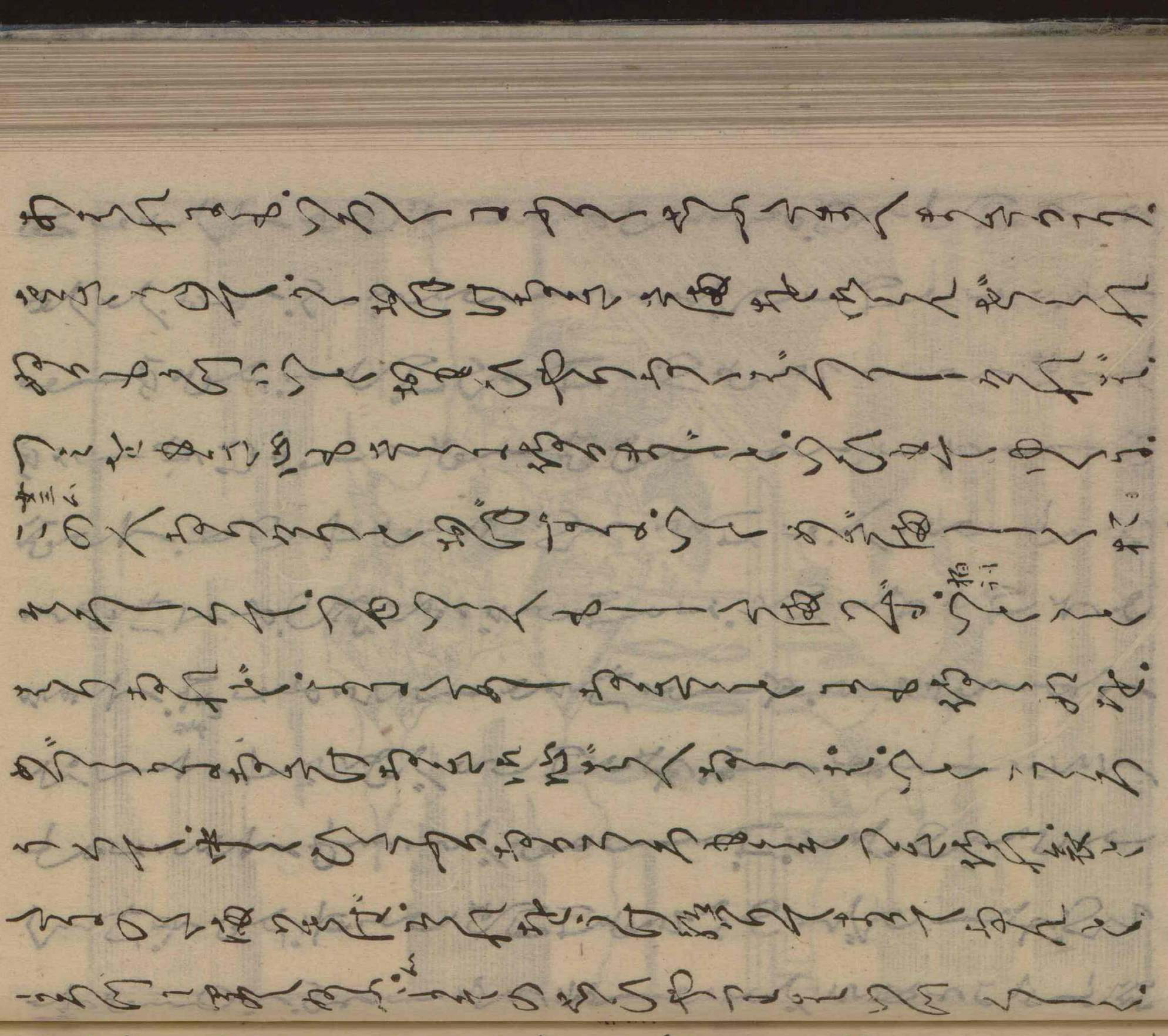
人のくちはうへていましくやひのすみをぞえい
あそびまてゝ（詞）ゆしさりぬべきのまおとづればはべら
侍らん（源）院のおはしまさぬ夜は桜の花ぐもり。
人知れくまつひておまへのまへさりけりさりぬべき
ひとりもすずしきひまはいかなるおりをみて侍
ひまをうかがひ侍らんと、こびつくりぬ。（柏ノ）いかに
いかにとひごまをあはれをうしくして（小侍従）さりぬべきおり
うちひつけて、ちかうそこしなさをとり（柏ム）よろこび
るいづいくやつれ志のびておはしぬ。まうさる
わがこころにもいとうしろしるれど、けぢ
うしきなりのきもふかくも、まうさんべきこし

まで。いたひもよらず。さぐいと。ほのうるはれぞのけま
ぢりを。こゝそまつりしちうのゆふべの。おうぎよ
とゝもるせひいでられぬふれありさ面を。すそし
けぢくてこまりせふことをもきそしたゝせてい。
ひとゝぐりのれ也などもやこをぬひおそれとや
おぼしたうとぞたひけう。四月十五日ぐりのる
なりこそぞあすとて。秋院（淮さ家）にこそまつりぬふ。女房（女三ノ）
十二人ごとるごらうまはあらぬ。ワ人まゝそんべ
などをのがぢくもれぬひけさうなどしけく。もれ
こんとたひまうふうもさりぐまいと面なげまて。
十三ノ
れ前のうるたちめやうる。人たげうらぬありなり。

ちくさふふあぎちのきこも。ぱぐくよふ源中将
きめてよびいぐさをそれぞ。あせちり ありこうまゝこぐこの
伯浪ぢうりちくいさふふありうり。よきありと
ちひてやなしれ丁のひんぐしおもてのおましの
もしにすゐ。拍ひ さまでもあるべきことなりやハ。女三ん 宮ハ
なるごろもなく。おほとのごもりにそれば。ちくく
おとこのけちひのすれば。源 院のおもすりとおほし
こうにうちりしこまりこうそしきこそ。ゆるれ
しもにいぐさおろしそまつるに。女三ん もれにをそ
まるゝとしきめてこあげこまへれば。おしぬ人なり
うり。おやしくきくもしぬことぞをぞ。罪ゆるや。



ゆ寸なるほどいとうしきも常しめさうべきかとはしふ給
へられぞなん。昔よりおほけなきんのまぐりしをひさ
ゆるまこめてやしまうべなまりしかば。うろのうちより
くらしてすぐぬべかりけるを。中しもしきこそ
さきて。院(茶)よもきこしめされましを。こよなくもて
まなれてもの給りをざりけるに。これをかけそめ
給りて。才の寸なるぬひとはに。人よりふりさ
心さしをむなしくなし給ぬることゝうでうし給
まし心なん。よろげいまはかひなきことゝおもふ
ぬへかへさどいかばかりしこまぐりまけるまゝ。さし
月はそへてくちおしくもつゝくもぴくつけくを



もれなれてこしなんもまづしくぞしまられ
なつまぐぐりもひめくるるはしまえて
しらきて、けくかけくしきことはなくて、やこ
なんとしひしうどいとさぶりけるうまづし
げにはあらでなつしくらうたげに、やまくと
のこゝろくなふれけるひのあてういうじくおぼ
ゆることぞ、人は以させ給はざりけるさしくしひ
しげむる心もうきて、いづちもくあてかくし
なりて、我方も母にふるさ面ならず、何とこゝて
やこなぐやとぐでしひえぐれぬくぐいさくかまど
ろむとしもなき夏に、このてなしきれこのいと

らうたげにうちかたらひてゐたれば。此（女三）家にすまんとて
わがおもてにこゝろとゞめしを。おぼしけるにすみつくんと
三みの君におどろきて。いひまことつたへんとおもふ。
（女三）家にいでゝあるましくとて丸おぼし給ひぬれば。此の
かゝりて。おぼしおぼしけるを。お（拍词）給ふのがれぬ。
れすくをれ。おさうしきりけると。おぼしけるを。男
づしの心あづかるうけしゞろにはあへずあん
おぼし給ふ。それ思ひあさりしうすみつきをれ。この
つまびきゑらし身（男）のことも思ひいでられけ（女二人）る
さもくありけんよしは。おもしくちおしかりつる心うさかれ男
ありけり。院（法）にまいりてはいでゝは思ひ住まんと。

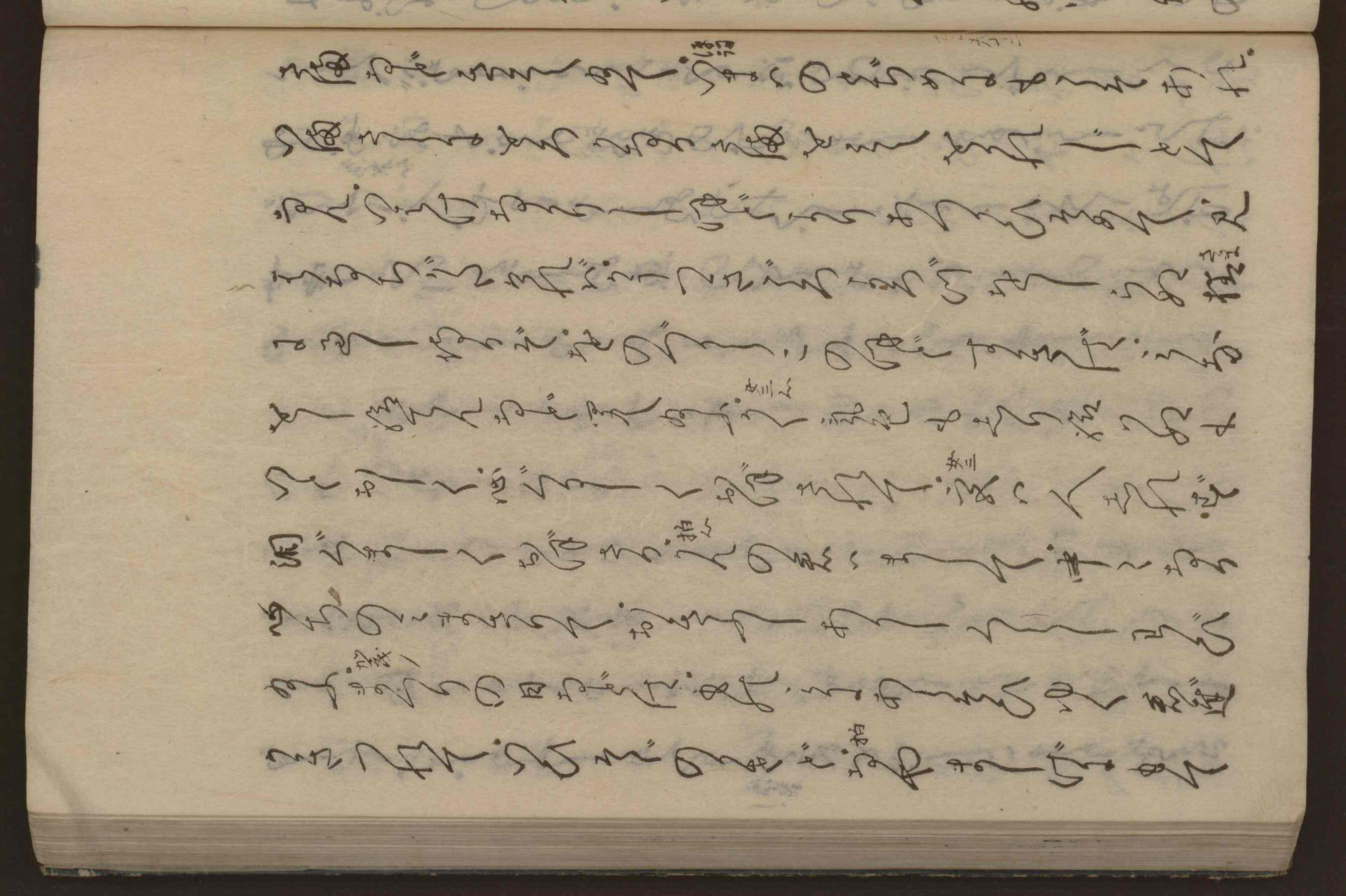
りなしく心ぼそくて、いとおさなげにあるさまふを、
いとうじけなくあれとこなりて、人の山洞をさ
へのぞふ袖を、いとゞつゆけさのこまさる、あけゆく
気色なるに、いでんりこなく中くなりいりぐいし
ゆるべきいうじくまくまをみへば、又きてしさをん
ことも有がたき紙、あぐひとしこれこゝをさるを
みへとよろげに罪なきやまするも、うるさうまびし
くて、おもてさしにいもれこ海もねば、おもてくに
むくつけくこそなりゆりぬれ、又りるやうにあら
じといとうしとちひ罪して、さしばかりなあり、
外をいうづらにやにあしもてぬいとすてがたきに

よりてこそ。かくまでも侍れ。こよひまかぎり侍り
なんもいとじくなんづ。もまても此心ゆるし給さ面
なしがそれまゝへつゝまてもすて侍りなましとて。
かきいざさていづゝまゝ。女三ム さてはいかゝしけるぞと
あきれておぼさる。拍すこのまれ屋風を引ひろがて。
とをおしあけられば。ム けさ夜の南のとれまへいり
たゞまぐあきながらあるまゝまぐあけられの程なるべし。
ほのかまゝなんのころあれば。かうしをやなる
ひきあげて。詞そういとつゝきれ心まゝ。うけし心を
うを侍りぬずそしたひのどめよしおぼされば。夜と
ぐまの始もをしと。おどしきゝ也るを。女三ム いとかげしろ

をりしもあばしてあれもいかんとしのへど。わかすく
れて。いとゞけふくしされ夜なり。あかずあけは
あけゆくは。拍ハいとゞ心あわたゞしくて詞おもはれなる夏
ずかさりもなくてなすべきやうくまをのへども
そでさりとてもいまをばしあはすこともなりなん
とそのどかなしずなる出る月ぐれ秋の空よりも
心げらしなつ
拍おもそりそもむすれぬ明暮はいづくの
家のうち袖ならひさいでうれへなきもかれども。
いであんにすなはず女三ムらしなぐさめ給ふ夢
女三あけぐれの空ようなきりいさしあらん夢なり

まもいとあるまじきことにいふあるもむくつけ
くおぼゆれば、おもひのまゝにもえまぎれありかず
たとへだのすゝ
みうどのれめをもとりあやまちて、ことのきこえ
あるんにかぎりおぼえんことゆへには、身のいる
づこにあるんことも、うしくおぼゆまじ、しらいちだる
きつこにはあるしぞ也、此院（源）にめをそばめられなんん
ことはいとおそろしくまぐしくおぼゆ、限（地）なき
女は文衣ちゝのすゝ
せんちと男ゆれど、すこしよぐきたる心ぞんまじ也。
うへはゆへありこめりしきにもしるべきぬ、しるべき
うろそひたるこそ、とあるゝとうらゝとりうち
すびき心かりし給ふぐひもきれ、これ（女三ノ事）もかき

心もおもはぬ。ひとともむこさま地をぢしぬへる
れ心ゐ。こゝいましも人のこさくつけこんやうは。
夜ぢもくまづしくおぼさるれどおろさ家ゐぐる
えねざりいで給ぬ。いと口おしき身なりかりと。弟
づしおぼしたるべしおもまし女三ノげるなんとみれば
源ム おとゞきゐて。ひとりぐれ心をいけ給れ雲ノとり
うちそへて。又いるとおどろかをぬて。ひとり源女三ヘぬへる。
女三 そこもとくるしげなるともこえ給ぬ。いと
いてもぢらひしめりて。さやかりもこゝおもせ
なり給ぬなを。ひきしくなりぬるこ夜をこしめ
しくおぼすやといとおしくて。れ雲ノこうちの



さ海などきこしめて。いまいのとぢめまもこそあれ。
いまさしまとろかなるさ海をこしをれじとて
なん。いまけなりしほどよりあつかひそめて。見
まちなぐるかれば。かうつさごろよろげをしらぬ様
まるし侍りぞ。をのづしこのほどすきば。こうな
をし給てんなど罵ぬふ。かく乳色もしり給ぬよ
いとおしく。心ぐるしくおぼされて。家は人しれぜ
洞ぐましくおぼさる。かんの恋いましてゆくなる
心ちのこまさりて。おきあしあしくしし見び
ぬふ。まつりの日などは。もれこうまあしそひゆく恋遅
うきつれて。いひそぐのうきどなや。ましげまもて

あしておなじみのへり。ゆふ顔をべにしこまりなさき
うき世にまてあし男て、おきてうちとけても
えもなり給はず。我方にまゐれぬそいつれくに
うろほそくなかめくまへるそ。つゐへのまくら
あつひたとこめて
拍くやしくぞつきそしけりあつひ草神の
ゆうきりうごしあしぬに・とゝまもいと中にあり
世中ちげうなしぬ車のをとなかと、そそのゝとく
きゝて、ゝやすなしぬつれぐに・若菜しかくおは
ゆり・ゆふ顔も・がう色のすきまじきき・えうしられ
さまへ・ばなまごとくいあり給ひつ○ど・たづしくめ

ぎ面しきは。もれおもりしくぞおぼされなる。女房
などは抱えまえれいでし。へずくなるのどやかなれば。
おなじめて。さうのことなるしくひきまさぐりて
おもしすうけくひも。さすぐるあてにあまま見うし
かれど。おなじ（拍ん）くはいまひときは。とこにばざりけり
すくせんとし。なをおぼ也

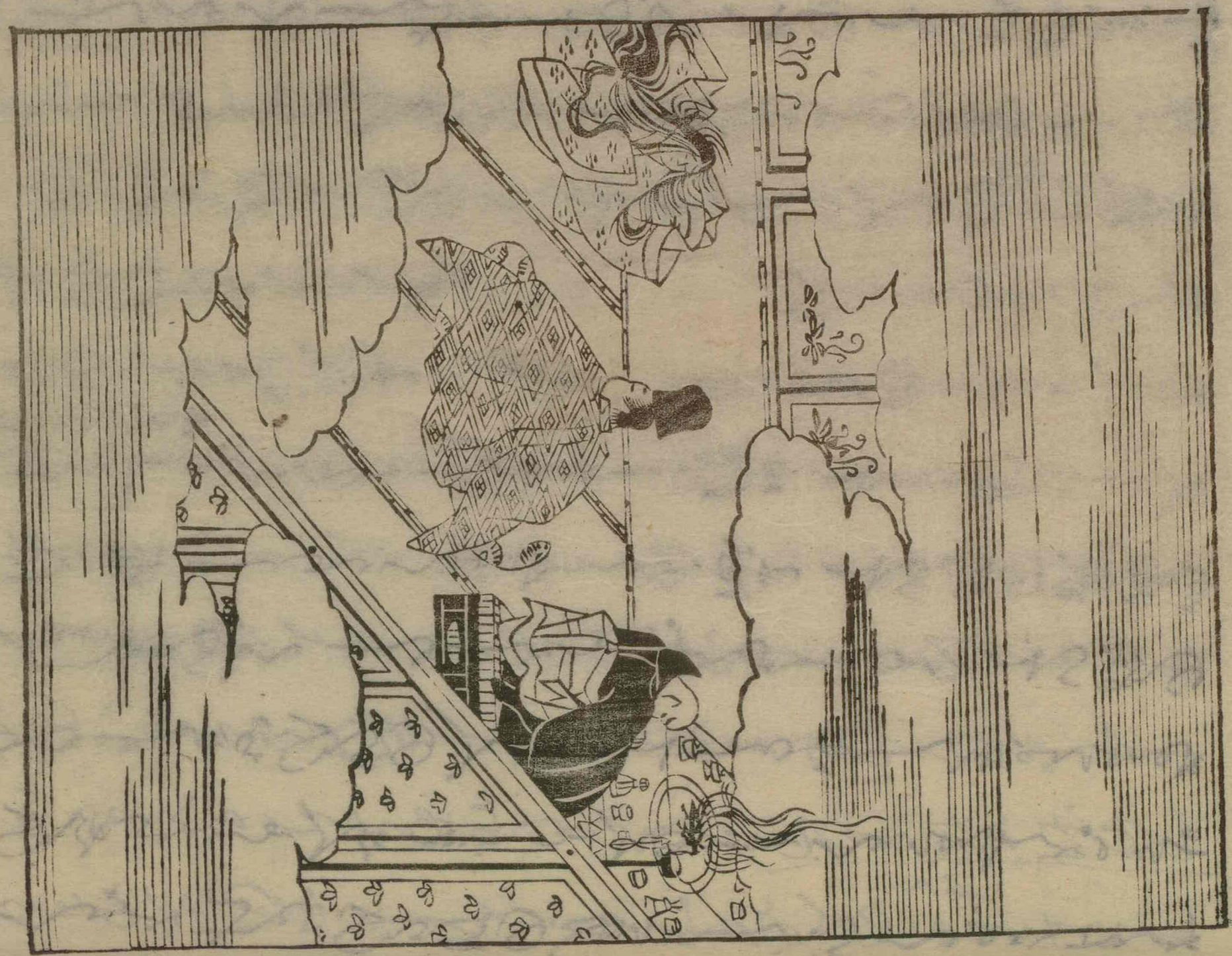
（拍）もろうづし落葉（おちば）をなまくひろひけんなはむつ
ましさうざしなれども。とうきすさひねたる。いと
なめげなるしうごとなりうし。おとゞ（源ん）のたうこは。
まれく（女三）ひたりなて。えふともこちへりこ面をず
しげ心なくおぼさるしに。（紫ノ）こえいりなぬとて人まり

まみけのすつることそあしかめつことひとうへり
かぎりぞそこしちげめなてつよくつよくいさ分限ず
をそてそへさき経きぐれさうげんざぞの恨ちうし
おもあそてうらりあつれいのちまそごの世いき
すひめともくてうきせらしのゆめのひ不動尊の
ねんりく
六月いさのびころすとえへ
れなのちうひありそその日うずそざうけくえ
なりぬへとうしらより申ことよころけかりな
そていうじきころとをこうてなしなう院も
うじ今ひとよびめをこあろをへいとあへあく
りぎりありつしん得とをくつまえこ寺ありまけり
ことみらやきくうあすしさとと営しまいへる由

とまりぬべきまもあらぬを。ミなり心ちどもくぐ
もしまうらべし。いうじ（添ノ）きれころのうちを。仏も
ミなり給まや。月ぜさしまあらかれいでこぬ抽の
けぢつきつらつるまうつりて。まだひのこしる祠に。
やうくいきいでぬふまもうれしくもゆくしくも
おぼしさはがう。いうじくてうをられて。人（詞）いこれ
さりね。院（添）ひとしころのはこしまさこんをのれを
月ぜてうしまびさせ給がおさけおくつらかれば。
おおじくいぞしまうしをんとせひつれど。さすがま
いのちもたふまじく。身をそぐさて。ぞしまぐふ法
えそてまつれば。いまこそいくいこじ。きみをうけ

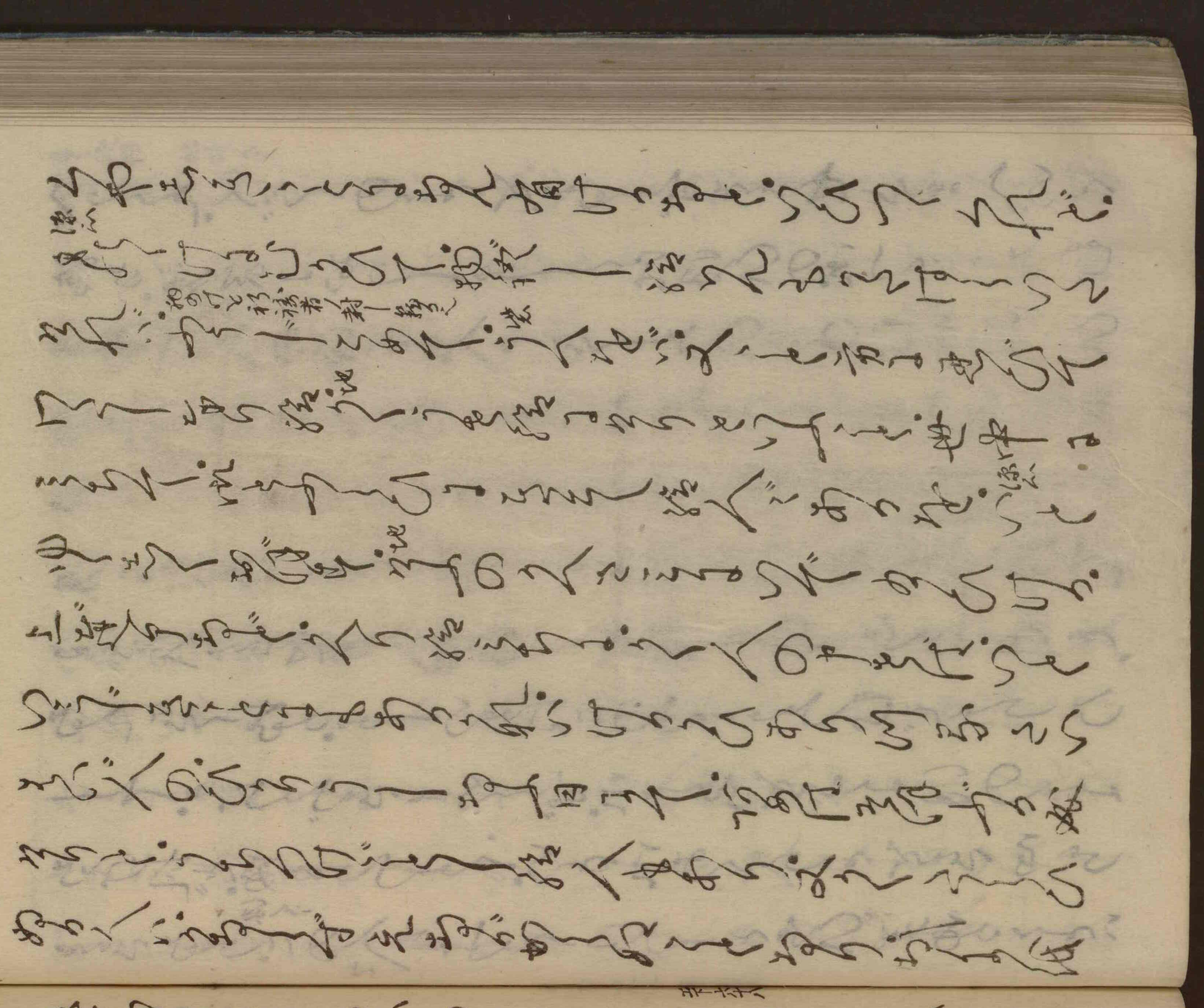
されいまし人の心のくらりてこそ。うくまでも思り
きろうなれば。りのくころぐらしさをえこすぐさで。
つねまうしいれぬること。さるまたれじとせひ
つゝもれをとて。かきをかりかけてあくけひ。ふぐ
むかしこゑひしもれ（蓼）けのさ皮とこしたり。おさ
ましくむくつけしと。おぼしまこましことの
かりぬもゆしかれば。はけしいのてをうへて。
ひきすへて。さ皮あしくもをさせ給ひず。まくとま
その人かよかしぬきろもなじいふなるものゝこは
かれこうかなき人のおもてぶをなること。いひ出う
もあなるをこしなるなのりをよ。まこ人のきし

ごとんことの心まさりくこひ出れぬべからんを
いへざそなんいさゝかまそもさんずべきとのゝ御
へバほ（まゝ云）ろくといくなさそ
（まゝへべ相のけの方へ）
我身こそおしぬさ御なれそれなどしそしおぼ
れすり君い君なりいとつくしくとなささけぶ
抱かしさすがまもれそちしさろけまひかいしぞ
中（添ふ）くいとうとましく心うけれバもれいりきじと
おぼまて



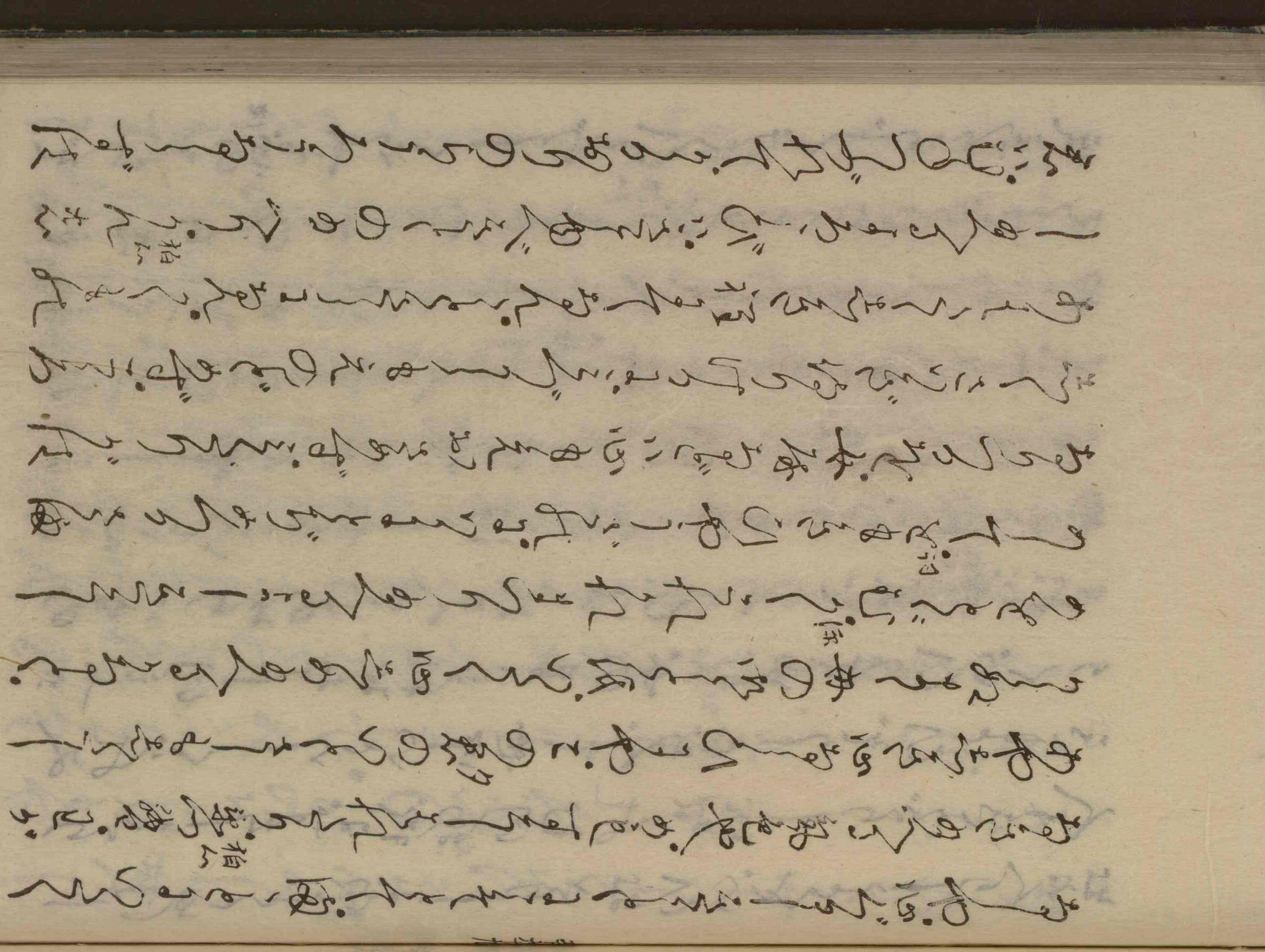
中宮の御ことまでも。いとうれしくかたじけ
なしとなん。おまかけるとてもこなれど。こちことを
ぬれば。このうへまでもかくおぼしぬるやあらん。
なをまづうしろしとしひ申し。こゝろのしふ
なん。とまる物なりけり。そのなるまも。いきてのうよ。
人よりおとしておぼしまてしらりも。しふどちの
此物紙の御いでを心らうしすまくかりし有る夜を。
の給いでしりしなん。いとうしめしく。いまはこで
なきを覚しゆるして。こゝ人のいひおとしめんを
ごとのたぶきかくしぬへとこそ。しへとぞちしひし
ぞかりなかくいとしき男のけりひなれば。かく而

ときなりこの人(ぶん)をつくしとしひ写ゆることは
おけれど(ほくり)後もりつよくいとれあたりとをき心ち
して。えちうづきまいらずれと思をざるほのる
なんをくゆうよしいまはこのつこうろむぢうり乃
まぎ代をきせぬへずほうど程とのこしうことを。
身まはくうしくまびしきほのほとのこまつれて。
さしまこうときことをきこしるがいとうしく
なん。中(秋好)宮まもこのうしをうくへきてぬへゆめれ
こやづうへのほどは。人とをしろひそうむ心にひ
給ふ。神宮におりしましし比ほひのれつこうろむ
べうん。くぐくのことをうるらずをきせしまへいく

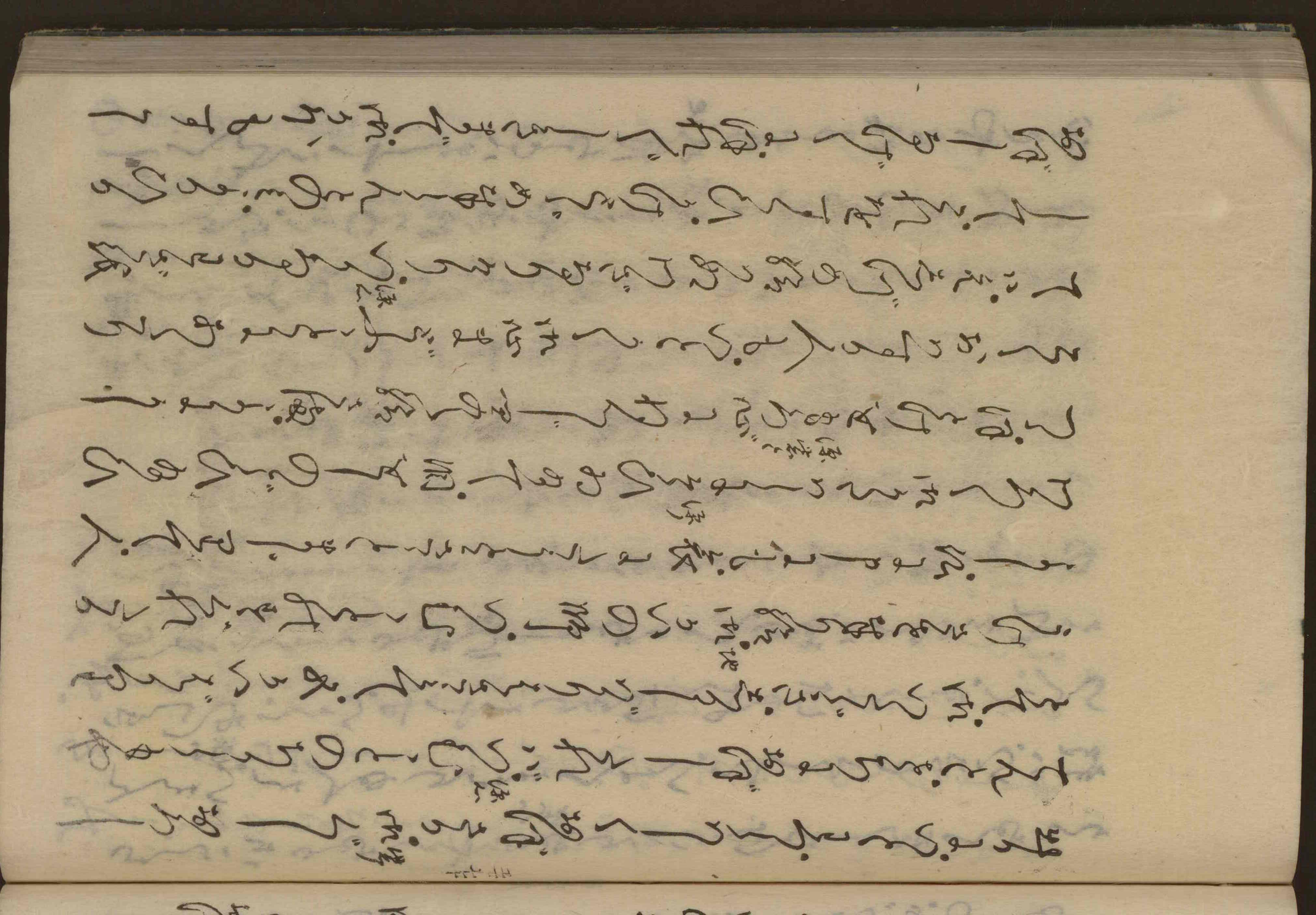


さくしまといふまゐらせもおかいかうへのいとぐ
世まなげんへて。かれかれしひとつくさぐ。かさいし
の人くすりたん。いまとそ二和家ハ。もとのれ覚く
おしかれ治いあいとおしげるとされたり川るれか
げくをなどうちさくめきなり。米の替さのふいと
くしぶるかりしをしひて。かふハれおとうと
ども。左大弁(ぐん)及宰相などおくのるまのとて。
えるまひなりくいひあへるをさくまもむきうち
つづれて。式まうきせまひさしかるべきと。うち
ずじひとりごちて。かれ(二条ノ)院へこれまいり給ふあしか
なしぬことなれば。ゆくしくやとてしくじおほかるの

れとしかしひは来りぬへるまゝ。かく人のあきさもしげば。
まことしありけりとこちさはぎぬへり。或（紫ノ文）ゆゑ
けりあて。いといたく。おぼしほれたる夜にてぞ
いり給。人ごの中をうそこもえ。しらへ夜もぞ。
大（タ）ぬの君。泪をのごひて立出ぬへるに。いりなく（柏詞）。ゆく
しきさ夜に人のやつれば。しらしげなきことにて
なん。こゝひさしきれなやこ代（うけ）取りなげきて来り
つゝなどの給。いと（夕詞）をもくありて。月日へぬへるを。此
暁（あかつき）かりこしいり給へりつゝを。もれくけのしたるに
なんをけり。やうしくいきいで給やうに罪なし給て。
今なんこれ人心しづしめれば。まゝいとこれもしけ



えとあるまじくけもひもづしくもふも心（地）のうちぞ
もしぞくあるりる所（源ん）くいきいでもてのうちもも
おそろしくそして又こいうじきほうぜとつくし
てふもへとこゐもを給（仇息ノ事）うつしべまてごまむくつけ
うりし人のれけもひのまして世ゆりおやしき
地のさ所まおりまへんとおぼしやるまいと心う
れば中（秋好）父とあつひ罪し給さへぞこのありハもの
うくいひもてゆけば女の身ハこれおもじけこふか
きもとひぞうしとおべて世中いといしくれ又
人もきかぎりしれおれむけ物語ますそしかうり
出ぬへりしことをいひ出うりしまゝ所ことゝおぼし



おもしやなる經まうりぬ月ちかどハあしてられぐし
うしぬ衣の氣色ニ。えさしやうぎ經る子ども。おりし
よりハすこしよろしき方ちり。されどもとをうらず
ちやとりうり經。をもふけのつゞすくよべきりぶ。日
ぷとく法華經一部づゝ。くやうぜさせ給。ちるまられと
さうらきりざまをせ給。ねまうしぐこ近くそ。かうん
のこゝろ經。こゑうとときゝうらりて、うきよ給。おく
されそめてハ。おりくるしげなるこゝろぶも給
いへども。さしよせをみてけそうもてず。いとゞおりき
給ハ。いさもとして。いよくよりめへだし。いちん
うるちくそうしちげさうり。ゆきさやうしなる流こうち

まもかろ(源ノ)はかしさ後心ぐるしく三まりまて。よれ
中まなくなりなんもづが身はさしまはおしさ
しとのろまじかれどうくおぼしまどふめりを。
むなしくこなされまんがいとさひぐ海なすらべ
かれば。さひおこして。はゆなどいさくかまいりけ
まや。六月まなりてぞ。ときぐはくしもたけ給
けりめづ(源ム)しくこそまつり給まもれいとゆゑし
くて。六葉院まは。おくさ海まもそひたり給えず。
姫(女三ム)家はあやしかりしこと後。笑しなげきしより。
やがて例のさ海(懐姫之)まもおいをずなやましくしぬべど。
おどろくしくはあしずこちぬる月よりもの

きこしめきで。いくあをとこそこなられぬふ。かれ
人(拍ム)ハ口りなくしひあまりときくハ。夏のやうに
こそまつりなれど。宮(女三ム)ハつきをず。ぎりなきことに
そしこり。院(源)をいとじくおちきこしぬへる此心に。
有(拍ノ)様も人の程もひとしくぐるやハあるいくよし
めきな夜めきこれバ。御ひこの人めにこそなべて
のひとまはまきりてめでらるれ。ちさなくよりさら
ぐひなき此(源)有き夜に。なしひぬへる此心りハ。
めざましくのこゝぬふ御ぐよ。北(女三ノ)なやこゝ口こり
給ハあまれなる此すくをまそありけり。此めれと
こちこそまつりとぐめて。院(源)のとこしを給ことも。

いとう海さりまあるをさずつやさうしこうてまつる。
うくるやこのかとこえしめてぞわたり給。女君ハ
おつくむつしとて心ぐすまして。ずうさりや
うきさそあしのへりかしるかしうちやりのへりし
うべどさきもりもるのど。うめもりうちかくこともよ
よふすかもあくてつしきのしまゆかくらして。
お侍こあとろへのへきしもじろハさとましわく
うれくしげよすさきるやうまこゆかれそぶつさ
あじよまあくらうさげあり。もめけるむしの
うしあじのやうまぐいとくぶよりしげよおりす。
さう代すこ給まそずきしあれそうつる院のうち。

ぬこしへなくさげげよさへこゝ四きのふりふりくも
のあげし給ひまして心ことよつゝろかれこるやまと
こげきんざいのうちつけよこちよげなりなこ
いぐし給ても衣よいまでへよけり氏なほ
池いとすぐしげまて、たちすれそれのささけこ
れりよ。柴ハいとあをやうまて。家きらくとあの
やうるこしけるを。かれこゝまへをれひとりも
きぐしげなりなとのこまふよあさあがりて。こ
いぐしこまへるもいとめづしかれぞかくて
こそまつりこそ。夏のこちすれいしくけり身
さへ恨とあげゆりぬりくのありしをやと。間を

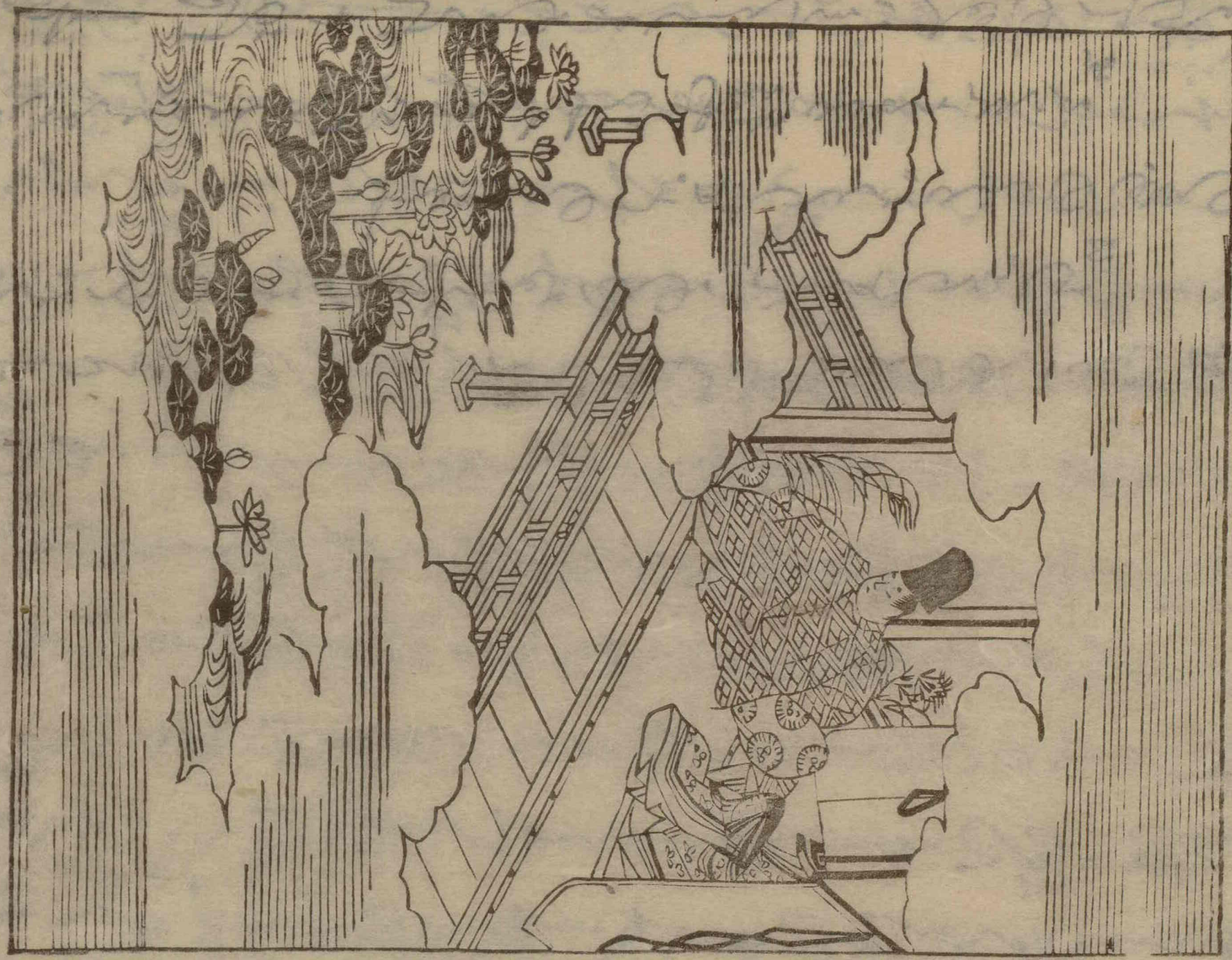
うけてのゐへバ・[illegible]うしもあれと相ばして

[illegible]こえとまる程やいふべきに夜さまはちを

の家のうらぐりをどのくまふ

[illegible]ちざりをんこの世なしでもはちをぞく

玉ゐつゆのうらへぐれ



いでぬふ女三ぐ海は。もれうれど。今上うちまも院条にもこさ
うしめさん所あり。女三ノなやゝ給とさそても程へぬりをめ
まちりきまこうろをまどそしつゝほどゝそて
まつりともおきくなりけるり。かゝるゝもまま
さへやえ。こしこもしんとおぼしたちて。ま
こりぬまひぬ。女三ハ宮ハれこうろのをまゝ。こゝえたて
まつしんもそづしうけゝましくおぼすなり。
ほノもれなどきそし給。女三ノれいしへもきこしこまこゝねだ。
ほハひごろのけもりを。さすがまさりげなくてつしと
おぼしけると。心ぐるしかれば。さくこしら人罪ゝ給。
おとなびたる人めして。れこうちのさ海などさひ

給・例のさ庵なしぬれこうちよなんと・ひづらひ給れ
女三ノ女ゝう詞　ムハいまんノ事
あ猶をきこゆ・あやしく・ほどへて・めづらしき所す
添詞
まもとぢりのあて・れ心のうちよ・こしごろ
へぬる人ごごまも・さうことなき後・不定なる
ふ　ぢやう
れことまもやとおぼさげ・ことりともりくも
の給あへしらひ庵ちで・こごうちなやこぬへる
さ庵のいとらうこげなるをあれとこそまつり
給・うしうしておぼしうちて・ひさりこまひし
りば・ふともえ久りさ庵ハで・二三日おいすりほど・
紫ノ事
いりまくとうしろめくあげさられだ・れかこ
せのこりきけらし給・地川のまゝりつも家れ

ことの紫まうあらんいぞや屋すらぬ世をもこう
うるとゞ門ぐ女三さこのあれあやまちをしらぬ人はいふ
侍従ぞかうまつけてもむもうちさいざけるかれ
人拍ぐもかく門うちまへりときくまゐけけなく
こころあやまちしていうじきことじも紙りき
つゞけてとうをまへり。魚いまあらさ風まつらり
（源ノ門方へ之）
こまへる時どまへまありかれが悪ひて（小侍従文を）こうきこそ
まつるむつしきもれこすることいとこころう
（女三詞）
かれこうちのいとゞあしきるとてかしまへれど
（小侍従詞）
ち紙こゞこのもしがきれいとあしげまゐぞや
とてひろげこれが人のまいるまいとうしとて

ミ生ナ ひきこもそてさりぬ。女三ム いとゞむもつぶるしたり。
院 源 いりゐへぞ。女三 えよくもかくし給ひぞ。れ志とねの
志たるまさしまさゝ給ひ。源ム よきりひりる二条院へ
ひたりに南りんとて。れいと南こそこそ給。詞 こしたりも
かしうはあらずこゝ給を。紫ノ まさいとこゞよりしげ
なりしを。こすてこゝろやうはおもちなくも。い南
さしまいとおしくてなんひがくしくこそて
なすひとありとも。ゆめこころをきこまふなか。い南こ
なをし給てんとかこゝひ給れ。女三ノ いはな南いまけなさ
こまふれごとなども。うちとけこそしこまふを。
いてこ志ありて。さやうりもこありをこそまつり

と海とぬをさぐられうしめしきれ気色とこころえ
ぬふひられぬすしまうちゆしまて此抱がうりなど
男ら給程よられよりすうしぬ月とれごもりいり
まけるよ日ぐしの岳やうよなくよかどろさまて
さしが風こどくしりぬ程よとて此ぞなどなり
なをす月（女三詞）結て此いふなる抱をとぶとりやうなる
さ海しての給ハ（添心）ぐうぐうぎりしまもとやぬ月
すと心ぐうしげよ笑して、こちとまるこまふ
（女三）ゆふ家よ袖ぬしをとや日ぐしのなくを
きくくぬさてゆらんがこなりなるれこころよ
まるをて、いひいでぬへるもらうさければ（添）ついぬて。

詞 あかくしやとうちなげきぬふ

深 まつ山ともいうぐきくんくるぐまこころ

さはぐ寸目ぐしのくゑ。ちぐぬぼしやすしひて。

ち後なさけなくんもこころぐるしかれば。とまり

ぬぬ。しづ心なくさすがよなぐめれぬて。此ぐ抽

ぐりまいりなどして。おほとのごもりぬ。まぐあさ

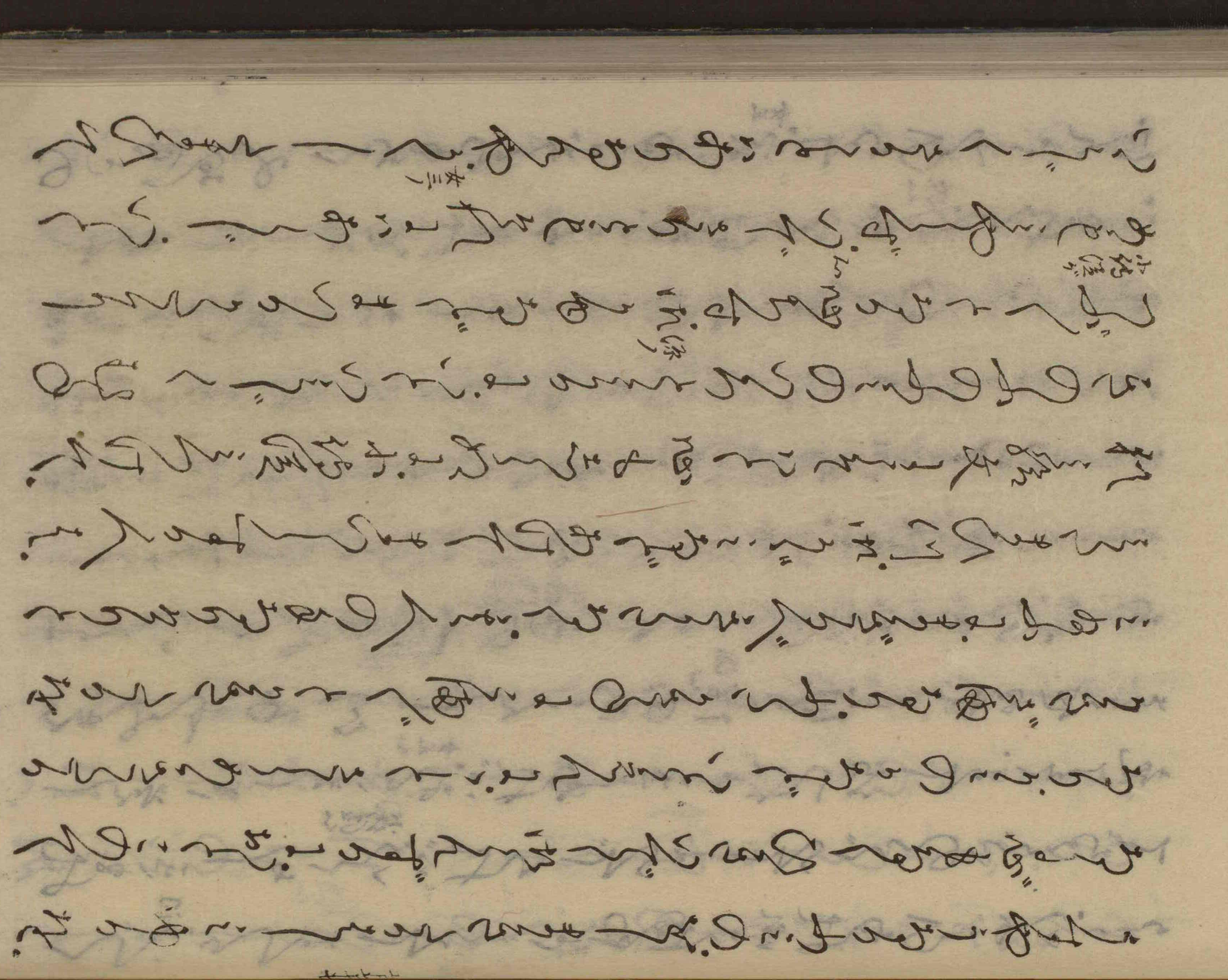
すぐこの程まつくり給んとて。ぐくおさ給。詞 よべの

扇ちうん りきぼりをおとして。これは風ぬるくこそあり

かれとそ。此あふぎどきぬて。きのふこそわし給

へりし。おましのあたりとうちとまりてこぬふよ。此

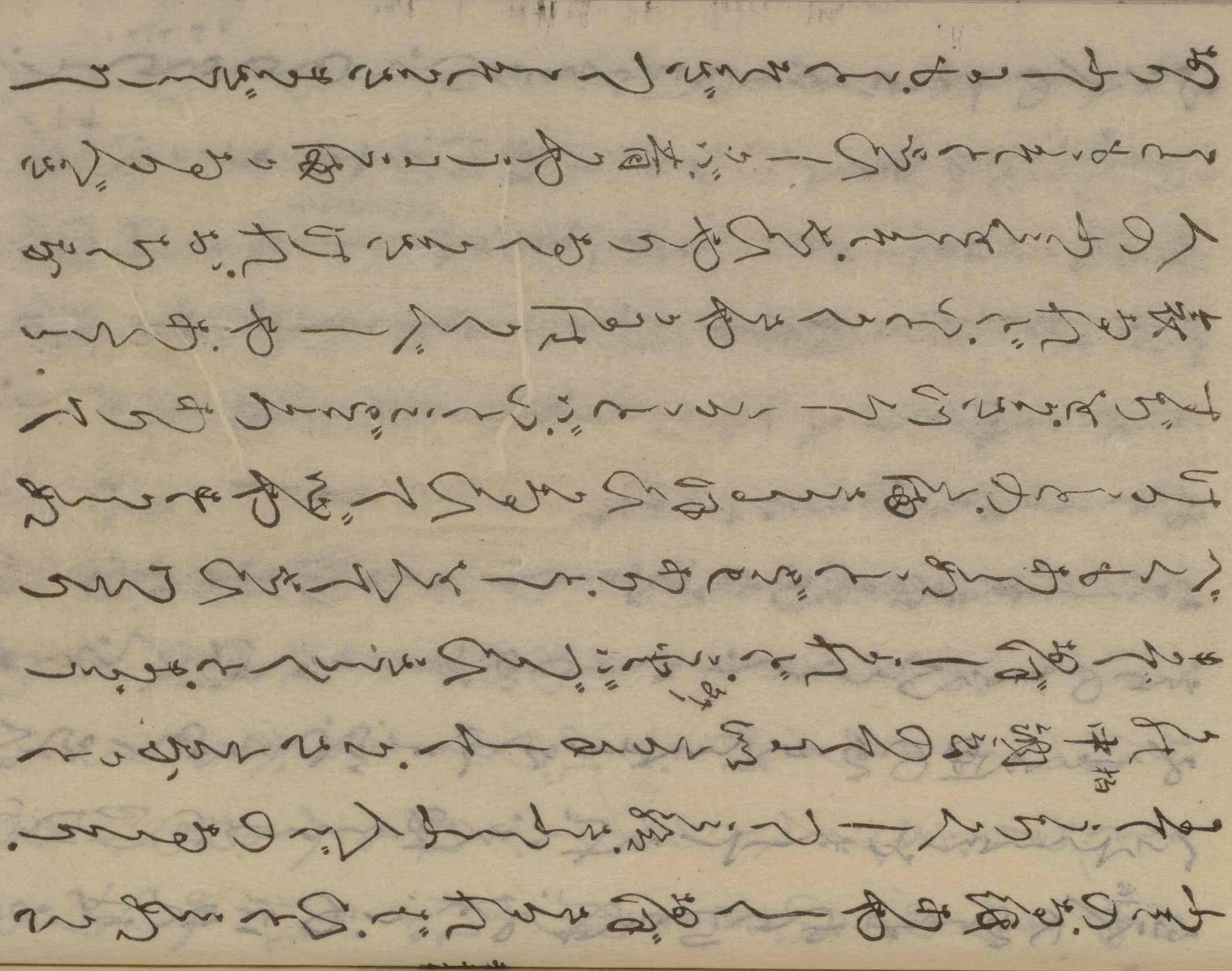
しこものすくしまよひこうつまよりおさこごりの



げんとこひろ寸。宴(女三)ハなるよごろもなく。又おほとの
ごもれり。おないたけなかうもれをちしぬて。
まれならぬ人もうけたまし(かばとおぼすも心)
をうりしてされがよいとむげよろしくさ
ところなきは宿徳をうしろめたしとはこゝな
りしとおぼすいでなひぬれがひとぐすれ
おぼれぬるよ。侍従よりて。きのふのもれをいうな
ときせぬてしけき院(源)のあたんじ川家ふみ岩
色しそよそ侍つれとさしぬれが。おきましと覚し
ておきぎのうぐいでよいでくれが。いとおし(小侍従心)きもれ
りしいふかひなれはさ面やとしてまろうぐ(詞)

まうけをうを給てしひとぐのまいりしまことあり
がまちくさあしたじとさばうのいふ紙
ざまうろのをまくさり給しとゆ(添)せ給し程に
すこし御ぐへ給ましをうくさせたまひ川ふんと
なん。たふぬへしときゝぬれば。いさ(女三詞)とよこし用
どまいり給しうば。あとゝもえなきあへで。さし
もさこしをまされまうりとの給ま。いと(小侍従ん)きこえん
うゝなしよりてこれがいげくのけあしん。あな(詞)
いうじ。れ(拍)君もいといたくをぢまじうてそしさ
まてもまりさうせ給ことなりがとうしこまり罪
ぬひしまれを。御ぐ。ざまへぜうることのいで

まうでらるゝよすべていとけなきこれおりさ面こて。
人まゐらしさを給ひければしごろさゞらりけされ
ざうくうしこいひつらり給しらどらくまでぶふ　柏ノ
ぬへしぬとりいゞ女がれしあまゐ。いとおしく侍
べきことくぞらりまあく男色。ころやすくつらく　地
おりすれば。あれまゝてしろうあめり。いへもし面　女三
きそぶゞあまるのこぞあま給。いとあやましげまそ。
家ぞらりの絹もさゝしめされぞ。うくあやまゝく　女三ノ女房ガノム詞
をさせぬふと。さゞさゝそまうおそ。う面もおこ　添ノ
ふりまそ給よそるれ。あいりひろつらねそいれ　紫ノ
ゝまへるこそゞうつく物ゆひゆふ。おもどでしもこの　添ム



しが人のかきらういはかうきつぎなりかりと。
かれひ拍との心をきへこおとし給ひ。さてもこの人女三
をばいかにもてなし宇ゆべきめづし（ムハいまんノ事）ここき海のれ
心ちもがらことのまぎれまてなりかりいであか
ころうやかくんづてなしぎうさことをしかく。
ありしながらこゝそまつくんことつがれこころ
ながしまえおもひなをすまじくおぼゆりをなほ
ざりのすきひとくもじめより心をとゞめぬんぐる。
又ことぎ海の心をくらんとしふれ心づきなくしひ
へざそしらをましてこれはさ海くとるおほけか
きへ拍の心よもありけるれ。みかどのれ先をも。

あやまつ魚ぐひ昔もありかれどそれは又いふる
ことなり実づくへといひてそれも人もおなじ考
なれつゝうまつる程にそれづゝさるべきかゝれ
つけては心をうたしそめ地のまざれ物ゆゑ
べきひぎなり如何かふいとゝいへどとあるすぢ。く
なかゝにつけてかゝる人もありうゝろだせ
かゝるしずをもかゝぬうちまじまておもまぎなる
こともあれどおほろけのさぐなるあやまち罪
ぬほどいさてもまじらふやうもあんれしふと
しもあらはなるぬまざれありぬべしかくだり
又なきさ後にもてなし罪てこうちくのこゝろ

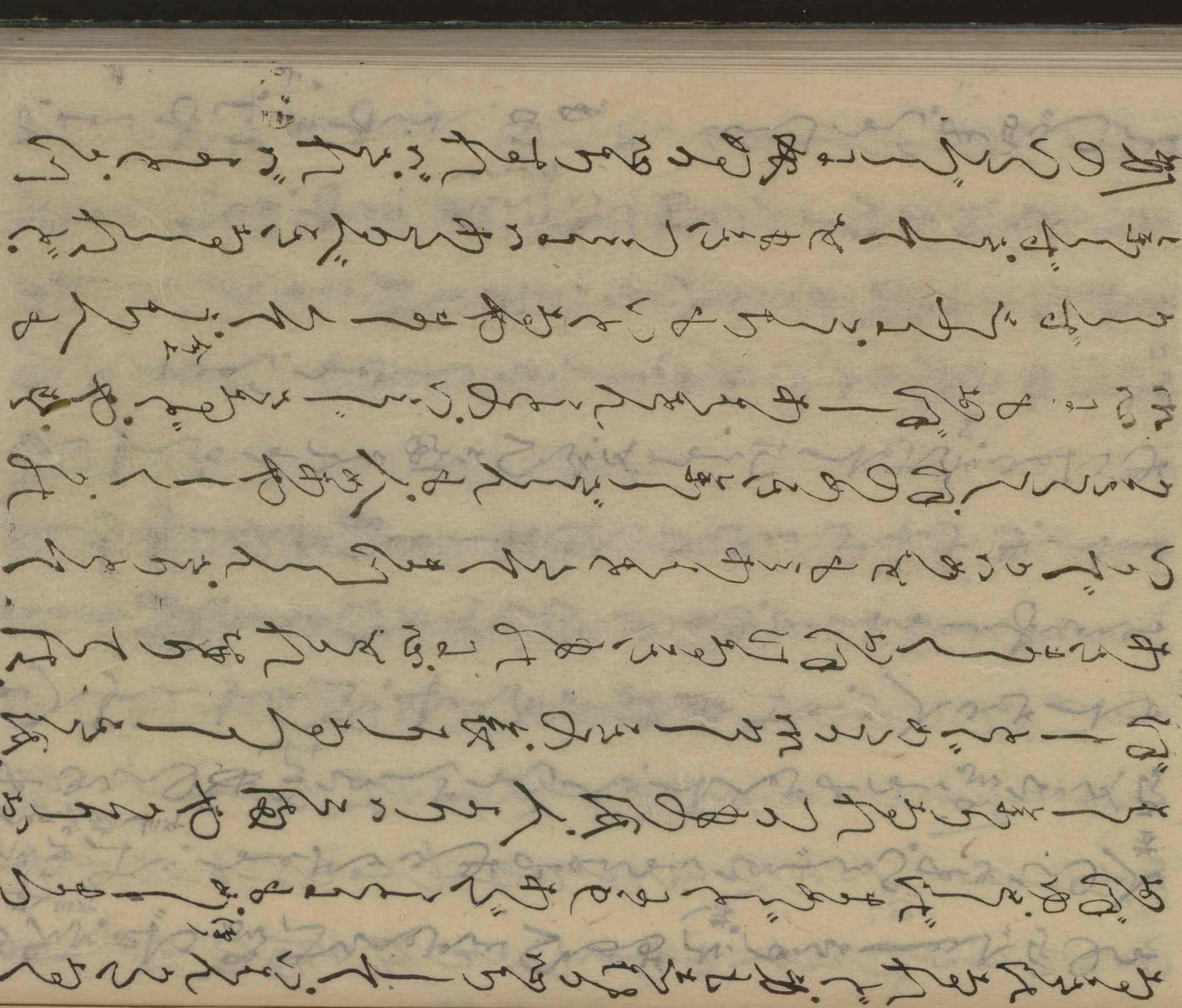
ざしひくるこゝろもいろくしくうしけるさ
もれまゐひもぐくまん人をきそ。うらくしくも
文まゐぐひあらじと。つまもじきをれ給。たとへバのるゝ こゝろどさ
きゝもれどゝぐするをまゐほやけぎ海のうろぐ人
ぐりまて。家づくへのほども地すき海じきまゐ心
ざしあるきつるくしのねぎごとまるびきをのが
ぐ衣をつくしゝまゐ。すぐしがるきゐりのいへをも
いひそめぐるゐんまゐ心ゝよひそむんるまゐひも。
おるじそしゝぬすぐるゐれどよろうこありや。まが
力ゐがしもさばかりの人(柏)まゐ心(女三ノ)けゐゐべくも常く
ぬをとゝいと心づきるけれど。又りしきまいぐみすべき

ことにもあらずなど。おぼしこぐるまつけて。和説
のうへもかくれこころまはしろしめしてや。しらず
がほをいひつさせ給へん。おもへば世のことこそは
いとおそろしくまうまじきあやまちぬれと。ちかさ
しあしをおぼすまぞ。しひの山語はえもどくまじこさ
恐まじまけり。つれなしいひりぬへど。もれおぼし
こころくさ夜の志ろかれば。女ぞ志きしのろかつと
おしこる。つたり女三へ。へやりなしず心ぐるしう。ぜひ
やまさそし給にやと笑して心ちいとろしくなり
まて侍を。れ女三の女のなやましげにおりすらんにとく
つたり給ましこそ。いとおしかれとこそこゝぬへぞ。

流詞 さうし。例ならずこしこまひしかど。ことなまり心
ちまもおもたまひぞ。なれづから心のどかなもひて
なん。今上 うちよりはこびくれつかひあるなり。かふも
れふこありけとか。坡院 朱 のいとやんごとなくきこえ
つけぬへれば。うへもかくおぼしさらぬべし。すこし
をろかなるどもあらんもこゝろなるおぼさん
ことのいとおしきぞやとて。うめきぬへば。紫詞 今上 うちの
こゝろしめさんよりも。女三ノ ぞうしめしとおきこえて
こ海りんこそは心ぐるしかしかれ。まれもおぼし
とがめずとも。よかしぬ。こ海りきこしなす人ぐ。必
あらんとさへば。いとくるしくなりなどのこゝろまへば。

げるあるぞちよさふ人のこゝあまは、まづしりしさ
よすがなれど、よろげるまゝどりかうさこと、とや
うくやと、御目よそ人のさもんこゝろさへ、ぞひめぐら
さうしを、是はこゝろ、こゝろのれ心やなさ給もんと
おうりをおぼうしんはあさ紀こゝちぞしけると、はく
ゑこそのこまひまぎらり、けうり給りんことは、もう
ともるうへりてを、心のどうるあしんとのこゝろこそ
給をこゝ（濫詞）ほ志ぐし心やすくて給ん、まづ見ふり
あて、人のれ心もなぐさこゝなん程ほをとゝ、笑かりし
あふ御どる、日げへぬ、ひめ（女三ム）家はかく（源ノ）けうり給もぬ
日ごろのかりも、人のれつゝきまのこゝ、ばすをいまは

まがれをこそうちまぎてかくなりぬるとおぼすな。
院(年)のきこしめしつけているおぼしめさんと世中
つまりしくなんかれ人(拍)もいこじげりのこいひ
けれども小侍従もまづらりしくおもひなげきて。
うらこしくなんありしとつげてげれば。いと(拍)あさ
ましくいけのほどまさることいできけん。かくな
ことはありふれがなのづらし気色にてもまり出る
やうもやとせひしごまいとぐつまりしく。死ま
めつきさるやうは若てこしをおしてさだらりふぶ
べくもあらざりしことぞをこゝめてがん。たづしく
かくじけなくかくはしいたきは。初夕すぐこうも



もけが心もいとつくおぼゆいでやしげやうに心
まくきけもひこしこ海ぬけうりぞや（女三ノ詞）まげかうれ
こ寸のもぎ海もさるべきことうはうるぐしと
大（夕）ねのさひぬへる気色こしさしなどいまぞさひ
ありすり（地）しねてひことをさひさ海さんとさふる
まておながちになんつけましまほしきにやあらん
よさやうとてもおまりひこをもむきに おほとうに
あてなる人はよれ有様もしらず かけさふらふ人に
心をさ給ことともなくてうくいとおしき（女三ノ）れ男のこめも
人（柏）のこめもいうじきことにもあるうしまと（女三ノ懐姫ノ詞）うれ（女三ノ）れこ
との心ぐるしさも（柏ノ）えおもひもなくれ給ひず（女三ノ新）宮は

いとらうたげまておやこつたり給さ海の社いと
心ぐるしくうくこひ（涙ム）もちあちぬふまつけてハあや
まくすうさままぎれぬこひしされ、ふるしくおぼ
さるれバけうりぬてこまりぬふまつけてもむる
いとくいとおしくおぼさるれいのりなどさ海ぐま
をさせ給おほうこのことハありしまかりしず中こ
いとりしくやんごとなくもてなしまこゆるさうまの低
まし給ゆ地くうちうこひまこそ給ゆまあいと
こまなく社心へぐこまてかこりいこかれば人め
ぢりをかやすくもてなして、常しのみこぐるくま
この社心のうちしもぞくるしかりけり、さること

こゝろともあらりしさてて給もぬまこげ（女三ん）ひとゝ
ひりなくおぼしこゝろさ面も心おさなるし（ほん）いとゝくおハ
すゝけぞうしよゝやうといひおぼし。おまり心
もしなくとくれこゝろ。これもしげなきつぎなりと
おぼする。世中なべてうしろめたく。女（内石ぬれ）のあまり
やりこゝろをびれのへるこそ。やうまこゝろかけ
ゑこえん人ハまして心こゞれなんし。女もうう
もろけ所なくなよびこゝろを。人もあなづらりしき
まやさゝまじこさまふとめとまり心づよりしぬあや
まちハ志いづゝなりとおぼして。右のおとゞ（ひげ黒）の
小方（む）のどりこてこゝろうしろこもなく。おさなくより

もれもうきよよ。さすふ事やうまてなひいで給
れど。うどくしらうありて。これも如何る
よはおやめさしうど。よくき心のそゆましもあら
ざりしを。なぐしうまつれなくもてなしてすぐし。
このおとゞのさうむだんの女体に心あもきていり
さうりけんまも。けぎやうまもてもなれうさ面を。
人まもえしきられ。ことさしまゆされうる様に
しなして。ワが心とつこあるまはなさぎなりし
など。いまさへがいうまうどあることなりけりちぎり
ふうきなりなれば。なぐくなてこもうんことは。
とてもくてもおなじどおしまし地うる。心もて

ましゝとも世人もさひいでがすくしうなぐ
しきさひくちゝなまし。いといくもそなしてし
まぎなりと。おぼしいづ二条のかいしのかん志勝
とばなる紙ゝぞさひいで罪しなんどかくうしあめ
ゝきすぢのゝとうさもれは覚しきりてかれ此心
よそさもすうしかくさひなされなひかりつねは
勝尼ゝ如給へ
此ほいのゝとしなてぞりとこゝくなてはいと哀は
くちおしくれ心うごきそ。まづとふゝひこきつし給。
多詞
いまなんとぞ。にほりし給はざりけるのしき紙。
あさかゝずこそて給
源
何まの世をよそまとうめやすまれうしは

もしはれしもこれなしなくまさ海ぐなる
世のさぐめなき紙こゝろにおもひつめていまゝで
をられきてぬるゝちおしき紙笑しすてけとも
さりがたきれ思うのうちにはまがとそれと衣に
なんなど。おほく思しこまへりらく笑しこちにし
ことなれど。この紙さ海にげにうづひて。人には
しかあらりし給ひぬことなれど。心のうちあはれに
昔よりつゝきれちざりを。さすがにあさくしも
おぼしきれぬなどうさぐにおぼしまゝ。れ返
いまはうくしもうよふまじきれふこのとぢめと
おぼさば。衣にて。こゝろとぐめてうき給ずこつきなど

いとおりし。つ〇（多ノ行）なき世とは身ひとつにのこしたり給
ましをなくれぬとの給ちをこゝろになん。げり
（賦）あまぶ〇にいらゞもしひとくれけんありしの
海にいさりをし君。思ふうにはおま〇きゝこそても
いらゞちとあり。（地）うさ河低にびのことにて。しきこゝに
さしぬくるれいのことなれど。いたくすぐしたる
ふでづかひなをかりがたくおりしげなり。二条院に
おりしますほどにて。（笠）如君にも。いまはむげにこえ
ぬることにて。こゝをなり給。（添詞）いといたくこそもげし
められたれげに心づきなしや。さ雨ぐに心ぼそき
よれ中のる程をよくこすぐしつゝやうなるに。

あべてのよれことにてもちろく抱をいひかりし
ときぐにはよきて、表をもちり、ゆへをもすぐさず、
よそあるぐのむつびかちしのべき人は、秋(槿)院と
この志(勝)ととそいのうりありつるをかくこれそもさ
もてしぎ(撻)い院ちる、いうじうのとめて、まざれなく
をこちひにしこ給ふるなり、れこらの人の本様を
ずうり中にぶくちふさ後にさすがにちのかしさ
ことの、かの人のれちずらひにぐにをあらざりけり
れ、女ごをおふしそんことに、いとうるうるべき
ひざ女なり、すくをちどいふんもれはめにこえぬ
ひざにて、おやの心にまりをがくし、おひくん猶の

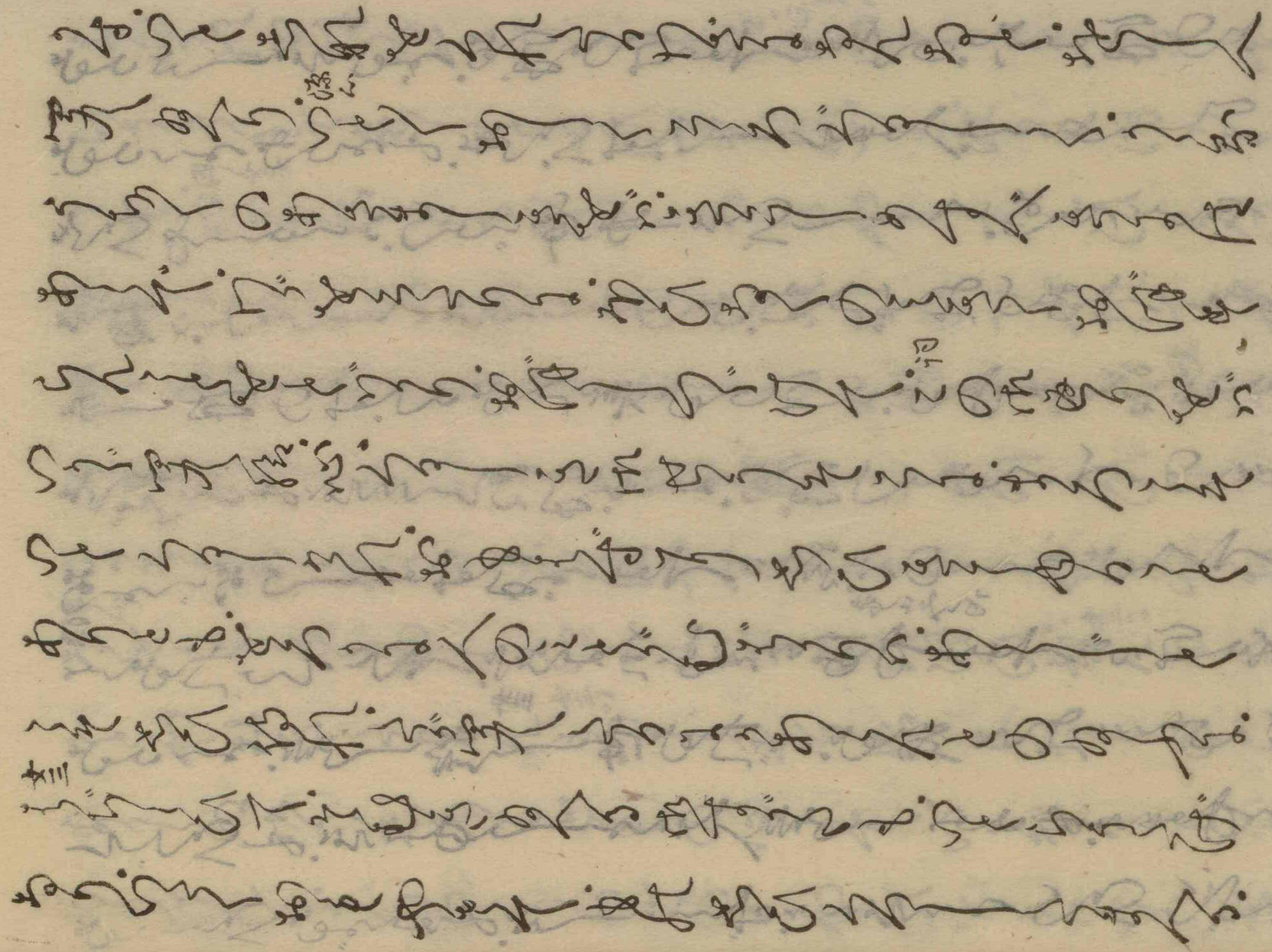
こゝろづよひもおもちいかくべからず。とかくこそ
わかきうちは心をこゝろまゝにし縦ありければ。
ともかくいひつゞりほどこすりさすぐしての
けぢや。さ南ぐまこゝましうばとちん。おもげうしき
おりくありし。女一文けやかを心してかつにて
なりあへ。昭名女紙女これもおもふこゝろをかくさり緒ほど
あすで。くいとまするしまするひとつのへがおる
ごとも心もとなきこゝろぞ抱しおん。こゝろち
あん。あそあくかぎり。ひとへてんつかまじくて。世紙
あくまでとあんど
のどかにすゞし給ちんまうしろめたきまじき
こゝろざをつけまはしこゝろざあるけり。良わりて。

とさ御うさぎ御のうしろさまうらうさ人いそのはその
づしそれはもうすけしれぬるをあざきえしまへぞ
紫上
むらざきさ御のゆうしろうあすずともぞうらは
あづまんうえぞうかぶこのましぬやうわしじとせう紙
いうおんとそお紙もれをころげそげまてぞうく
ゆはまあさそぞさこあすひをもとぐこゆりあまし給
源氏
人ぐぞうしやましくせひ思しのへりうんの君ま
歌
さ御うりのへんさうぞくあどぞまぞあちちれぬ
ゆどいさつかべき紙げさあざはいろまぬかし袖ぞ
花ちる
それをさせのへびとくぞりは六条のひんがしの
花まおしつけんうすりしきゆうすぐぶちては

うたてこゝろめもけうとうるべしさすがにそのこゝろ
ぢへこゝをてをなど男し給あをまびのひとくだりを
紫うはをさせ給つゝもどころの人めして悪びて
あまのれぐどものうるべきも志めのこゝ面ろ付れ
志とひうはむしろ屏風あすなどのこともいと悪びて
ひさとがましくいそがを給ける。地うくてやまれ
朱ミうどのれ笑ものびて秋とありしを八月も
夕大将のれ葵ノきまてがくそのことをこゝろひこゝ面
ひんにぬるべしれ月は院朱のおほ聖帝どさき紀乃
うれ給ましつきなれば十月まと源ノ若しまうろう
と娘女三家いくしなやこゝのへば又のびぬ。柏悲つ雪のれあづ

りの宮(蔵)なん。その月(十月之)は来り給けり。おほきおとゞ
ゐたちて。いかしくて海かな地のきよらぎしきを
けらしゐへりかん。かん(拍)の君も。そのつゐでまぞ思ひ
とこしていぞ給けるおをなやましくれいならず。
やまひづきてのこすぐし給。宮(女三)もうちまへて地を
つゝましく。いとおしとのこおぼしなげくけまや
あくんづきおほくかきなり給まくは。いとくるし
げにおりしませば。院(源山)は心うしとさひこさえて給うこ
こそあれ。いとらうたげにあえかなる さ海して。ぐく
なやミわたりゐ給。いかにおいきんとなげかしくて。
さ海ぐにおぼしなげく。れいのりなど。ことしは

まぎれおほくてすぐし給。(三朱ム)れ山まもさきしめして。
らうらうぞ忘しとせひ罪し給。つまげかくほかく
まて。(源ノ女三)ひたり給ともおさくおさやうり。ひとれ
そうしかれば。いかあるようとれむまつぶれて世
中もいまさらまうしめしくおぼして。(紫)らいの
うるのひづらひけるころは。お後そのあれかひまと
きうしめしてぐま。お後やすかしぎりしを。そのうち
(源ノ女)おとりがうらし拘し給しんは。その比ほひ。(女三ノ)ぬんおさ
ことや出きたりかん。(女三ノ)こづらしたり給ことおしるぞ。
よりしぬ。ゆうしろうとどもの心まで。いかあることか
ありけんまうちひたりおとのこやびをかいすべき



いとゞあてまなかし。いとおさなきれこころぞへをこ
なきなて。いくはうしろめたがりきこし給なり
かりと。さひあまをなれば。いまより後もよろづに
なんがうまでもいかで罪しじとせんど。うへの
心にそむくときうしめすらんこと。やまかんず
いぶきさ紙。こゝまぐに罪しきこそでやはてなん
いうすくなくこゝ人のきこしなすこりのこ。
よるべかめる れ心まはこゝどろかまあさ紀とれこ
なぼし。文いまはこゝなくさぐすぎまころ有様も
あなづらしくめなれてのこみなし給こんも。
うたぐまこちおしくもおぼゆる紙

朱
院のおもしろさん相かち所ころおもしろけれ
おぼしさそてるやうありけんぞすずしとも
おもじくらずへきてかくおかうめ給そ
いつへよりはつゝきちまもさりうすか
べき女ぐるまぶまにかれさひをられつゝかとめうさき
こと おはうち給ふもつしの心まはおすまもうりさひ
ますかべきまれおもしるどぶ。参つまつとすて給けんよみ。
うちこまときすへる心ぢんのおもれまふれし
うりしどひきてざおしそひさゆるやうりて。
おあづさ御まえすそなんしられ。おへあくおぼ
されんまつきてあんころぐうしと おかへしに

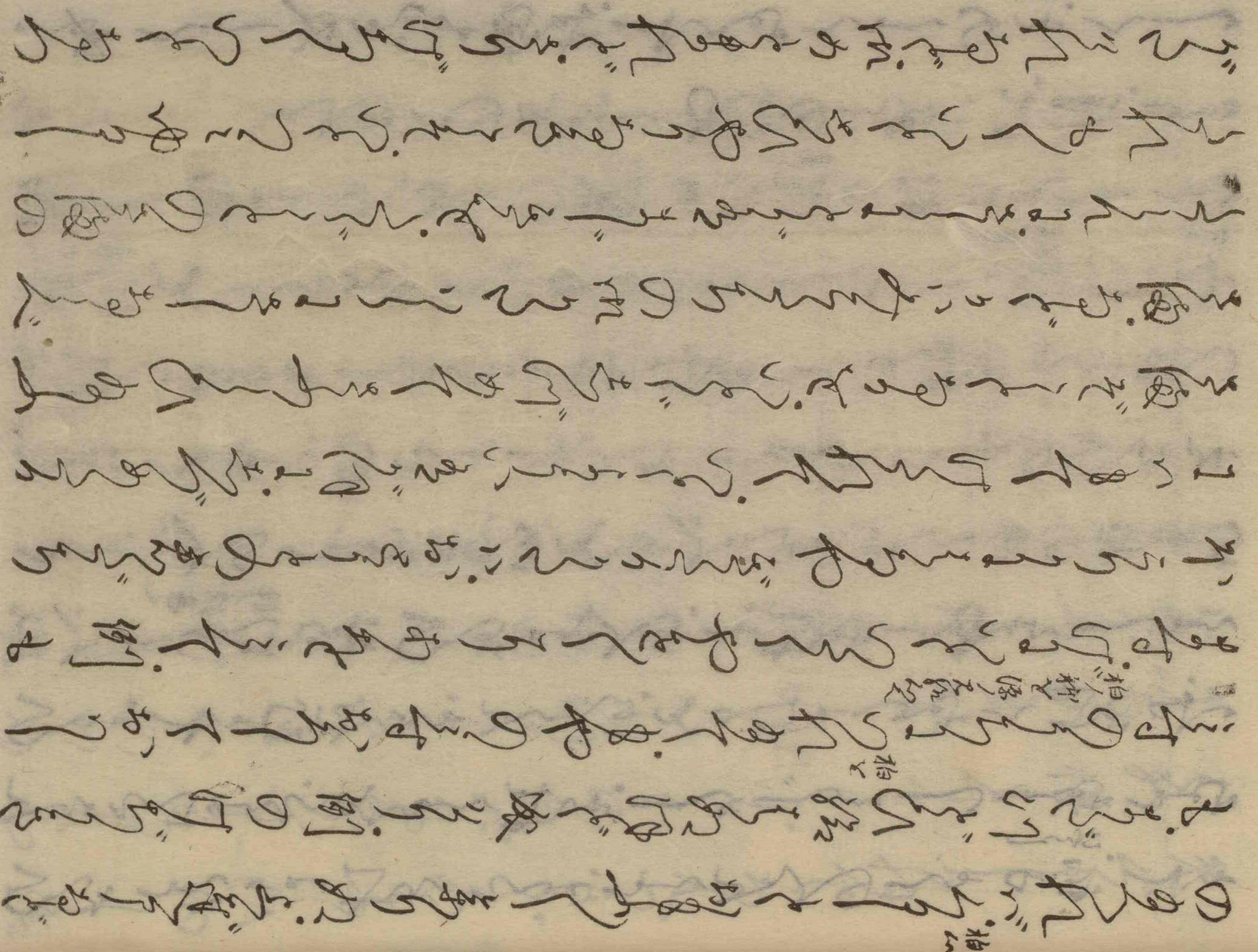
人ごもいまはかけとゞめらるゝほどしどりなりも
侍らず。女(昭君ノ)れもうくてゆくすゑもしりがたくれど。
こゝろちうずそひ給めれば。こゝげうしのよぶまのど
けくもとこゝをさ川べしそのかへれもくあんま
しるかひて。もろともに身をすてんも。おしうり
まじきよもひどもはなりこゝろをやうく涼(まだ)しく
しひ侍院(朱)のれよれ御り久しくもおいをじいとあづ
しくいとゞ成まさりなて。抽心ぼそげまのこゝ覺し
ゝるは。今更はおもはずなりれなもり思ひて。れ心
こゞり給ふ。この世もいとやすしことまもあらず。
のちのよのれこちのさ成、げなんもつゝいと

べくれどことばなどをしへてうをなり給（源氏 女三ノ系へ）
もんことにこれつきうてすぎぬ（神北月）二の宮（薩薬）のれいさ
ほひことまて来り給けるをふりめしきれ勤（懐妊ノ事）ざ夜
まてこちなるびがほなんもはぐりありこちち
しけり（和）（源）（相帯）もこづらの忌月なりせしのおもり
もるいともれさはがしまるいとゞこれ（女三ノ宮ハまんノ事）れすぐるも
ミゞるしくまちこ給もんをとしさひ侍れどさりとて
さのこのぶべきことにやはひしくもれぬぼし
こゞれずおきしうまもてなしまてこれいくおも
やをぬへるつゝろひぬへなどいとらうしとさす
がまこなり給（柏地）（楽）（雅）をばおまさ夜のことまもゆん

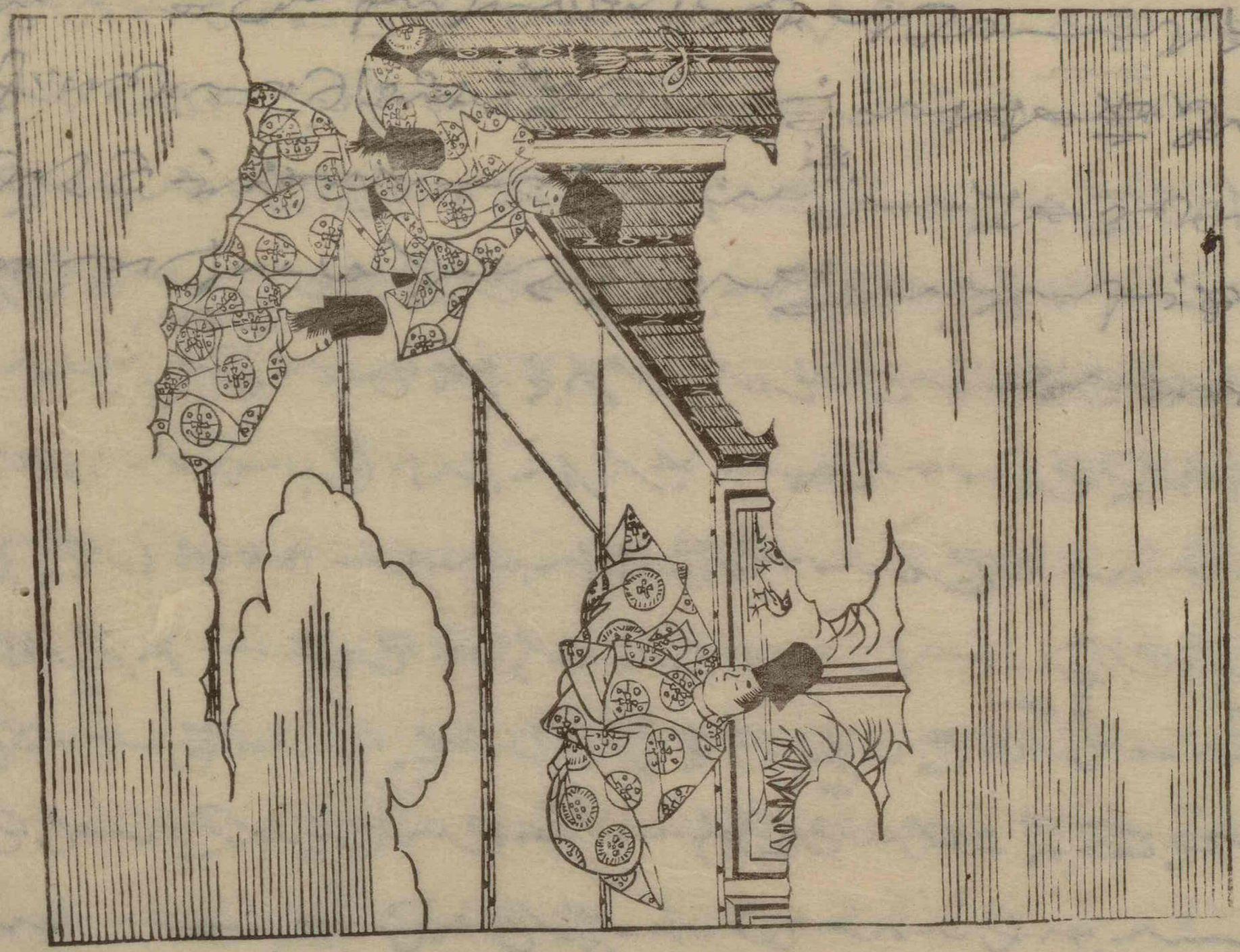
あんさありつしはあるすことさしまつり
給つの給ともあはしをこそさりれをうそこ
もあるし人（深心）あやしとせふんとおぼをどこんにつけ
てもいとゞかれぐしきうこまづしくこんにはは
まこ我心もこゞおしぎやとおぼしうへされ以。
やがてつきごろ来り給ぬをもとがめあるし。おほ
うこの人はお紙例ならぎなやこひりて。院（六条）にもる。
れあそびなどなさとしなれがとのこ。せひひりを。
大将（タん）のまぞあるやうあることなるべし。すき（柏ノ子）もれも
さこめて。けが気色（わこのるく）とりしことにはせれぞぬにや
ありけんとせひよれど。いとうくさぎうに（地）ありなさ

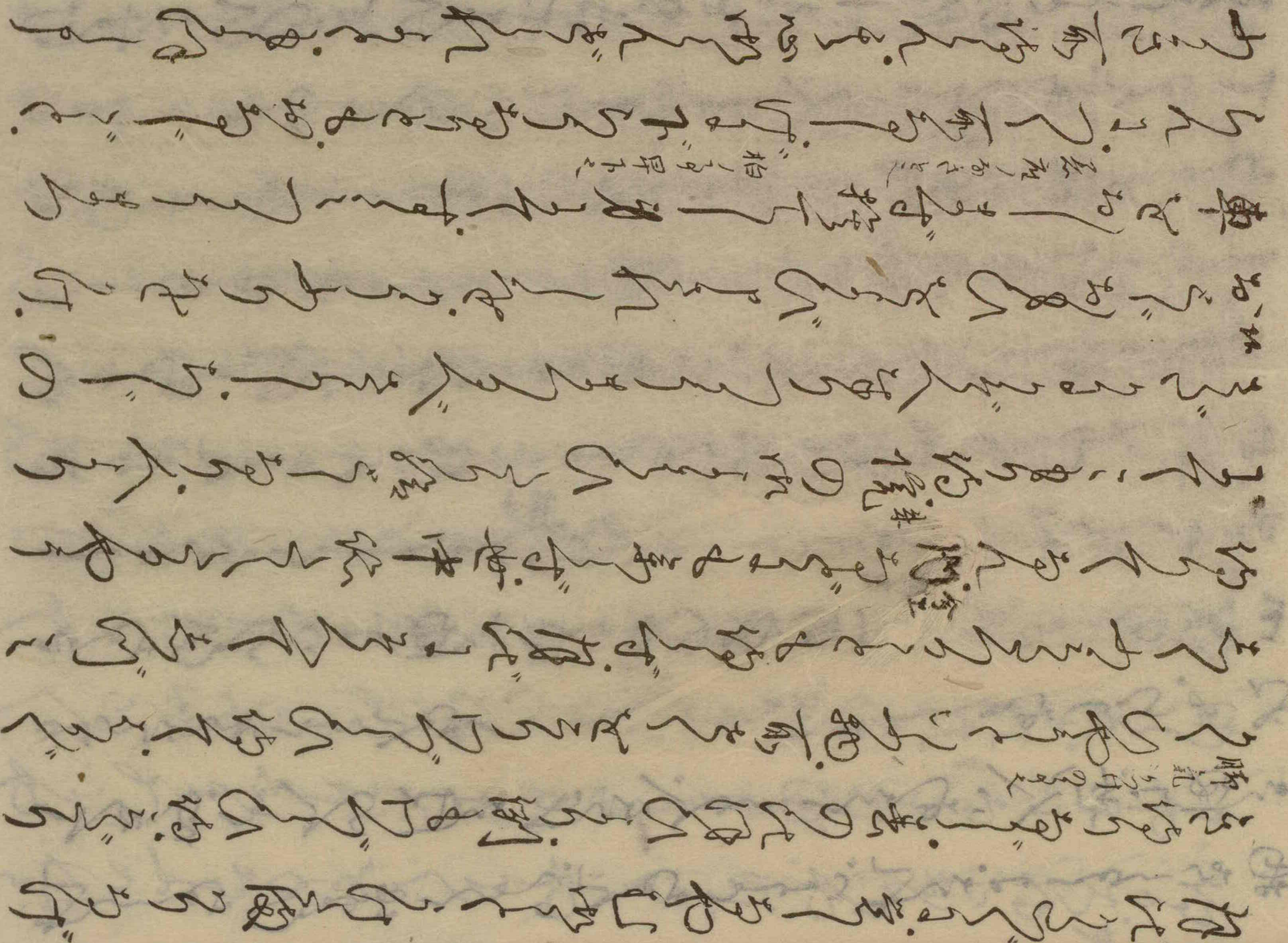
さ海ならんとはしひより給はざりけり。十二月に成
まかり。十よ日とさぶめて（来ノ窓ノ事）まひどもなしし。とれく
うちゆすりてのしたり。二条院のうへ（笠）はまぶけり
こ海はざりけりをこれしぶくによりてぞえしげめ
たてぐ（笠ノ）けりぬへる。如（笠ノ）此の君も罪におりします。
此たびのみこは文おとこにてなんおりしましけり。
すぎくいとおりしげまておりすりを明（深ん）蒼もて
あそびまり給はなん。すぐりよもひのしたりしこれ
しくおぼされけり。しぶくに右大臣（ひげ黒）殿の小のうへ（ゐ）も
けりぬへり。大（タ）将の君。うしこ（死ちり ノ事之）のまちにて。まづ
うちくにてうぐくのやうに明蒼あそびなし

給ゆれば。かれぬかるし。（源ノ）おまへのまれなこゝ給もぞ。（花吉）
（柏）歌の徳を。（源ん）かゝるとまれありもまじらけせざらんぞ。
いとたへなるさうぐしうべき。うちまもひと（源ノ政門ノ事と云し）
あやしとかゝるゝめべきふとされば。あまりなべき
よしありけるぞ。（柏ノ）ともとぶふうしよそまいらず。
さりいそともうとふるしげなりやまのまもあしざ
（源ん）あるせざふ心のわかりやと心ぐるしく物して。
とりわきてはせうそこ川り乎。ちゞおとゞもおぢ
（うかゝ）へさひゆきれけり。ひがくきさやうま。（源）院にも
そこうしめされど。おぼろくきさやまひまもあらず。
さすけて来りあへしそどのゝし給まうくるとて



しく。そのことなくて。對面もいと久しく奴は
なり。月ばいの女のびやうぶをのこあつひ。うろの
いとまなき程は。院の御賀のこゝろは抱し給
十三 みこの。ほうじつうまつりぬべくありしを。月さえ
つきとぐこほりことしげくて。かくこしもあつれば。
えさひのごとくもしあへで。かくのごとくなん。
いもねの御ちち家なべきを。御賀などいへば。こと
ことしきやうなれど。いへにあひ。ちかつ。ちよべの。
かずおほくなりにけるを。御しんぞさせむとて。まひ
などなりしてしめし。それことをぞにはつさん
とて。栢子とくのへんことまゐられにかかとせひ





さうしことの詩しかばともきやまひをあひこすけ
てなん。まりてまべし。いまはいらくいとうすか
なりさ海に朱ノ如ばしすまして。いかしきれよそひを。
まちうけまり給へんこと。ねがりしくも覚すまじく
こまり侍しをことだとばそがをのて。志げかなれ
抽紙のかきれねがひかなきを給へんなん。まさ
つてまべるべきとやのへば。源心いかしくきくし
れ。笑のこと紙。女二の家のれうこざ海にはいひなさ
ぬもらうありと如ばまて。源詞ぐらくなんことそぎこる
さ海に世ノ人はあきくこうべき紙。さはいへど。心えて
抽きこうにされがよとなんいとくなもひなれ

仰ノ大夕ねはおほやけぐるはやうくととなふめれど
かやうにあさけびくるるはもとよりしまねにや
あらんかれ院(朱)行ずも心をとゞめ給ひぬことはおさく
なさうちまもぐくのるのことは此ころとゞめて
いとかしこくしりとくのへぬへるをさこそおほし
すてさるやうなれしげりまさしめしすまさん
ことはいましもなん心づかひをしらべき皮大夕ねと
(柏ノ)もろすまこいれてまひのワりたべのようい心ぶん
よくをさへぬへ抱の師などいふ抱はこゝにワがこそ
こゝことこそあれいと口おしき抱なりなどいと
なつしくのこまひけるをうれし(柏ノ)き抱りしらる

きくつましくてことずくなるまて此れまへをうく
うちなんとせんに例のやうに海やうにもあらぞ
やうくすべり出ぬひんがしのおとゝにまて（花ちりノ方ヘ）大海の
つくろひいぐし給がくへまひ人のさうぞくのこと
など（柏ノ）又くをこなひくらん給おるべき限いうじくつ
くしゆへるにいとゞくらしき心志しひそふもげに（地）
此ゑいとふかきへまぞ把志給めりゆふもりく分
心この日なれど此りるべもれこ給ちんまこゝ前
なくいあらしとゞとて此れ紫の日もおうさ志し
つゞらこゝえび深のきこがきれをこさるべしゆふハ
あをいろにすゝしがきれがくへ三十人ゆふもきし

ぶきのをきたりたりしのかたのつりどのまゝ川ぐさ
たらうをかく所(そ)にて山の南のそむよりは前に
いづるほど仙遊(せんゆう)寺といふもはあそびてゆきのくぐ
いさゝちかに長のとおりちかく梅のかしきたる
かひありて御ゆきたりひさしはこ寸のうちに
おりしまきは或(ゆう)の家右(ひげ)のおとゞだりさふしひ
なてそれよりしもの上迄ハ寸のうまゝ川ぐとか
らぬ日のことにて此あるしおどけぢかさほどに
つうまつりなしたり右(ひげ)の大殿の四郎(らう)君大(タ)殿の
こゝ君(滞)等の家のそんけうの君ぐちふたりはまん
ざいらくまゝいとちいさき程にていとらうたげや

四人ながらいづれとなく、うつき家のこまで、かくうち
おかしげまうしづきいでうかぜひなしもやんごと
なし。又大将の此内侍のまけぢしの二良ぞうこ。
或人の文の兵湊のうこといひし。今は源中納言の
此子。皇麾。右のおほいとの三良君陵王。大将殿
の右良君落蹈。さてもいへいへ。喜楽
などいふまひどもをなんおなじ此ありしひの君道。
おとなうちなど拝けり。くれゆけば三寸あげさを
ゆて。もれしけうまさうよいとうつくしさ此むまごの
君ぐちのうちすうこまで。まひのさ夜もよく
うしぬてとつくして此師どもしなのくて乃

恨をとしへきてけるまゝかきかどくしさ後
くまへて、めづらかなまひ給を、いづれともいとらう
たしと思ぼして、ないかへるよ遅アたちハこれなんぞ
なとしぬふ、或(紫文)あるのこゝやもれむまぐをなぼして
れられのいろづくまで志ほこれ給、あるじの院(源)
(詞)をぐらよもひまそへてハ思ひなきそとぶめがらさ
まざなりかれ、来(柏)のうゝ心とぐめて、ゆく思まるく、
いと心もづしやさりともいま志がしなるんさ
さ後まゆかぬとし月よ、おいもえのがれぬ正ぎ
なれとて、うちゝや、卫給ま人(想)よりけまあぐちくれ
志て、まことま心ちもいとなやましかれがいうじさ

ことも。めもとゞまゝぬ心ちする人なしも。さし
ひきそそゝ思ひし所。くの絵。さゝふれのやう
なれど。いとゞ。むすつぶれて。さゝげのめぐりくるも。
りしらいくゝあげゆれば。気色ぢうりまてまゝざる
ゆすを。(海ノ)ゆくんじとゞめて。(柏ノ)もとをなぐらさびく
志ぬさまへば。(柏ノ)ちしくるくてもてけづらふさ海。
なべての人ゝすずあし。(柏ノ)こちうさえぐりて。さえ
ぐこそれば。まゞことも。まてめくまゝで絵ぬるまく
に。いとゝいくまゞひて。例のいとなどろく志さ思ひ
にもあらぬ紙。いかなれば。うるなん。つくましと
抱を云つるに。けれのぼりめるにや。いとさいふぢり。

おしすべき心よはさくは若しぬをいふかひなくも
ゐけるかれとぞうらさひ志しらしぞしのゑひの
まどひまもあらざりけり。やがていとゝ日づら
ひゐふおとゝはゝ和の身ぞしさしぎて。よそく
まていとなげつゝちしとて。夜(沙)にてし(柏を)なり給を。安
家(藤原)のなげしうるさ雨。又いとこころぐるしことなくて
もぐして月日はうろのどうまおひかぶれこゝて。
いとしまあらぬ此心ざしちれど。いまはとあれなりる
べきかどぞまやとしふ。衣ゐるしくをくれて
なげしちげんとのうらじけるきをいうじとゝ
もふ。舟(藤原)此息所もいとゝいうじく。頭(なげき)のひて。よれことく

して、おやをばちをさらまれにときなりて、かゝる
れなるひはとあるありもかゝるありもしらるれ給
ちゐこそ例のことなれかくひきけれて、こゝろ
なる抱し給までもすぐし給りんが心げしちる
へきこと紙にしげしこそかくて心こゝろまへとれ
かゝりしれ本性ぢうりをへぐそくこゝなり給こと 柏日
とりやかずなるぬ方にてどうびがこされなるしひ
まだ雨しぬまゆるされなりてさふしふしるしはハ
なぐ世に行てかひなきの程もすこし人とひと
しくなるけぢめをもやれしんぜらるとそしふ
給つれいとゝしくかくさへなりもべれどかゝさ

心ざしとぞ。はしんじ。たてられずやなり侍り
なんと。ちゝ給ふるよなんとまりぐさ心ちゝも。云
ゆきやうまじく。さひのへくるなどかくこまなき
なてどこまも。えつくり給ものが。又母小方（笑ひ）うしろ
めたく。覚して。などかまづこえんとは。さひ給まじ
き。まれは心ちもすこし例なしず。心ぼそきと紀え。
あまうさの中にまづさりつきて。床しくもこのもし
くもこそ覚しのへがくいとおぼつかなきことく。
うしこきこそ給も。又（地）いとことゆりなり。人（抱心あはれ）よりさつさ
なりけるけぢめよや。さりつきて。さひなくひこうを。
いまはなをうしくしなて。志がしもえ。あなぜ。

あらぎづきごろもれなどとさしまあらざりけるに
いとゞもちるさかうじ（柑子）ちどをさしまれて海をぎ
そゞやうくもれまひさいるやうまこし給さるに
とさのいうそくのかく拙しのへだよれ中なしこ
あらしがりてれとふらひまり給ぬ人なし
うち（今上）よりも院（条）よりもれとふらひしたゞく男しいく
いそゞくなしこなげしめしうるまもいとゞしき
なやうちのれこころのこまどふ六条（源）院まもいとゞ口
なしきワざなりとなげしおどろきてれとふらひま
そびくねんごろまらくなとゞまも男し給大（タ）将を
ましていとよきれ中なればげぢうく拙し給ひく

いうじくちげさありき給。(朱ノ)れ、笑ハ女又白まちりま
りがうとされやむごとなきよ遅りのをもく
ワづらひ給ふおやはしらうおまたのへぐさるゐ
うきれちからひの難き。志ほれのへる比ほひまて。
もれすきまじきやうちれど。つきく(月々)まとゞこほり。
つゝとぐるあるをさてやむまじきことちれば。
いでくれぬしとゞまらん。女三(女三)の心のうち
とぞいとおしくらひきてきを給。例の女十寺
のれぞ種。又(朱ノ)れおりしまりすれ(仁和寺)ちまもまうびなさ
ちれ

69038
6A178